587-357
1200501524798
587
357
O
複写

a n k

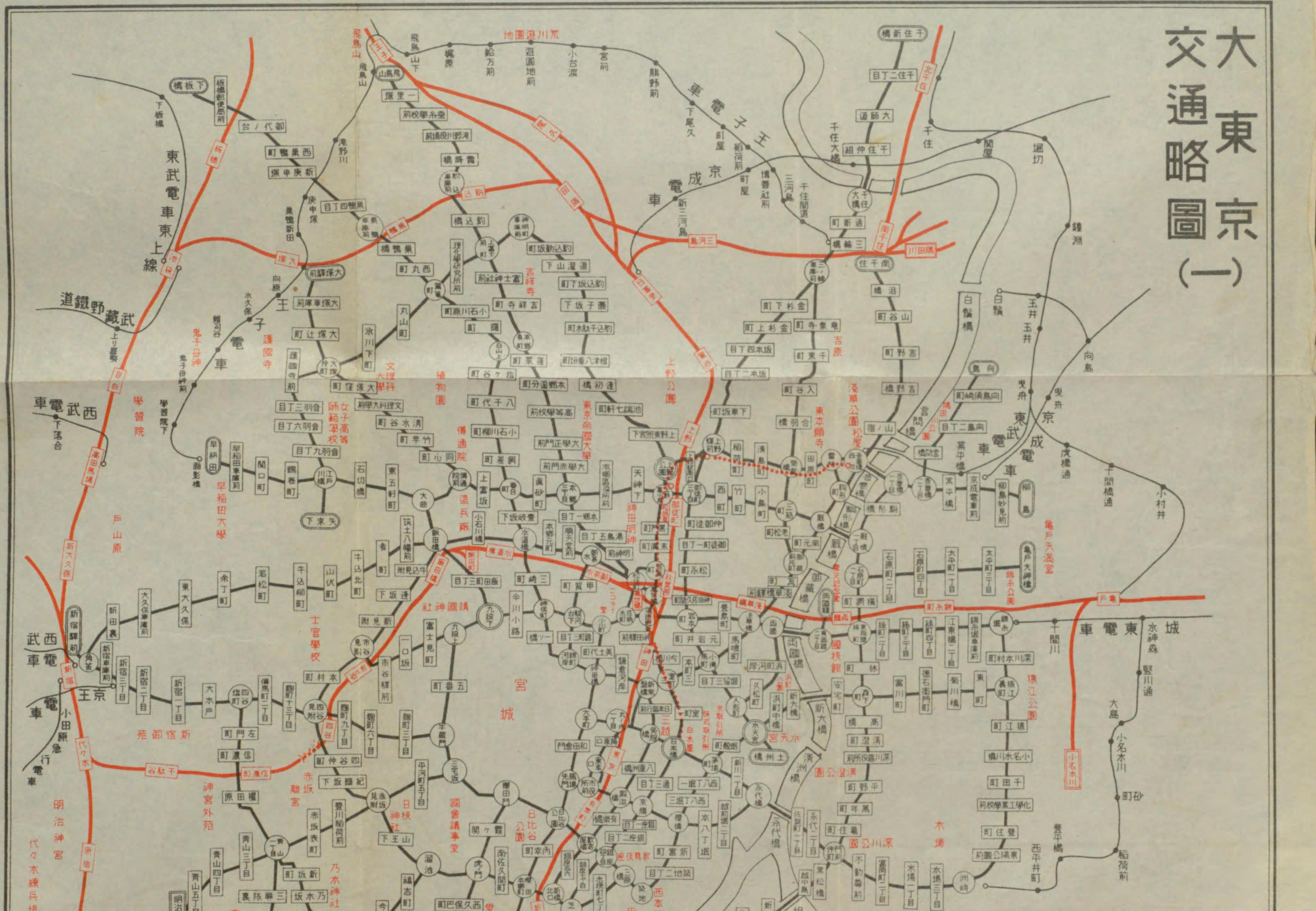
# 大東京物語

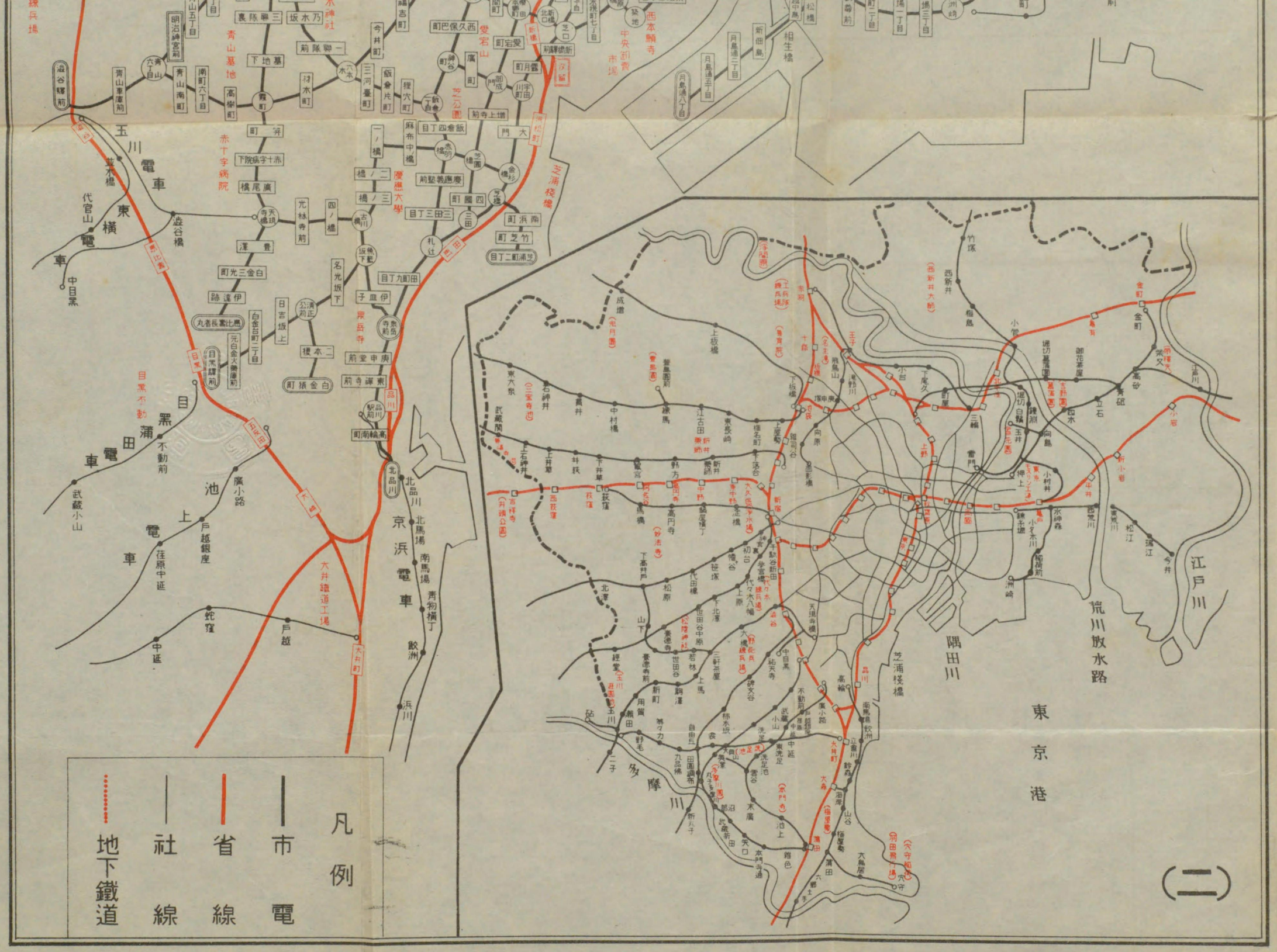
東京市地理教育研究會編著

東京・大阪
東洋圖書株式合資會社
發行

5

# 大東京交通略圖（一）


東武電車東上線
武藏野鐵道
西武電車
王子電車
京成電車
東武電車
城東電車
京王電車
小田原急行電車
荒川遊園地
宮城
新宿御苑
明治神宮


凡例
市電
省線
社線
地下鐵道
玉川電車
東横電車
目黒蒲田電車
池上電車
京浜電車
荒川放水路
隅田川
江戸川
東京港
多摩川
芝浦桟橋
(二)

187-357

# 凡例

一　本書は、東京市地理教育研究會の同人が、教育的見地に立ち最も眞面目なる態度を以て永い月日の間に一歩一歩築き上げた結晶である。從つて之が企圖と着手とは既に五年以前であつたが、大東京市の實現さるゝを機として新市域の記錄をも併せて之を完成し、玆に之を公刊して江湖に紹介すると共に聊か大東京市の實現を記念したい微意である。

二　凡そ現代人は都市に最も關心を持ち都市に多くの興味を有するものである。大東京市を我が國の代表的都市、模範的都市と見做す見地から、之を自然的方面より又人文的方面より或は個々の存在の上に或は月々の出來事の上に記錄を採り、之を詳述し之を物語り、遺憾なく大東京市の紹介に努めた。

三　本書は、大東京市を學問的に眺め稍科學的に研究せんとする士のための眞の大東京案內書たらしめんとしたものである。即ち之が內容は目次の物語る如く、あらゆる方面から精査解剖し且獨特創意の科學的挿畫を多く挿入し以て之が正しき紹介に努めた。

四　本書は、兎角記載的に流れ無趣味に陷り易い此の種の書物の缺を補ふ意味に於て、特に物語の

體裁となし、讀み易く解り易く而も親しみ易いものとした。本書をして現代人の實生活に最も關係深き大東京市の地理的・歴史的・社會的・政治的・經濟的等の意義多き讀物たらしめると共に又文藝的讀物のみに傾き易い現狀を救ふ一助とならしめ得ば幸である。

五　本書は、一般人士にも讀まれたいが、特に小學校の上級生、中學・高女・師範・實業學校・補習學校・青年訓練所等の生徒並に初等中等の學校教師の參考書として他に類なき好適なものと信ずる。

六　本書の卷末に「現行小學校各科教科書教材との聯絡表」を載せ、小學校の修身書・讀本・國史書・地理書との對照を詳示した。よろしく之を活用して各教科學習を徹底させ、延いて鄕土教育、國民教育の實を結ぶの枝折となすを得ば幸である。

七　本書は又大東京市民の鄕土讀本であると共に、全國民の鄕土たる帝都の最新研究資料である。

八　本書の記事並に挿畫は努めて其の正しきを期したが、尙遺漏誤謬等もあらうかと懸念される。幸江湖諸彥の教を俟つて逐次訂正し以て完璧に近付けたい所願である。

昭和七年十一月一日

東京市地理教育研究會

# 大東京物語

## 目次


一　自然の姿に觀たる東京……一
一　武藏野の原……一
二　大東京の地形……五
(1)　山手の臺地……(五)
(2)　下町の低地……(九)
三　臺地と低地との交錯……一二
(1)　分布の狀況……(一三)
(2)　寺とお宮の配置……(一五)
四　大東京の水系……一八
(1)　河川……(一八)
(2)　城濠……(二三)
(3)　堀割運河……(二五)
(4)　海灣……(二八)
五　東京の氣候……二九

(1) 氣溫……（二九）
(2) 風向……（三一）
(3) 雨量……（三三）
(4) 霜と雪……（三三）
(5) 歐米都市との比較……（三三）

二 大東京の建設……三五

一 發祥の時代……三五
(1) 江戸の起り……（三五）
(2) 都市としての礎……（三七）
(3) 太田道灌の築城……（三八）
(4) 城下町の經營……（四一）

二 大江戸の時代……四三
(1) 德川家康の江戸入府……（四三）
(2) 千代田の城……（四六）
(3) 江戸市街の建設……（五〇）
(4) 關東の覇府から日本の首都へ（五五）

三 奠都以後の發展……五七
(1) 帝都の建設……（五七）
(2) 大震火災と帝都の再建……（六〇）
(3) 新市域の發展……（六四）
(4) 大東京の建設から世界の大都へ（六六）

三 人口から觀たる大東京の活動……六九



一 總人口……七〇
二 人口の分布……七〇
三 人口の密度……七二
四 人口の增減……七五
五 性別人口……八一
六 大東京への入移住者……八三
七 晝夜に於ける人口の移動……八四
八 東京人の氣質……八六

四 帝都としての東京……九一

一 帝都としての地理的條件……九一
(1) 帝都の優越的位置……（九二）
(2) 前面と後背地……（九四）
(3) 帝都の防備線……（九五）

二 宮城……九七
三 二重橋前の御苑……一〇〇
四 離宮と御所……一〇三
五 皇族邸の所在……一〇五
五 政治的中心地としての東京……一〇七
一 議院……一〇七
二 中央諸官衙……一〇八
二 各官邸……一一一
四 各國大公使館……一一三
六 産業經濟から觀たる東京……一一五
一 大東京の經濟的特質……一一五





二 主なる移出入貨物……一一七
三 市場の發展……一二〇
四 デパートの活躍……一二四
五 大東京の工業的飛躍……一二七
六 金融機關の活動……一三二
七 株式其の他の取引所……一三五
七 文教學術の淵叢たる東京……一三七
一 小學教育……一三七
二 中等教育……一四〇
三 高等專門教育……一四二
四 圖書出版……一四四
五 新聞……一四六

六　圖書館……一四九
八　大東京の夥しき交通量……一五一
一　大東京の交通概觀……一五一
二　街道の昔と今……一五五
三　自動車の動き……一六〇
四　電車網の完成……一六四
五　地下鐵道の進出……一七五
六　航空路……一七七
七　人を呑吐する東京の三大驛……一七八
八　物を呑吐する東京の三大驛……一八一
九　東京の水運……一八三
一〇　東京灣の現在と將來……一八七



九　文化的都市としての施設……一九四
一　大東京都市計畫の實施……一九四
二　道路……一九八
三　橋梁……二〇六
四　上下水道……二一〇
(1)　上水道……(二一〇)
(2)　下水道……(二二五)
五　公園と墓地……二一八
六　防疫と清掃の施設……二二四
七　社會的の施設……二二七
八　電燈と瓦斯……二三三
九　郵便と電話……二三四
一〇　電力の需給……二四六

一〇 帝都の警備……二四八
一 帝國軍事の策源地……二四八
二 兵營の分布……二四九
三 警視廳と治安維持……二五〇
四 消防署の活動……二五三
五 交通の整理……二五六
一一 舊市内の景觀……二五八
一 山手の繁榮……二五八
(1) 山手の概觀……二五八
(2) 麹町區……二六二
大建築の丸ノ内……(二六五)
九段の附近……(二七〇)
日比谷公園……(二六八)
番町から霞ヶ關附近……(二七二)





(3) 芝區……二七三
芝公園と増上寺……(二七四)
愛宕山と放送局……(二七八)
三田と高輪……(二七六)
芝浦一帶の工場地帶……(二七九)
(4) 麻布區……二八一
飯倉と廣尾……(二八三)
(5) 赤坂區……二八五
青山附近……(二八六)
明治神宮と外苑……(二八八)
乃木神社……(二八七)
(6) 四谷區……二九一
新宿の界隈……(二九二)
(7) 牛込區……二九三
神樂坂通り……(二九四)
早稲田大學……(二九五)
(8) 小石川區……二九六
護國寺と傳通院……(二九八)
植物園……(二九九)

東京文理科大學……(三〇一)
(9) 本郷區……三〇二
帝大と一高……(三〇四)
湯島とお茶水……(三〇六)
理化學研究所……(三〇六)
二 下町の殷賑……三〇八
(1) 下町の概觀……三〇八
(2) 神田區……三〇九
神田明神……(三一二)
古着屋町と古本屋町……(三一三)
神田の市場……(三一二)
駿河臺とニコライ堂……(三一五)
(3) 日本橋區……三一七
日本橋の附近……(三一九)
兜町と蠣殼町……(三二三)
三越と白木屋……(三二三)
金座通り……(三二五)
(4) 京橋區……三二六
銀座の賑ひ……(三二八)
木挽町の界隈……(三三〇)



東京の魚市場……(三三一)
月島の將來……(三三二)
(5) 下谷區……三三四
上野公園と寛永寺……(三三七)
廣小路と松坂屋……(三四一)
谷中の墓地……(三四〇)
お酉樣……(三四二)
(6) 淺草區……三四二
淺草公園……(三四四)
藏前から今戸へ……(三四九)
觀音堂仲見世……(三四七)
三 江東の活動……三五一
(1) 江東の概觀……三五一
(2) 本所區……三五三
隅田公園……(三五五)
國技館……(三五八)
震災記念堂……(三五七)
(3) 深川區……三五九
水の深川……(三六一)
富川町の木賃ホテル……(三六二)
木場と製材……(三六一)

一二　新市域の景觀……三六二
一　飛躍する首都……三六二
二　東部の一帶……三六七
荒川放水路……（三六八）
放水路の東……（三一七）
放水路の西……（三六九）
三　北部一巡……三七三
工業地帶としての北部……（三七五）
細民街の移動……（三七七）
四　西部の膨脹……三七八
山手沿線の發達……（三八〇）
住宅地區の移動……（三八七）
私營電車網の完成……（三八五）
五　南部の充實……三九五
舊街道と京濱國道……（三九六）
京濱工業地帶……（三九九）
現行小學校各科教科書教材との聯絡表……四〇一

——（終）——

# 索引

## ア


藍染川　一八
青山御所　一〇二
青山墓地　二八七
赤坂區　二八五
赤坂臺地　八
赤坂離宮　一〇二
赤坂廣小路　二八三
秋葉原　一八三
淺草區　三四二
淺草公園　三四四
麻布區　二八一
麻布臺地　八
飛鳥山　七・三七四
愛宕山　二七八


## イ


足立區　三七三
吾嬬町　三七〇
穴守稲荷　三九九
綾瀬川　三七一
荒川區　三七四
荒川堤　三七三
荒川放水路　三六八
飯倉　三八三
井荻町　三九一
池上町　三九八
石神井　三九一
石神井川　一八
石濱城址　三五一
移出入貨物　一一七
板橋町　三八一
一里塚　三七五

一本松　一八三
伊奈氏の治水　三六
井頭公園　三九一
今戸　三五〇
入新井町　三九七
岩淵町　三七五
印刷所の分布　一四六

ウ

上野驛　一八一・三四一
上野公園　三三七
上野戰爭　三三六
上野臺地　七
上野廣小路　三三五—三四一
魚市場　一二〇
牛込區　二九三
牛込臺地　八
内濠　二三

馬込町　二九七

エ

英國大使館　一一三
永代橋　二〇九
江戸　三五
江戸川區　三七二
江戸川三角洲　二八
江戸川の谷　一三
江戸市街　五〇
江戸氏の築城　三七
江戸城　二二・四五
江戸子氣風　八七
江戸の段盛　五五
江戸の起原　三五
江戸の水道　五四
江戸の大火　三五九
江戸の要害　九五

江戸橋　二〇九
荏原區　三九三

オ

大井町　六五・三九七
大久保町　三八一
王子　六五・三七五
奥州街道　一五八
大島川　二六
大島町　三七一
太田氏の築城　三八
大森區　三九七
大横川　二六
尾久　六五
主なる公園　二二一
お茶水　三〇六
お酉様　三四一

海上ビル　二六七
礪殼町　三二四
各國領事館　一一三
神樂坂　二九四
霞ケ關　一二二・二七二
葛飾區　三七二
金町　三七二
歌舞伎座　三二一
株式取引所　三二三
兜町　三二三
蒲田町　三九八
雷門廣小路　三四九
龜戸町　三七〇
寛永寺　三三七
神田川　二〇
神田川米取引所　三二三

江麹麹公甲航工工郊公小　下京京醫慶應
　　町　設州　業　業外　石　濱工　祀義
　　盛　町　市街　空　生　地　電　川　水　國業　塾大
索　東地區場道路區領軍國區　コ　道道帶廠學

引

北氣議　闕闕官神神神神神神神神神
　　十　東東東廠　田　田古蒼子田阪上市
　　問　平公管地　明　市氣所街水場區
　　川溫館　キ　野方領帶山神場風　索

引

軍藏久　銀金銀橋京京行宮宮醫市清
　事　通　呼　橋橋幸　部各洲
　機　宮　座座　濱道　區人
　闕前邸　ク　通通行場川區路邸城口橋

五

櫻小駒木小小小五小五護國高江
　寶田　松名手塚原大嘗條國技德東
　寺門　サ　川澤挽木指刑銀務天　市
　　町町町川原地行所神寺館寺場

四

シ

市域發展　六四
寺院の配置　一五
私營電車　三八五
市營電車系統　一六四・一六七
汐留川　二六
汐留驛　一八二
下町景觀　三〇八
下町地質　九
下谷區　三三四
品川町　三九七
品川の館　三九
市内通話區域　二四三
不忍池　三四〇
忍川　一八
芝浦　一八四・二九
芝區　二七三
芝公園　二七四
柴又帝釋天　三七二
澁谷町　六五・三八四
市役所　四三
白金臺地　八
白木屋　二三・三三
社會施設　二二七
住宅地區　三八七
獸肉市場　一三一
十二社　三八三
出版所の分布　一四五
松陰神社　三九二
小學敎育　一三七
淨水場　三八三
上水道　二一〇
省線　一六八
城東區　三六九
稱德寺　三五〇

消防署　二五三
昭和通　二〇一・二二三
職業紹介所　二二九
植物園　二九九
神宮外苑　八四
人口移動　七〇
人口分布　三七七
震災記念堂　六一
震災大詔　三七八
新市域の西部　三六七
新市域の東部　三九五
新市域の南部　三七三
新市域の北部　七二
新市部人口　七七
新市部第一圈の人口　七八
新市部第二圈の人口　七八
新一部第三圈の人口　三六七
新市部町名の由來

新市部の水道　二二五
神社の配置　一五
新宿驛　一八〇・二九二
新宿御苑　一〇四
新橋驛　三三〇

ス

巢鴨町　三八〇
杉並區　三九一
砂町　三七一
隅田川　二
隅田川驛　一八二
隅田川橋梁　三四三
隅田公園　三四三
隅田町　三六九
駿河臺　三一一・三一五

青果市場　一三一
生花市場　一三三
清正公　二七八
聖堂　三〇六
西部の野菜畑　三七四
世田谷區　三九二
世田谷町　三九二
泉岳寺　二七八
千川（小石川）　二一
千川上水　五四
千軒長屋　三七七
千住町　六五・三六九
淺草寺　三四七
千束池　五一
洗足池　三九七
仙臺堀川　二六
千駄谷町　三八三

ソ

増上寺　二七四
速達郵便區域　二四一
外濠　二三
ソヴィエト大使館　一二三

タ

第一高等學校　三〇四
大公使館　一二三
大正通　二〇一・三一一
大東京建設　六六
大東京の道路　二〇五
大名小路　二六三
大名の配置　五一
高田町　三八一
高輪臺地　八
高松宮邸　一〇五
瀧野川町　六五・三七五
竪川　二六







玉川　三九三
玉川上水　五四・二一一
溜池　二八六

チ

地下鐵道　一七五
秩父宮邸　一〇六
千葉街道　一五九
中等教育　一四〇

ツ

築地　五一
築地魚市場　三二一
月島　三二一
佃島　五一・三二三

テ

帝國大學　三〇四

帝都復興　六一
締盟國祝祭日　一一三
寺島町　三七〇
寺町　五二
傳通院　二九八
天王寺　一六・三四〇
天文臺　二八三

ト

東京驛　一七九
東京港　一八七
東京人氣質　八六
東京奠都　五七
東京文理科大學　三〇一
東京の人口　六九
東京の防備　九六
動物園　三四〇
常盤橋　四一

都市計畫の沿革 一九四
圖書館 一四九
豐島區 三八〇
戸塚町 三八二
富川町 三六二

ナ

内閣 一〇九
内藤新宿町 二九一
中仙道 一五八
永田町 一二二
中野區 三九〇
梨本宮邸 一〇六
楠公銅像 一〇一

ニ

ニコライ堂 三一六
西新井大師 三七三
西巢鴨 六五・三八一
二重橋前大廣場 一〇一
新田神社 三九八
日暮里町 六五・三七五
日本勸業銀行 一三三
日本銀行 一三三
日本興業銀行 一三四
日本橋區 三一七
日本橋通 五一・三一〇
人形町 三一五

ネ

根津谷 二〇
練馬町 三八八

ノ

野方町 三九〇
乃木神社 二八七

ハ

博物館 三四〇
箱崎町 二六
旗本五人男 三五四
羽田飛行場 三九九
濱町 三二五
濱離宮 一〇四
番町 二七二

ヒ

聖橋 三一七
日比谷公園 二六八
碑衾町 三九三
姫池 五一
平河御門 二五
廣尾 二八五

フ

吹上御苑 四六・一〇〇
伏見宮邸 一〇五
深川區 三五九
深川情調 三六〇
佛國大使館 一一三
ブラジル大使館 一一三
古本屋町 三一五

ヘ

兵營分布 二四九
米穀市場 一三一
米穀取引所 三二四
米國大使館 一一三

ホ

北條氏 四三
墓地 二一三
堀切園 三七三

本郷區　三〇一・三五三
本郷臺地　七
本郷のかねやす　三〇二
本田町　三七三
本門寺　三九八

マ

松坂屋　一二五・三四一
松澤　三九二
丸の内　二六五
丸ビル　二六六
丸山　二七六

ミ

三河島　六五・三七四
三越　二二五・三二二
三菱原　二一
南千住町　三七四

ム

昔の街道　一五五・一九八
向島　三五六
武藏野　一
武藏野臺地　三七八
村山貯水池　三二四

メ

明治神宮　二八八
目黑川　二
目黑町　三八四

モ

楓川　二六
門前町　五三

ヤ

矢口町　三九八
靖國神社　二七〇
谷中墓地　三四〇
柳原　三二四
山手景觀　二五八
山手の人口　二六一

ユ

郵船ビル　二六七

ヨ

四谷區　二九一
四谷臺地　八
淀橋町　三八二
代々幡町　三八三

リ

理科學研究所　三〇六

雨國川開き　三五九

レ

靈巖島　五一

ロ

六郷町　三九八

ワ

鷲神社　三四一

（終）

# 大東京物語

## 一　自然の姿に觀たる大東京

### 一　武藏野の原

「武藏野は月の入るべき山もなし
尾花が末にかゝる白雲」

曠野蒼茫、眼界かぎりなき武藏野は、早くも奈良朝の頃から詩歌の題材として、吟詠今日に殘れるもの少くないが、しかし、まことは東夷の棲む無氣味な荒野として、都人には未だ見ぬ其の風物のすべてが、恐ろしく怪奇的な聯想をしのばせたものである。

平安朝の中頃、在五中將業平朝臣が、遠く京都を離れて偶々草深き武藏野の國へ遍歷し、隅田川の渡しで舟人から、折から江上を去來する嘴と脚の赤き鳥が、これなむ都鳥だと敎へられ、

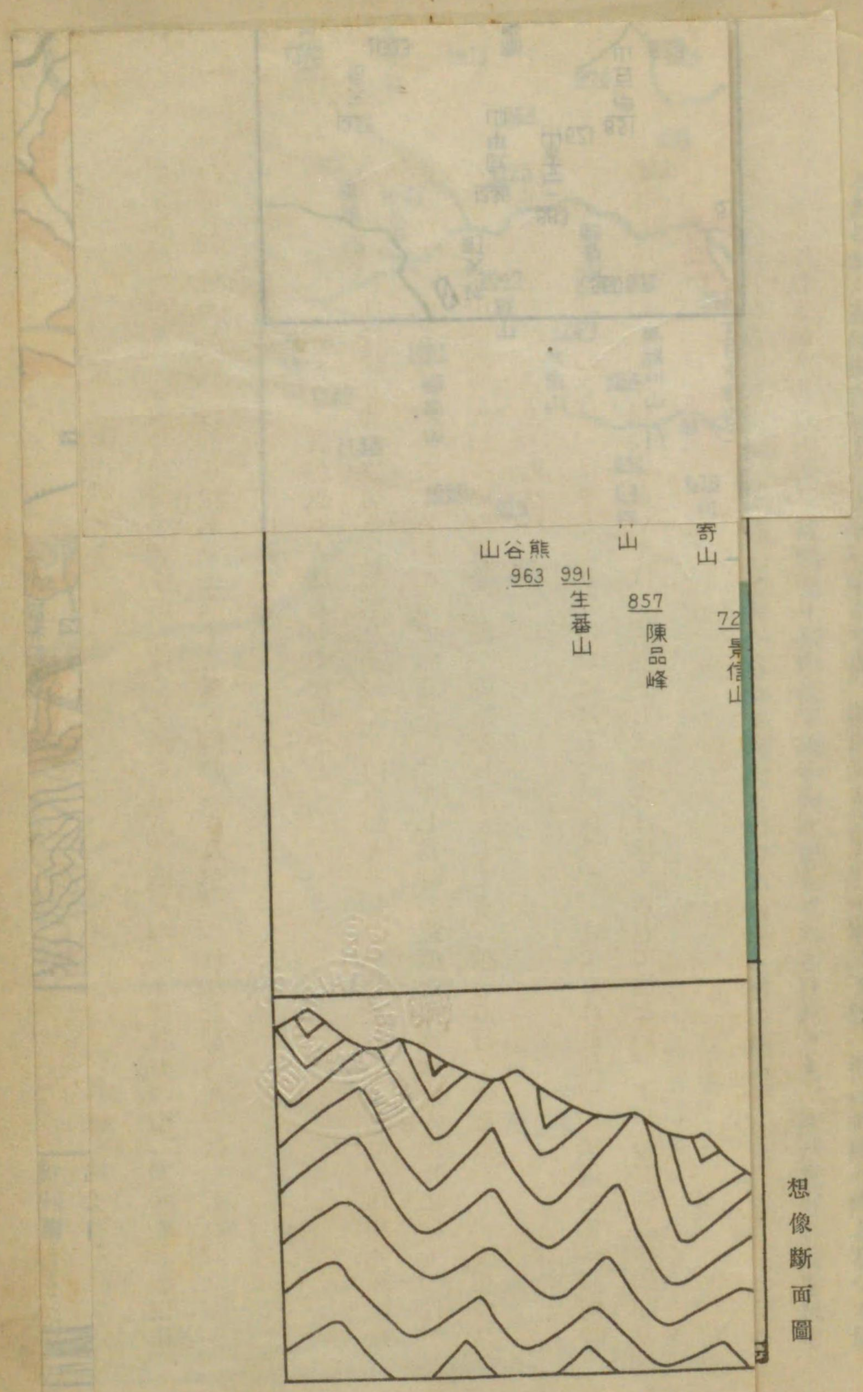
「名にし負はゞいざこと問はん都鳥　我が思ふ人はありやなしやと」

と、都戀しさの餘り其の哀切なる旅愁を詠じて、同舟の人々を泣かせたといふ話は、伊勢物語に載せられて、今も人々に膾炙するところであるが、けだし當時の荒凉たる武藏野の風物に接しては、恐らく白馬銀鞍の、此の多感の貴公子業平朝臣ならずとしても、越し方行く末を察して、旅愁の哀切亦一入であつたことと思はれる。

斯くて武藏野の名は、はやくより人の口には上つて居たが、さてこれを地理的に觀たる時、何時の頃にも其の範圍や地域に就いては、漠然として確說は傳へられて居ない。江戸幕府創設の顧問として名高い

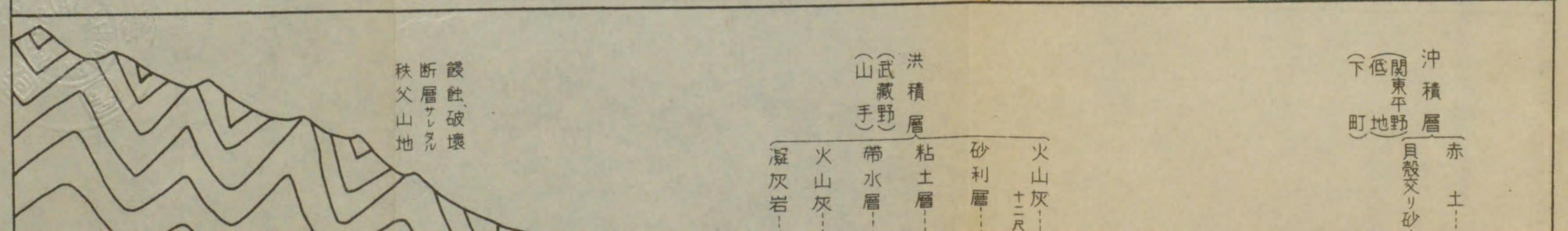
林羅山の丙辰紀行には、

「名に負ふ武藏野は月の入るべき山もなしといひしは、誠にそこばくの蒼莽を過ぎて、又蒼莽なり、此の國の稻毛・葛西・越谷・岩槻・河越・鴻巢・忍なども皆武藏野の內にて侍る」




想像斷面圖

# 武藏野略圖




林羅山の丙辰紀行には、

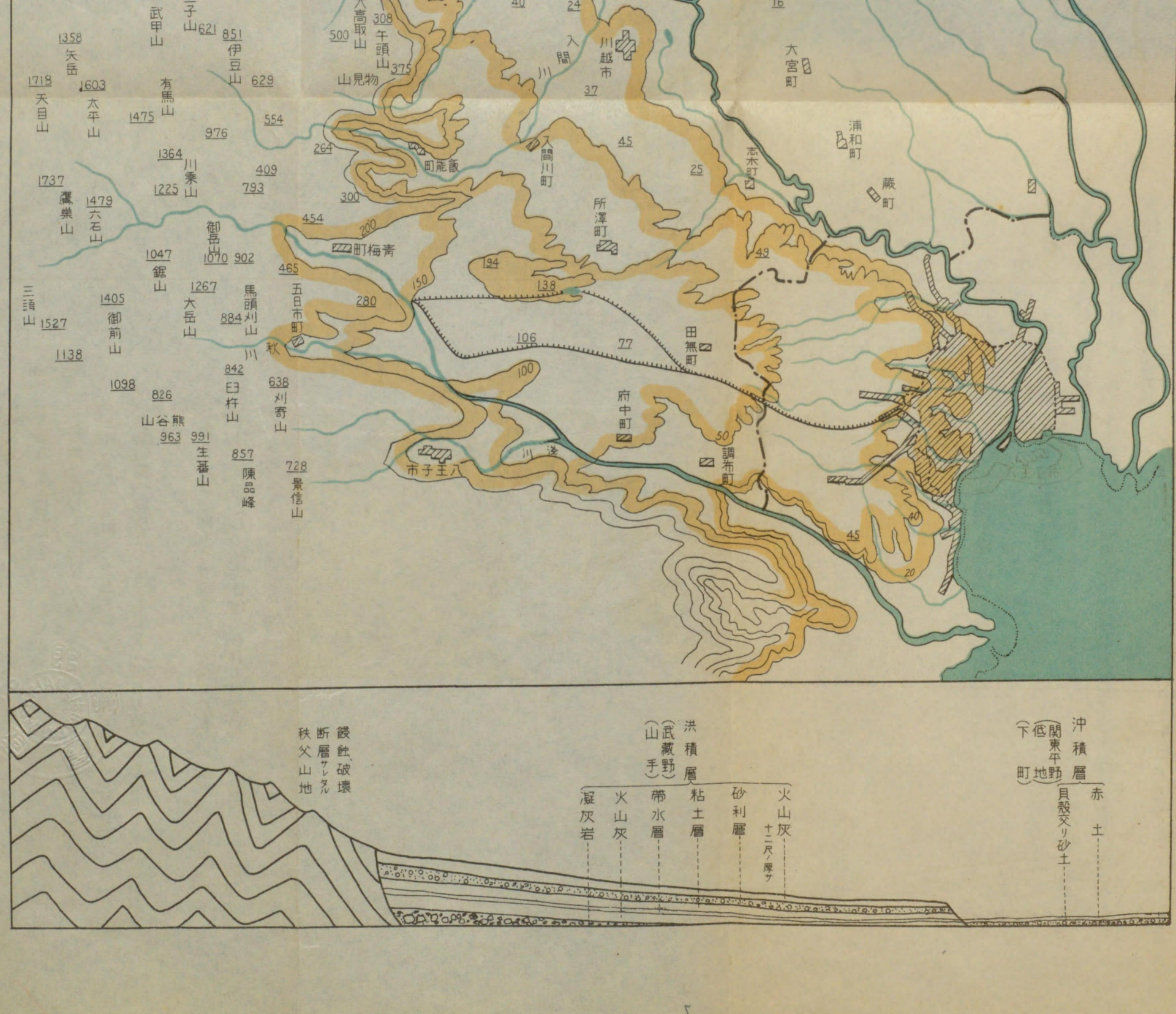
「名に負ふ武藏野は月の入るべき山もなしといひしは、誠にそこばくの蒼莽を過ぎて、り、此の國の稻毛・葛西・越谷・岩槻・河越・鴻巢・忍なども皆武藏野の內にて侍る」

想像

して名高い

林雞山の丙辰紀行には、

「名に負ふ武藏野は月の入るべき山もなしといひしは、誠にそこばくの蒼莽を過ぎて、又蒼莽なり、此の國の稻毛・葛西・越谷・岩槻・河越・鴻巢・忍なども皆武藏野の内にて侍る」




想像斷面圖

とあるが、五代綱吉將軍の貞享の頃までは、隅田川を境として東は下總、西は武藏の國となつて居たのであるから、行政上からは稻毛・葛西は下總の國に屬してゐるけれども、江戸近郊の故を以て一般には、武藏野の地域に包括して考へられて居たものであらうと思はれる。

吉田博士は其の著地名辭書に、

「南方相模野に隣り、北方利根川に至り、西界は秩父・甲斐に連れる高峯峻嶺を仰ぎ、東は江河及び滿灣を相限ると謂ふべき歟。されどこれ利根水系、坂東平野の一部を指したるにて、本來の大形勢より云へば八州平野の最廣を擧げて、特に武藏野といへるなり。故に古今遊覽登望の人、往々武藏野の廣大なるを感興するに、坂東平野全域と同一にして、相分つなきことあり、而も、狹く取れば府中河越間、即ち江戸の西北郊に連れる地、最も平曠莽蒼なりければ、特に指して武藏野と呼ばれ、近世に至るまで田宅多からず。」

といつて、武藏野を廣狹二樣に說かれてゐる。

けだし武藏野の名は、古くから一般には極めて通俗的に用ひられたものであらう。

廣袤實に一千餘方里、我が最大の關東平野が、往昔交通機關の未だ極めて幼稚であつた頃、旅人にとつて如何に殺風景の所であつたかは想像に難くない。

殊に今でこそ開拓普ねくして、人煙最も稠密に、島帝國日本の大切な寶庫として、我が王城の後背地を形成して居るが、古はなほ蒼莽到る處に存して、荒野の間僅かに狹徑隘路を通ずるのみであつたに違ひない。

江戸・鎌倉を發足して奥の關門白河の關に達するまでの間、旅人は前路の不安を胸にしながら、幾日となく此の曠野の間を彷徨つて宿を求めたことであらう。

斯様に考へると今日の豐穣肥沃の大平野も、當時の旅人にとつては、誠に不氣味な存在であつたことと考へられる。而も之が武藏の國の核心として、所謂坂東八州が一廓をなしたる頃のことであつたから、旅人は此の曠野を武藏野の連續として、廣い地域を此の名の内に包括し去つたのも決して無理とは思はれないのである。

かくて廣義の武藏野が考へられる様になつたのであらうが、然し今日一般に地理的に觀たる武藏野は、入間川・荒川・多摩川を以て、それ〴〵北・東・南を限り、西は屏風の如くに屹立した關東山麓にまで擴がれる狹義の部分である。高さは大抵十米から百五十米位までの間であつて、青梅町の西では最高二百米に達す。

東京上野の臺地が標高約二十米で、其の間は直線距離で約四十五粁を隔てゝ居るから、結局百八十米だけが四十五粁間の落差となつて居るわけで、傾斜の誠に緩かな事がわかる。

地表一帶には緩漫なる波狀の起伏あり、高いところは桑園・麥圃として開墾され、次第に東京市に接近するに從つて、蔬菜畑と代り、更に一轉して住宅として相連る。

「さてもその昔、見渡す限りの草と木の荒野原、春は紫草の花匂ひ、秋は銀穗風にゆらぎ、夏草茂る中に逃水の音、雪の冬野に鳥の足跡殘る荒寥たるところ、狐狸の棲家であつた此の武藏野原の南東部、臺地と臺下に連る低地に跨つて、現今世界文化の粹を集めて、絢爛たる光彩を放てる吾等の帝都、人口實に五百萬を包含する世界第二の大都、大東京の繁榮を見るに至つたことは、誠に桑蒼の感に堪へざるものがある。

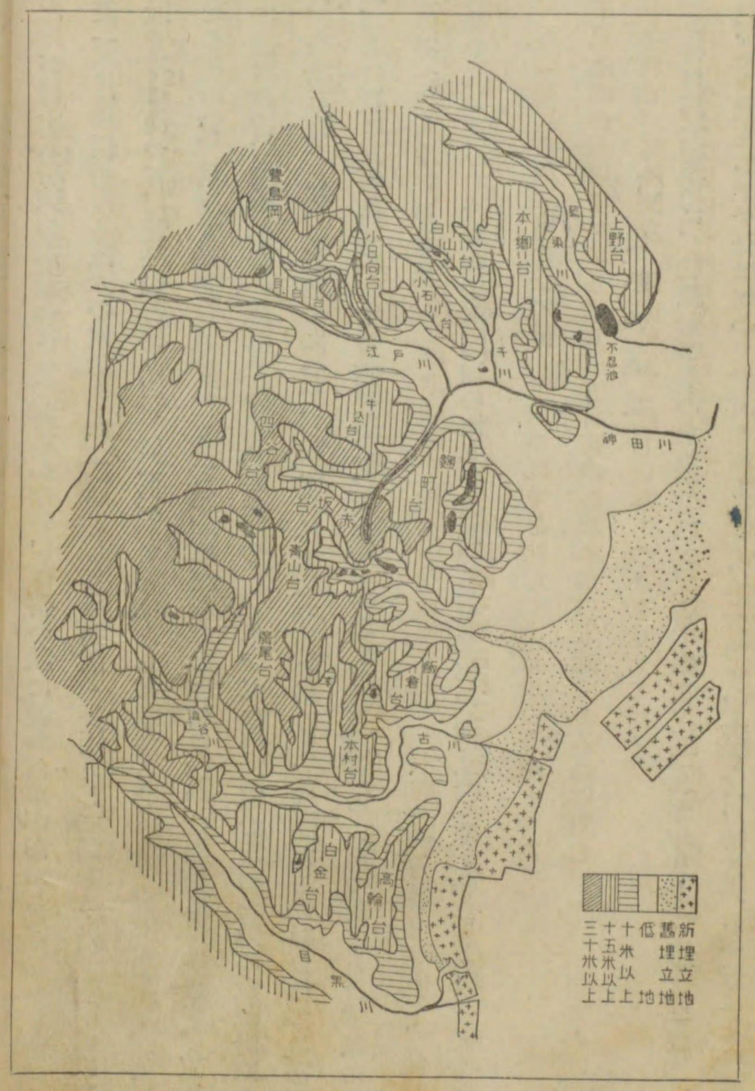
いでや筆を改めて吾等八千萬同胞の懷しき帝都、世界文化の都、大東京を物語らう。

## 二　大東京の地形

### (1)　山手の臺地

吾等の帝都大東京は、武藏野臺地の東端部と、其の東方荒川の流れが作り上げたる沖積地、及び東京灣岸に發達した平野に跨つて建設されて居るのであつて、古く江戸時代から一般にその臺地部

東京の地形






を山手、低地部を下町と通稱されてゐる。

勿論、山手といつても一面の臺地ではなくて崖端から、頭部浸蝕によつて出來た谷が入り込んでゐるために、臺地面はいくつかの地域に分割されて、其の輪廓は複雜參差を極めてゐる。而してその水蝕谷には所々に池沼を作つて地下水を湛へ、河水の水源となつてゐるものが少くない。

臺地の一番北にあるのが標高二十七米餘の飛鳥山で、東北線に沿つて崖を作り、南東に延びて上野臺地となる。上野公園の東部、西鄕南州翁の銅像のある邊りは高度十七米餘に過ぎないが、崖の端が急に低地に落ちて居るので、下町一帶への展望には誠に誂へ向きである。

上野臺地の西には、不忍池や根津に續く藍染川の低地を隔てゝ本鄕湯島の臺地がある。此の臺地は南は一旦外濠によつてお茶の水附近で人工的に斷ち切られるけれども、再び現はれて駿河臺となり、西は春日町から指ケ谷に續く千川の低地を挾んで小石川の臺地と相對す。

不忍池畔が海拔僅かに五米で、春日町のあたりが六米餘であるのに對し、一高・帝大の附近は約二十三米で、高燥閑寂、學園にふさはしい落ちつきを見せて居る。

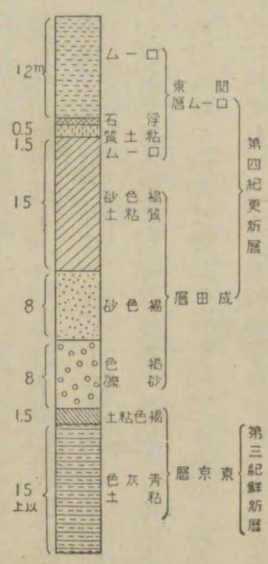
小石川臺地は更に茗荷谷や、音羽の低地によつて表町臺、小日向臺、關口臺、護國寺臺、目白臺等の數區に分れ、南方は江戸川の低地を隔てゝ牛込の臺地を望む。

牛込臺地は江戸川と其の支流に當る市ケ谷の低地の間に挾まれて、肴町の邊りでは十四米餘に過ぎないが、次第に上つて若松町の附近では三十米を越え、其の儘西に延びて大久保から戸山が原に續く。

更に其の南に之と相對する四谷・麹町の臺地は東京に於ける山の手臺地の中央根幹をなすものであつて、其の東端部はかつて約五百年前太田道灌の築城したるところ、徳川家康も此處に千代田城を築きて三百年覇業の基を開き、今日亦我が日の本を統治す聖天子のおわします宮居の處もとゝである。臺地の永田町附近は海拔二十七米餘、三千萬圓の巨費を投じて現に建築中なる國會議事堂は、附近の諸官邸等と共に魏然たる其の風色、よく此の臺地に於ける人文上の特相を示して居る。

四谷・麹町臺地の南には櫻川の谷を隔てゝ赤坂・麻布の臺地があり、更に其の南には澁谷川と目黑川の低地に挾まれて白金・高輪の臺地がある。共に高度は三十米内外に過ぎないが、崖端概ね直ちに低地に迫つて居るので、感じから來る人文上の影響は高低による實質以上であつて、臺上と臺下とでは其の風物自ら著しく異なつて居るのは面白い。

斯くて上野から南々西に走る是等の崖端は、其の間に多くの谷を彎入せしめて複雜を極めて居るが低地に落ちる處は略ぼ一線に連る急崖を成して、往昔海波の浸蝕によつて造られた事を示して居る。又其の地質は表面は堀埒で覆はれて居るが、其の下は厚い砂礫層で、河流が淺海又は海岸に堆積した三角洲であることが明かである。蓋し荒川・多摩川間に延亘せる武藏野は、かつて多摩川によつて堆積されたる三角洲であつて、東京附近は實に其の東端に當るものであると云ふ。則ちもと人が此の世に棲息する以前の頃、河は自由に流路を變じて堆積を擅にしたが、更に其の後土地の隆起と共に、川は嘗つて堆積したるものを侵蝕して、臺地面上に幾多の高低を附し遂に現地形に近いものを形成するに至つたのであると考へられる




### （2）下町の低地

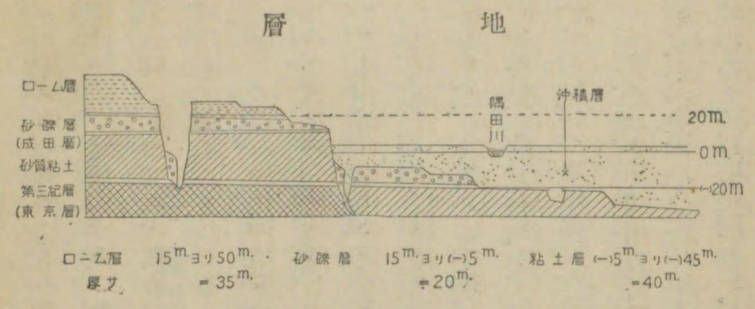
臺地を山手と云つたのに對して、低地を下町と呼んでゐる。海面上の高さは僅かに二米乃至五米に過ぎず、殆ど高低のない一平野をなしてゐるが、地下には隱れたる臺地の伏在するところがあり、又舊河床の隱れたる谷をなせるところもあつて、沖積層そのものの厚さにはところによつて多大の相違がある。

河川や、堀割が縱横に通じてゐて、山手の高燥な地域に比べると之は又卑濕の水域をなしてゐる。

元來下町の低地は太古東京灣の陷沒に伴つて一度は海底に沒し、漫々たる水波の下の魚族のためには好箇の繁殖場であつた所であるが、其の後是等の地域は徐々に隆起すると同時に、諸川の齎らす土砂によつて漸次埋め立てられ、現今の沖積平野と化したるものであつて、地質學上のいはゆる現代層に屬するものである。

而してこの現代沖積層は泥土と細砂の累層から成つてゐるが、その中には牡蠣を主とする海棲貝類の介殼を多分に埋藏して、それが淺海の堆積層であることを示してゐる。桑田變じて蒼海となることは昔から變化の最も著しいものとして諺にさへなつて居る程であるが、東京の下町は蒼海變じて高樓櫛比、車馬絡繹たる文化の大都市となつた譯で、此の點では桑蒼の語も全く顏色なき次第である。土地を構成して居る泥土及び砂は大抵暗灰色で、多量の水を含んでゐるので凝結度は極めて低い。故にその層の厚いところほど地盤は脆弱で、大地震に際しては震害を被むることが多いのである。

江東の本所・深川方面では沖積層の厚さは二十二米乃至三十米を普通とし、深川東南部では五十米を超える。それより西、淺草新谷町附近から芝浦埋立地にかけて地下に伏在する第三紀臺地の緣邊に近づくにつれて、沖積層の厚さは次第に薄くなり、下部には砂礫層が發達する。




この地下に伏在する第三紀層の厚薄は前述の通り震害の大小に關係あるもので、神田三崎町の今川小路邊から丸の内をへて、日比谷公園芝浦に及ぶ一帶の低地が元祿・安政及び大正年度の大地震に際して、いつも被害の甚だしかつたのは、神田川の溝狀舊河谷内に堆積した軟弱な沖積層の厚いためであることが、復興局で成された東京の地下地質調査によつて證明された。

舊石神井川の河床に當る下谷・外神田の一部も、同じ理由によつて震災の激しい部分である。

之と反對に駿河臺下の小川町から、神田橋・常磐橋・京橋・新橋を經て芝口に至る一帶の部分には、第三紀層の隱れた臺地が岬のやうに突出し、その上を蔽ふてゐる沖積層の厚さは五米以内で、下町低地の中に震害輕少地の島をなしてゐるのである。何處でも同じ樣に地價の高低は地表に於ける環境的價値の大小によつて決せられるのであるが然し東京の樣に屢々震災の苦しい經驗を嘗めさせられる處では、どう

しても震害の大小、換言すれば土地の震災に對する抵抗力の强弱と云ふ點から、地下に於ける構成關係も亦大に考慮されねばならぬ筈であると思ふ。

## 三　臺地と低地との交錯

### (1)　分布の狀況

山手臺地と下町の低地とは、二十米内外の斷崖や急斜面で相接してゐるが、これは斷層によつて今の崖下の地が陷沒したのと、崖下が海波の浸蝕によつて後退したのとに原因してゐるのである。

日比谷も銀座も日本橋も、唯見る一面海波の下、渺茫たる水面には名も知らぬ水鳥の群れ游ぶを望むのみ、上野から本郷、麴町と臺地の下は所謂波打際で、「春の海日ねもすのたり〳〵かな」であつた往古の景觀は、今日車馬絡繹、肩摩轂擊の大繁昌振りだけを見せられて居る。東京人には、一寸想像がつき兼ねるのである。

さて今その斷層源を見るのに、南は高輪臺から北は上野臺にかけて、即ち南西から北東へ走る一線と、上野臺から荒川の流路に並行して、南東から北西へ向ふ一線とが主なものであつて、前者には湯島・神田明神間の崖、芝愛宕山の崖、高輪の崖等が著しいものであり、又後者では上野から鶯谷を經て赤羽に到る間、鐵道東北本線に沿つて略ぼ一直線をなす崖が最も目につく。而してこの二大斷層線は上野臺の東端でほゞ直交してゐるが、更に之に平行するいくつかの小斷層線があつて、各所に浸蝕谷や雨谷を發達せしめ、かくして臺地と低地とは到る處で相交錯して東京の地形を支配して居るのである。

就中その最も著しいものを擧げて見ても、南では北西から南東の方向に走る目黑川の谷と、古川の谷とが入り込んで高輪臺を突出して居るし、本村臺と飯倉臺との間や、飯倉臺と麴町臺との間にもほゞ之と同方向の低地が喰ひ込んでゐる。又麴町臺の北方、牛込臺と小石川臺との間には江戸川の谷があり、小石川臺と本郷臺との間にも小石川の谷があり、本郷臺と上野臺の間には逢染川の谷があつて、何れも北西から南東の方向を取つてゐる。

されば是等の谷も亦多くは斷層線に基づくものであつて、なほ之と直交する南西から北東へかけての谷は多くは前者に較べて小さな谷ではあるが、本村臺と青山臺との間、青山臺と代々木臺の間青山臺と四谷臺の間、麴町臺と市ケ谷臺の間等に發達したる谷等、其の數は決して少くない。

外帶地域でも江戸川の上流舊神田上水の谷と、小石川の上流舊千川上水の谷、及び石神井川下流の谷とは、ほゞ一線をなして、是等と同一方向を取つてゐる斷層線である事を示して居る。

即ち臺地面は北西から南東、北東から南西の二方面にもつ幾多の谷を作つて低地と連續し、これ等二線による谷に挾まれた臺地の尖端は、或は突出して岬角の如く、或は又頸られて島の如く低地に屹立するので、昔から御殿山・丸山・愛宕山・紅葉山・神田山・上野山・道灌山等、山の名を以て呼ばされて居るのは面白い。

蓋し、祖先以來永の年月を此の低い荒川の沖積平野に住み暮し、山と云ふものに就て明確な觀念を缺如した江戸の人々には、此の僅か二十米内外に過ぎない臺地も、可なり壯大な實感を其の腦裡に刻した事と思はれる。元來吾等の知覺に於ては、垂直線は水平線に較べて過大視される傾向のあるものであつて、即ち立てるものは横はれるものよりも常に雄大の感を加へ、誇張・興奮・刺激の念を生ずるものである、平地に於ける百米の距離は、三歳の小兒と雖もよく歩み盡すことが出來るが、之に反して垂直的に懸れる百米の高さに對しては、何人も唯だ嶮崖を仰いで長嘆息する計りでよく之を攀ぢ登る勇氣を起すものは恐らくないであらう。凡そ人の眼の高さは大體先づ一米半位であるから、二十米の高さと云へばさつと此の人の眼の高さの十四倍位になる。若し遠方から眺めたとしたら、僅か二十米位の土地では殆んど人の注意を惹かない位のものであるけれども、東京に於ける是等の臺地は、何れも可なり急な崖をなして平地に落ちて居るので、人は容易に臺地の麓迄進んで是を見上げる事が出來る。されば斯んな風に考へて來ると、人の眼の位置に對して其の約十餘倍もの高さを持つ是等の臺地が、長い年月を其の麓續きの下町に住む江戸つ子達に、如何に嚴しい感じを與へたかは想像に難くない。同じ江戸の土地でありながら、山の手と下町では住民の氣風に大きな相違があつたのは、其の原因がこゝらにもあるのである。

### （2）寺とお宮の配置

東京の寺やお宮の位置を調べて見ると、其の配置についても亦多くの興味ある事實が發見される。即ち其の多くが江戸の防備上樞要の位置を占めて居る事から觀ても、舊幕時代爲政者の用意周到振りが窺はれるし、又大抵が下町平野を俯瞰する臺地の尖端に建てられて居る事からしても、其處が如何に日夕江戸住民の崇敬の對象地であつたかも判るのである。

高輪臺の東端には赤穗四十七士の墳墓で名高い泉岳寺や、英吉利公使襲撃事件で有名な東禪寺があり、本村臺の南東端には善福寺、飯倉臺の東端には三緣山增上寺、愛宕山には萬年山青松寺がある。

飯倉臺の愛宕山との間の谷に面して西久保八幡神社・虎門金刀比羅宮・溜池に臨んで赤坂臺に氷川神社、山王臺に日枝神社があり、九段上には靖國神社、市谷臺の外濠の低地に面して市谷八幡、

牛込臺の北端には赤城神社がある。江戸川低地に面する處には、目白臺に目白不動の長谷寺をはじめ多くの寺があり、小石川臺には傳通院、白山臺には白山神社、湯島臺の崖上には江戸の氏神である神田明神や湯島天神が奉祀され、上野の山には江戸城の鬼門鎭護として東叡山寛永寺の大伽藍が建てられて幕府累代の信仰を集めて居たし、又麴町臺地の突端には千代田城が築かれて、江戸幕府の治政二百六十餘年の間、よく全國三百諸侯を威壓して居たが、今日では我が日の本を統べ給ふ一天萬乘の君の宮居の處となつて居る。

音羽の谷の奥にある豐島岡の護國寺は、五代將軍綱吉の生母桂昌院の發願によつて創建された大伽藍で關東に於ける眞言密敎の靈場として知られ、又藍染川谷の支谷に臨む谷中天王寺は、維新當時迄は殿堂の壯大を誇つて居たのであるが、兵火に罹つて燒失し、今では僅に五重塔だけが墓地の間に巍然として聳え、都塵を避けて閑寂な一地區を形成して居る。低地にも所々に寺域を存す。築地の西本願寺・日本橋小傳馬町の諸寺・淺草の淺草寺・東本願寺・深川の靈巖寺・淨心寺・深川八幡、本所の法恩寺等はその主なるものであつて、山の手の諸社寺が多く貴族を對象としたるに對し是は主として下町平民の信仰を集めて居たのである。

さて是等東京に於ける寺やお宮の配置は、大抵臺地の尖端低地に臨む所の要地を占めて居るが、中にも增上寺、寛永寺は南北相對して臺地と低地に亘つて要路を扼し、神田神社・日枝神社は南北東西の街道の辻を要し、又低地に於ても最も防禦に困難を感ずる廣い場面の淺草・下谷には廣大な寺院を設けられて居るし、海に面する築地には本願寺の寺域がある等、信仰と防禦を兩天秤にかけた爲政者の用意周到振りには全く感服させられる。

太田道灌は江戸築城に際して、軍事上の見地から江戸城を中心として神社・佛閣の配置をなしたと云ふ事であるが、德川時代になつてからもこれを其のまゝ利用する外に、なほ要所々々に建立して江戸の守備を完全ならしめた。

例へば神田明神、湯島天神等は、古くからあつたお宮であるが、城下の發達に伴つて外濠外において山手と下町との接觸地にあるから江戸の守備の上から特に此處に注目して、大に社殿を修めて市民の信仰を壯んにしたのである。元來武家政治においては武士道の精神として戰亂に當つても、神社・佛閣を害さないといふ風があつたので、廣い境內をもつた社寺が要所にあるといふことは、一旦緩急ある場合に兵を屯して、守備をなすのに屈强な場所を、容易に得られる便宜があつたのである。

## 四　大東京の水系

### （1）河　川

東京の水系には、武藏野臺地面に狹くて而も深い谷を作り、或は斷層谷を流れて低地に出で東京灣に注ぐものと、其の儘直ちに隅田川の水に合して流れるものとの二樣の河川がある。隅田川に合するものは藍染川・石神井川・神田川を主とし、東京灣に注ぐものでは古川・目黑川等が其の著しいものである。

藍染川は本鄕臺と上野臺の間を流れて不忍池に入り、再び忍川となつて下谷・淺草の低地を東へ流れ隅田川に注ぐ細流であるが、現今其の流路は殆んど、暗渠となつて居るがために、人の注意を惹かない事は勿論、又河川としての活動も全く見られない。然し此の川は大昔は石神井川を上流として、水量も多く、常に濁流を押し流して東京の今日の地形を作る上には大きな勢力であつたのであるが、其の後石神井川が飛鳥山と王子權現との間に狹い峽谷を作つて、荒川平野に排水する樣になつたので、急に水量を減じて今日の樣な貧弱なものになつて仕舞つたのである。藍染川が分水界移動前には相當の水量を持つて居たものである事は、其の下流が本鄕湯島臺の下から神田柳原の方



大東京の臺地及水系

面にかけて、沖積層下に深い谷を作つて居る事によつても判るし、又本郷駒込臺と上野谷中臺との間に展開する根津の谷地は一の斷層谷であるが、此の幅の廣い斷層谷が、今の藍染川の樣な細流の作つたものでないことによつても證明される。隨つて此の川は今日では誠に見る影もない細流であるが、地形學上からは頗る興味のある問題を吾等に提供して居るのである。

石神井川は源を遠く田無町の南に發し、石神井村で三寶寺池の水を合せ、臺地上を蛇曲しながら東に流れ、板橋から瀧野川に出て音無川となり、飛鳥山と王子權現臺との間に狹い峽谷を作つて荒川平野に排水して居る。

神田川は上流を井頭池に發し、東南東に向つて和田掘に出で、北東に轉じて善福寺池から出る善福寺川や、杉並町から來る阿佐谷川を併せ、落合町で妙正寺川と落合ひ、流路を東にかへて江戸川となり、外濠と合して神田川となり、千川を入れて湯島臺と駿河臺の間を切つて、兩國橋の北方で隅田川に注いでゐる。

昔は麴町臺の崖下に沿ひ、九段坂下から丸の内に入り、芝浦で海に注いでゐたのを、江戸築城のとき本郷臺の一部を横切つてお茶の水の切割を作り、人工によつて今の流路に移したものである。

神田川は開鑿以來何回も浚渫せられたが、萬治年間仙臺の伊達侯が將軍の命を受けて溝渠を更に深くするに及んで舟運を通ずるに至つたので、一に仙臺堀とも呼ばれる。

兩岸數十丈の斷崖には樹木が生ひ茂り、頗る風趣に富んで居たので、月明の夜舟を浮べる文人墨客も少なからず、或は小赤壁と呼ばれ又茗溪の名もあり、明治時代には東京の一名所であつたが、今では震災の爲に崖を崩され、石を以て疊む樣になつたので、以前の樣な懸崖の美しさもなく、河の水も亦汚水に穢されて昔の清流は見る由もなくなつて仕舞つた。

千川は小石川とも呼ばれ、長崎町から來て北東北に流れ、下板橋で大曲して方向を南東にとり、小石川植物園前を通り、白山から來る細流を合せ、水道橋の近くで神田川に合してゐる。

古川は上流を澁谷川とも云ひ、四谷臺の南方に發して南西に向ひ、澁谷で代々木川を合せ、東に轉じ古川となり、再び屈折して芝浦で海に注いでゐる。

目黑川は源を深大寺池に發していくつもの細流を併せ、東流して目黑に至り南東の方向をとり、川口では砂嘴を作つて北へ屈曲し、品川の海に注ぐ。しかし今では川口は人工によつてまつすぐに東へ開いてゐる。

是等諸川の水源をなす三寶寺池・善福寺池・井頭池・深大寺池は、ほゞ南北の一線上に並んでゐるが、之は第三紀粘土質の上にある第四紀礫層中の地下水が湧出して出來たものである。又是等か

ら發する諸川は、玉川上水の通ずる臺地から淀橋・四谷・麹町臺を分水嶺として、神田川・石神井川はその北に、澁谷川・目黑川はその南に分布し、且其の河道の方向は、北部の石神井川は東西より稍北に偏つたコースをとり、中部の神田川は中流の一部を除いて大體西より東に流れ、南部の澁谷川と目黑川は西北から東南の方向に流れて居るが、是等諸川のとれるコースは即ち大略臺地表面の傾斜を示すものと見て差支へないのである。

## （2）城　濠

江戸城は山手と下町の切線のほゞ中央に位し、山手臺地と下町低地に跨つて築かれたので、その周圍には内外の濠を廻らし、更に城内にも幾重もの濠が堀られて、防備上の萬全が期せられて居た。

外濠は北は仙臺堀（今の神田川）で大川（隅田川のこと）に通じ、西は江戸川の會するところから麹町臺と牛込・四谷臺の谷を南して辨慶堀に至り、南は之から東へ溜池となり、更に東して二分され、その一は濱離宮の處で海に開いて居り、一は北して内堀と通じてゐた。

外濠はその内側に土手を築き、要所々々には御門や見付を設け、橋を架け、或は陸橋を築いた。神田川の柳原土手は名高いもので、そこに淺草御門と淺草橋、筋違御門と萬世橋、小石川御門と小石川橋があり、更に牛込御門、市ケ谷御門、四谷御門、赤坂御門、虎御門、南御門等があり、牛込御門以下虎の御門までは陸橋が築かれてあつたのが今もよく偲ばれる。濠は赤坂見付から東は幅も狹められて、暗渠とされた所が多く、曾ては貯水池に使はれた程の廣い濠も、今では全く姿を沒して跡方もなく、僅々溜池の名が古き昔を偲ばせるのみ。又赤坂見附から牛込見附の内も、赤坂御門前の隧道工事で濠水の水源地が堰止められたり、四谷驛附近の一部が埋立られてゐる。

九段下から山下を經て日比谷に至る間、内濠の内側には石垣を繞らして松を植ゑ、一橋、神田橋常磐橋、吳服橋、鍛冶橋、數寄屋橋の内側及び日比谷には、外濠の見附と同樣に桝形の門があつたが、今では一ツ橋、常磐橋、日比谷公園の入口に、辛うじてその名殘を止めてゐるだけである。又日比谷御門と山下御門の間、山下御門から外濠の幸橋に至る間の濠も橋も、又和田倉御門の附近龍の口から吳服橋に通ずる濠も、維新後は全く影を沒して了つた。

なほ内外二つの濠の水は、下町の部分では山の手の水を受ける便宜もあり、特に江戸川や小石川の水は大きな水源であつたし、又滿潮時には上げ潮によつて水嵩を增す程で不自由はなかつたが、山の手の部分では幸ひ内濠には大きな泉水の湧出する處があつたので左程でもなかつたが、外濠になると常住の水源がなく、主として雨水と附近の小泉水の水を集めて湛へて居た樣なわけである。

近年土木工事の發展に災されて、殆ど外濠唯一の水源であつた四谷附近の泉水が堰かれて、濠に

流入する清水が缺乏する樣になつたので、四谷驛の構内に井戸を穿ち、こゝから湧出する水を導いて濠の水に充てゝ居る。

御城の濠には舊本丸の南西から北側をかこみ、東して二丸の北側を廻り南側に至るものと、二丸の東の三丸を圍んで北は牛ヶ淵に至り、それより番町及び霞ヶ關と宮城との間の濠となり、櫻田門で二分し、一は屈曲して正門前で再び二分し、その一は北して二丸の御濠と會し、其の二は宮城内に至る。

又櫻田門で分れた他の一は、東して日比谷で内濠と會し、北に曲つて龍口で再び二分し、其の一は三丸の濠と合し、其の二は東して内濠に至る。この中、日比谷から内濠に至るものと龍口から内濠に至るものは、前に述べた通り今はなくなつてゐる。

宮城前の御濠には北に坂下門、南に正門がある。坂下御門は安藤對馬守が要擊された所で、今は御通用門となつてゐる。正門の奥には二重橋がある。之から西側を廻る御濠には櫻田・半藏・田安清水・竹橋の御門があり、内濠と會するところに雉子橋御門がある。又東側を圍む御濠には馬場先御門、和田倉御門があつて、何れも桝形の門と橋があり、田安、半藏の二門は陸橋であつたが、今は後者の陸橋だけ殘つてゐる。

現在では田安・半藏二門の間に五番町に至る陸橋があり、東側の御濠には櫻田門の東方と舊馬場先門跡に凱旋道路、坂下門の正面に當り東京驛の通りに行幸道路の大陸橋が架せられてある。櫻田門から半藏門にかけて閑寂幽邃、帝都稀に見る別天地を示して居る。老松影を濠水に映す處濃綠の水が小搖ぎに搖いで、季節がよければ水鳥も多數に群れ游ぶ、誠に靜寂そのものゝ江戸の氣が漂つて居るが、而も一方眼を轉ずれば、政治都市大東京の諸官衙が近代式建築を並べて此の閑寂と相對す。古典的な江戸と、現代的な東京とが右と左に相對して、一大パノラマを展開せる光景は誠に興趣盡きざるものがある。

三丸外の御濠には南に桔梗御門(内櫻田門)、東に大手御門、北に平河御門がある。平河御門は彼の春日局が、夜遲く歸城して夜明の開門を待つたといふ、邊法美談で知られた故事のあるところである。

### (3) 堀割運河

日本橋・京橋・本所・深川などには堀割が縱横に通じてゐる。日本橋京橋方面では、内濠と隅田川を通ずるものに日本橋川・京橋川・汐留川があり、之等を連絡するものに箱崎川・龜島川・楓川・築地川・三十間堀川等がある。

日本橋川は吳服橋の北方で內濠から分れ、永代橋の北で隅田川に入り、京橋川は鍛冶橋の南方で內濠に分れ、靈岸島の南で隅田川に開き、汐留川は內濠の末端から濱離宮で隅田川に注いでゐる。

箱崎川は日本橋川と直交して隅田川と京橋川を連絡し、楓川は日本橋川と京橋川をつゞけ、三十間堀川と築地川は京橋川と汐留川をつゞけてゐる。

本所には竪川・源森川、深川には小名木川・仙臺堀川・大島川等があつて、中川と隅田川とをつづけて東西に亙り、之等を連結して南北に通ずるものに大横川、北十間川がある。江東方面の堀割は土地が低平であり、水量が豐富な上に、潮汐の影響が大きい等舟運には誠に誂へ向きであるために、盛んに交通に利用されたものであつて、特に小名木川の如きは中川口に番所さへ設けられて居た程であるから、東西交通の要路として如何に船の往來が頻繁であつたかゞ窺はれる。

なほ是等の堀割は海岸を埋築したとき造られたものであるが、今ではこの外、部分的のものに神田川から飯田町驛を經て內濠に通ずるもの、神田川から秋葉原驛に引込んだもの、隅田川から隅田川驛・兩國驛、汐留川から汐留驛等の入堀や、日本橋川の堀留川等がある。

由來是等の堀割は陸上交通機關の發達の幼稚な時代には重寶な交通路として、貨物の運搬は勿論人の交通にも盛んに利用されたのであるが、其の後陸上運輸機關の發達に伴つて、從來舟によつた貨物も次第に陸運に移り、遂に堀割は舊幕時代の遺物として輕視され、一時は堀割埋立の議論さへ起つた程である。所が其の後復た一般經濟活動の進展に伴れて、單に陸上交通機關だけでは到底追ひつかなくなり、更に又堀割は堀割として交通上獨自の立場があることも判つて來たので、茲に堀割利用の必要が認あられると共に、一時閉却されて居た浚渫、護岸等の工事も實施される樣になり各所に埠頭の設備も整へられて、堀割は永久に新らしい生命を見出すことになつた。現に貨物驛でも優秀な成績を擧げるためには、必ず水運を伴ふ必要がある事が判つたので、こゝに前に擧げた樣に東京の重要貨物驛は、堀割を以て海と繫がれる樣になつたのである。

堀割が今日運輸路として其の命脈を保つてゐるのは、運賃の低廉なことや重量貨物や大量貨物、特に破損しやすい重量貨物の運送に適することである。問屋場が下町の堀割の沿岸に多かつたのも一はこんな關係からである。江東方面の倉庫や木場・工場などが、今日も堀割の舟運と斷つ事の出來ない密接な關係を持つて居ることは誰も知る處であるが、更に之を大きくして荒川や目黑川沿岸の工業地發達のために、堀割が大川と共に今日も運輸上の一大動脈であることは、其の舟運の實際について觀ると容易に首肯することが出來る。

スピードを爭ふ今日では重量貨物さへも、迅速を要するものはトラックによるものが多くなつて

はゐるが、それにしても糞尿の處理や塵芥の處理などは、特に舟運を便利とされてゐるのである。

### （4）海　灣

東京の前面の海は即ち東京灣である。

東京灣は浦賀水道の奥に楕圓形に膨んで彎入してゐて、長徑五十粁短徑二十粁ある。此の灣は地質學上の第四紀最新世以前には、今の關東平野を浸してゐた所謂古い大東京灣の一部で、その頃は今の利根川口に開いてゐて相模灘とは通じてゐなかつたのである。處が隆起によつて關東平野が出來た頃、三浦、房總山塊が引裂かれて浦賀水道が出來、一部は陷沒して今の東京灣が出現したと云はれてゐる。その後沿岸及び第四紀臺地は海浸によつて波蝕崖を殘し、同時に諸川の斷層谷の下流はその搬出した土砂によつて埋立てられた。殊に利根川・荒川の築いた今の江戸川口の三角洲と、多摩川の築いた羽田三角洲は灣内に突出して、過去の凹部は凸部と變じ、この兩凸出部によつて更に一彎入をなすところが大東京の海面である。

東京の海岸は水深二米、灣の中央部に至つても二十米未滿の淺海である。灣内の水は沖合の水との混合が少く、汚水の擴大は梅雨後などは殊に著しくして、汚水が停滯して赤潮を發生する程である。水溫は最高が八月の二十九度で、最低は一月の五乃至六度であり、又六七月頃には海霧（ガス）の發生することが多い。

## 五　東京の氣候

### （1）氣　溫

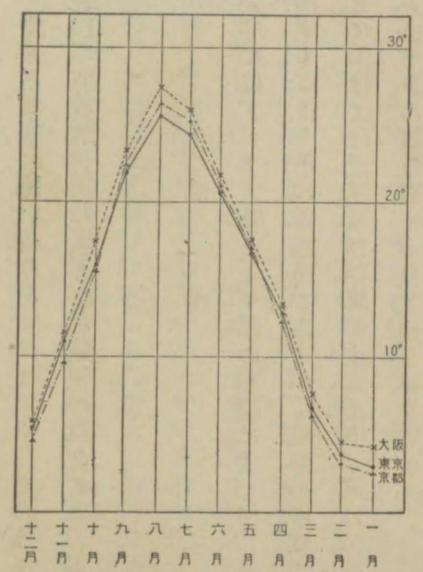
東京の氣溫は月平均では一月が最低で攝氏三度、八月が最高で二十五度五分である。二月は三度七分、三月六度九分と上昇し、四月には俄かに昇つて十二度七分となり、それからは四度位づゝ昇つて五月が十六度五分、六月は二十度五分、七月は二十四度一分で八月の最高となる。之より又四度乃至五度づゝ降つて、九月が二十一度九分で六月頃に同じく、十月は十五度九分で五月より低く十一月は十度五分で四月よりも低い。十二月は五度三分で二月よりは高い。即ち氣溫の差の最も大なのは三月と四月、九月と十月の各約六度である。又一年中の最低は一月に於ける零下八度二分、最高は八月に於ける三十六度六分である。

山手と下町とは季節によつても多少の相異がある。一月の等溫線はほゞ北東から南西の方向で、北するに從つて溫度は低下するが、七月は東するに從つて低く、等溫線はほゞ北から南の方向をとつてゐる。

さて東京の年平均氣溫は十三度九分で、略々舊帝都京都に似てゐるけれども、東京灣に臨み又太平洋に近いので、そのために氣溫は調和され、晝夜の差や夏冬の差等は京都に比し餘程少い。即ち京都は海に遠い關係から、氣溫は東京に比して晝間は高く夜間に低く、殊に夏の眞晝には昇り方が甚だしくて冬の夜間には降り方が烈しいのである。更に郊外になると、山林・原野・河川・湖沼・其の他の地形や高低等によつて、氣象狀態は都心地域に較べて可なり異なる事は言ふまでもない。

東京の郊外でも吉祥寺附近になると、霜枯時の朝等は市內に比べて二度か三度は低いのである。

三大都氣溫比較
（每月平均氣溫）




市內の氣溫は、現在目に見える程變化して居ないが、將來コンクリートの建物が軒を並べ、アスファルトや煉瓦の舗道がすつかり出來上り、空地が次第に減少し、その上煙突から煤煙を噴出することが盛んになれば、氣溫も少しく變調を來し、從つて濕度や空氣の成分にも變化を來し、日光酸素の量にも變化を見るであらうと云はれて居る。何にしても東京は氣候の點では惠まれて居る。冬寒いと云つても水道の凍りつく樣な朝は滅多にない。夏は稍暑いが然し之も一方海陸軟風によつて緩和されるので、夜分にでもなると氣持よく涼しくなる。二月には梅の花が綻び、四月には櫻の花が咲く。酷暑と嚴寒の短い時期を除けば年中行樂の愉快を味ふことが出來る。天惠に狎れて殆ど無關心で過して居るが、此の惠まれた氣象の現實には、吾等は心から多大の感謝を捧げねばならぬ筈である。

## （2）風向

日本列島にはアジア大陸と太平洋の影響によつて、冬季は北西風、夏季は南東風の季節風がある。東京の風も亦ほゞその季節風であるが、地勢の關係で多少その方向が變つてゐる。即ち九月から翌年四月にかけては北風及び西風が主であり、五月から八月にかけては南風が主である。

又地方風である筑波颪や、秩父颪も吹き寄せる。

工業地帶からの煤煙に惱まされる事は、世界何れの都市に就ても共通な現象であるが、我が東京では主風の關係から、江東工業地帶の煤煙は冬は南方の東京灣へ、夏は北方の農業地帶へ吹き飛ばされるので、山の手住宅區や官衙區、乃至は下町の商業區に於ても、煙害を蒙る事の極めて少ない

のは誠に幸ひである。

次に東京での平均風速は年三米七で、先づ日本中で中位である。七月から九月にかけて往々名物颱風の襲來があるので、中々烈しい暴風に見舞はれ、被害も相當にあるけれども、東京を襲ふ頃には勢力減退してゐるので、九州や内地でも海岸地方で見る樣な激しさはない。

大正六年十月一日の二十七米七は、かつて東京での最大風速であつた。風の最も多いのは「二月三月からつ風」といふ樣に、冬から初春にかけてである。

### （3）雨　量

氣象界では一般に降水量と稱して雨、雪、雹、霰等を皆之に含めてゐるが、中でも雨の量が最も多いので俗に雨量と云ふのである。東京の年總量は平均千五百六十六粍、即ち一米五六六で略々大人の身長位である。これはほぼ日本全體の平均に近い。季節としては秋季が最も多く、年雨量の三分の一を占め、夏季之に次ぎ、冬季が最も少くて年雨量の九分の一に過ぎない。又月別にすると五六月の梅雨の頃と、九、十月の颱風の頃が最も多いのである。

年雨量を大都市に比べると京都とほゞ同じく、大阪よりは少し多く、名古屋よりはやゝ少い。

降水日數を見るに六月の十六日と九月の十七日が最も多く、十二月及び一月の七日が最も少い。

即ち冬季には晴天が多くつゞき、一年の快晴日數の二分の一を占めてゐる。寒い冬の日に晴天が多く太陽熱の吸收から氣溫の上昇することは、東京人の生活には誠に至大の天惠と云ふべきであるが、一方それがために火災が此の時季に最も多いことは、市民として大に戒心を要する處である。一年を通じての降水日數は約百五十日で、大阪よりは多く京都よりは少い。

雷雨は極めて少く、稀に日光・足尾・甲府等の盆地から來ることがある。又春の初頃には煙霧の朝が少くないが、之は煙突の煤煙が水蒸氣の凝結を促進させるためである。

### （4）霜　と　雪

初霜は平均十一月十一日頃で大阪より二三日早く、京都よりは十一、二日遲い、終霜は四月六日頃で大阪よりは二三日早く、京都よりは二十二、三日も早い。

雪は十二月二十四、五日が平均の初雪で、大阪とほゞ同じく、京都よりは十五、六日も遲い。終雪は三月二十一、二日頃で、大阪より七、八日遲く京都より三四日早い。

無霜期間は約二百二十日間で沼津より約三十日短く、京都よりは二十日長い。降雪の期間は約九十日間で、沼津より十一日多く、京都よりは二十日許り短い。

### （5）歐米都市との比較

一月の平均氣溫はロンドンに比べると約一度低く、パリ（三・三度）とほゞ似てゐる。又ベルリンの〇・度、紐育の氷點下〇・四度、シカゴの氷點下三・九度に比べると甚だ暖い方である。しかし北風や北西風が強く吹くので、溫度の高い割合には寒く感じさせるのである。

七月の平均氣溫は二十四度一分で、紐育の二十三度七分、シカゴの二十三度より少し高く、ロンドン（一六・九度）、パリ（一七・七度）、ベルリン（一八・九度）よりは遙かに暑い。是等の都市は七月が最も暑いのであるから、東京の最も暑い八月に比べると一層低いといはねばならぬ。

由來人の精神作業に最も適した溫度は十度から二十度とされてゐるので、東京の如く七八の兩月の高溫は稍その能率を低下せしめるものであるけれ共、やれ避暑だ防暑だと騷ぎ廻る程には當らない。近來東京人は夏になると湘南から房總にかけての海岸や、箱根・日光・輕井澤等の高原地へ盛んに押出すけれども、之は單に夏の暑さを避けると云ふよりも、寧ろ都會人に共通な見得坊に動かされて居るのである。

# 二　大東京の建設

## 一　發祥の時代

### （1）江戸の起り

吾等の帝都東京は維新前までは江戸と呼ばれ、江戸幕府の中心地であつた。

江戸と云ふ地名については多くの學者によつて解說されてゐる。今から凡そ三千年の昔には、此の一望涯なき荒野原には我が國の先住民族アイヌが住んで居たもので、更に其の以前にも石器時代の民族が蔓延して居たものである事は、今日西ケ原や小石川の植物園、或は芝や上野の公園等に殘れる貝塚等によつても判るのであるが、是等の方面の研究から、エドと云ふ言葉は元來アイヌ語であると說いて居られる學者もあるし、又之とは別にエドは立派な國語であつて、「江の戸」「江の口」といふ意味である。即ち關東平野に大流域をもつてゐる利根川の河口であるといふ意味で、更に進んで說くなれば、利根川の下流である隅田川の河口であり、豐島入江の水門であると云ふ言葉の意味であると說かれてゐる學者もあるが、一般には後者の說が妥當と解されて居る。

蓋し平野を流れる河川は地形の關係から、屢〻河道の變遷を見るのが常であるが、殊に利根川の如きは其の下流に、江戸の大市街が建設される樣になつたので、幾度となく人工的に水路が改められて、現在の如き河道をとる樣になつてからはまだ極めて日が淺い。

今其の河道變遷の大筋だけを眺めて見ても、往昔此の河は荒川の水を合せ、下流は今日の隅田川となつて東京灣に注いで居たのであるが、室町時代の末期頃になると耕地の開拓から河道の整理が行はれて利根と荒川は分離して純粹の二川となり、利根川は今の中川を下流として海に注いで居た。處が更に德川家康の江戸入城後の文祿三年、武藏の忍城主松平忠吉は、忍城が利根・荒川二流の間に挾まれて水鄕の觀があつたので、利根を更に東流せしめて濁水氾濫の禍を免れんとし、家臣に命じて新河道を疏鑿せしめて、水流を今の江戸川に落すことゝしたが、次いで德川家綱の承應三年、關東郡代伊奈半左衛門忠勝は、新に河道を掘鑿して利根の流れを東に遷し、遂に現在の樣に常陸・下總の國境を流して、銚子口で直接太平洋に注がせる樣にしたのである。

何にしても現在長さ三百三十粁、關東第一の長流であることは勿論、日本全國から觀ても內地三大長流の一つである此の利根川が、今から二百七十餘年前迄は全く東京灣に其のまゝ流れ込んで居たのであるから、隨つて此の川が其の間に流し出した土砂は、恐らく非常な量であつた事だらうと云ふ事は容易に想像される。現に今日江戸川と多摩川の運ぶ土砂によつて、双方の川口は次第に前進を續け、其の前進の結果同じ東京灣の中に、特に品川灣と云ふ一區域をさへ作つて居る程である。

斯くて長の年月多量の土砂が上流から押し出されて居たものが、其の後河水の增減によつて洲が出來淺瀨が出來、初めは葭葦疎らな處水鳥のためには好箇のねぐらを作つて居たのであるが、年を經るに伴れて次第に陸地となり、極めて濕潤であつた所も人工の加はると共に人間の住所として開拓され、遂には今日の所謂下町の基礎が出來たのであらう。

されば斯んなに考へて來ると、大河の河口即ち江の口から、江戸の名が生れて來たのも成程と肯かれる。

### （2）都市としての礎

史書の上に江戸の名が出て居るものでは、吾妻鏡が一番古い樣である。之によると武藏八平氏の隨一であつた秩父重綱の子重繼が、初めて江戸氏を稱し、江戸の鄕を領して此處に居館を置きたることより始まる。

重繼はその長子太郎重長に家を讓つたのであるが、重長は同族である秩父・豐島・畠山・河越・葛西・熊谷・千葉の諸氏と共に、治承四年八月大庭景親に從ふて、源頼朝を相模の石橋山に擊つて

敗走せしめた。

その後賴朝が安房に兵を擧げ、十月には上總・下總を靡けて隅田宿に入つた時、重長は重忠と共に賴朝に降を請うた。

そこで賴朝はその罪を宥し、重長に武藏の守護と同樣の事務を執らせる樣になつたので、こゝに重長の江戸の館は正に武藏の中央官衙の觀を呈し、後年今日の大東京と發展する先づ第一の礎石が置かれる事となつたわけである。

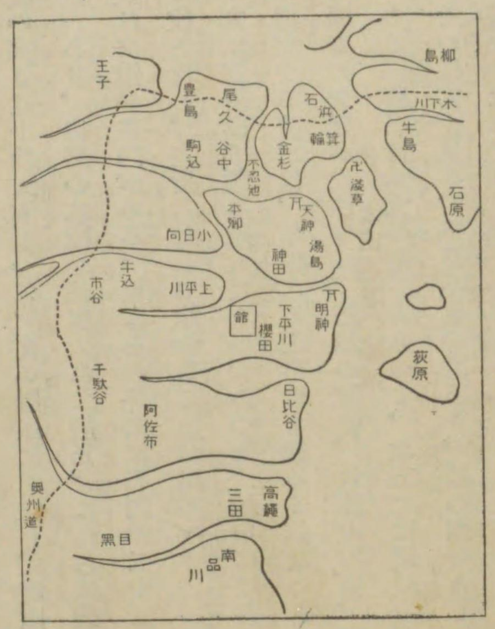
かくて重長は一門の棟梁として、武藏七黨の旗頭となり、子孫亦四近の各處に土着して、之から北條氏を經て足利時代の初世に至る迄の間、江戸は關東に於ける江戸氏の重要な城砦となつて居たのである。

### （3）太田道灌の築城

江戸氏が館を置いてから江戸の名が世に出たのであるが、その後に於て江戸が特に世に知られるに至つたのは、太田道灌の築城からである。

足利尊氏幕府を室町に開くや、關東の重要なるに鑑み、子基氏を關東管領として鎌倉に居らしめたが、後その子孫宗家に叛き、ために廢せられて執事上杉氏が之に代る。而も足利氏は關東公方と稱して古河に城を構へ、關東東半の諸侯之に屬し、上杉氏は西半の諸國を領して兩々相對峙するの形勢となり、上杉持朝は川越に築いて之に據り、その內管領たる太田道眞は岩槻城にあり、子道灌は江戸城を築いて以て古河に備へたのである。

永祿年間の江戸




道灌は始め品川の館にゐたが、江戸の形勝の地たるを相して、後花園天皇の康正元年茲に城を築き、翌長祿元年四月八日その新城に移つた。時は八代將軍義政の頃で、應仁の亂に先立つこと十年、今から（昭和七年）四百七十五年前である。

其の位置たる奧州と房總への街道と、鎌倉街道の分るゝ所にあたり、西は臺地につゞいてその間に谷があり、東は大川口に臨みて海に瀕し平川を以て城濠となした要害で、其の規模は今の本丸の邊りであつた樣である。

斯くて品川館のあつた御殿山にはその將宇田川長淸を居らしめ、隅田川畔の石濱城（今の橋場）

には千葉自胤を置き、北方道灌山を出城として、鼎座して以て江戸城の防備としたのである。

城は子城、中城、外城の三つから成立つてゐて、中城は本丸であり、子城が二の丸、外城が三の丸である。

城の高さは十餘丈もあつて、高い懸崖に峭立し、周圍には數里に亘る垣があつて、その外に巨溝浚塹があり、自然の水流を注ぎ入れて居た。これらに架するに巨材を以て橋として出入に便し、之を渡れば鐵の正門がある。更にその外には石門が二十五もあつた。正門から本丸に至るには石を疊んで段となし、左折右曲して達することが出來る。

本丸は三層樓で頗る雄大なものであつた。城中には井水が五六ケ所も穿たれて、こゝから滾々として湧出する清水は、如何なる大旱にも涸るゝ樣なことはなかつた。

又四方に矢倉が設けられ、防禦の設備、倉庫の設備、廐舍等の附屬屋も完全に備はり、道灌の居室である靜勝軒は本丸の南方にあつて、北方には筑波山亭、西方には含雪齋、東方には泊船亭がある。その他富士見亭、香月亭等の設あり、城の鎭守としては日吉山王權現、平川天神等が勸請せられて居たと云ふ。

以上は主として道灌が京鎌倉の五山の學僧を招いて、城の樣子を記錄せしめた靜勝軒記等に據るものであるが、これで見ても江戸城の規模は相當に大きいものであつて、麴町丘陵の突端に巍然として聳え、關東の要鎭として頗る重きをなしたものであることが判る。道灌は其の後三十年の間此の城にあつて、地方の平亂を鎭定する傍ら、武藏野の風光を詩歌に詠じて世を送つた。

露おかぬ方もありけり夕立の
空よりひろき武藏野の原

我がいほは松原つゞき海近く
富士の高嶺をのきはにぞ見る

とは、彼が上洛の砌、武藏野の景色に就て、後土御門天皇の御下問に對へまつつた詩歌である。

### (4) 城下町の經營

城外の地、即ち今の代官町の邊には士家を置き、平川大橋（今の常盤橋）の內側には町人が居住して城下町をなし、橋下には諸國の商船が出入して繁昌の中心地であつた。

江戸城の記である江亭記や靜勝軒記によれば、この大橋の下には各地の商船が蝟集し、安房からの米穀、常陸からの茶、信濃からの銅、越後からは竹箭、相模からは刀劍、和泉堺からは外國渡來の香料・染料・藥種・珠玉等を輸送して、市場を開いた事が記されて居るし、又市店は南北に長く

續き、白い塔や紅樓がその間に點在してゐた有樣も書かれて居るから、寺院の堂塔や、神社の丹塗の建築も挾まれて居て、其の市街は可なり繁昌して居たものであることが窺はれる。

城中から眺むれば宿の周圍には、遠く東に利根川（今の隅田川）の巨流が横はつて、渺々たる浩流に長堤打續き、碧田廣く相連り、南方には飯倉、品川等の平野があつて一望千里の眺めを展開し更にその間には近く日比谷の入江が深く入り込んで城の裾を洗ひ、遠く江戸灣の海水は翠を湛へて居る。さればかゝる形勝を背景としたる城下町は日に繁榮し、宿驛も亦人馬の跡を絶つことがなかつたのである。

道灌は又、日枝神社、湯島天神、平河天神、市ヶ谷八幡、根津權現等のお宮を再興したり、吉祥寺、法恩寺等を建立して市民の安住を圖ると共に、一面にはまた一旦事あるの際に於ける城の防備とした。

かくて道灌はこゝに居ること三十年、江戸は年と共に繁榮を加へたが、好事魔多くして遂に讒にあひ、その主上杉定正の莊に招かれて悲慘な最期を遂げた。

かゝる時さこそ命の惜しからめ
かねて亡き身と思ひ知らずば

とは、その辭世である。

彼の歿後、江戸は領主上杉氏の有となり、上杉氏滅亡の後は北條氏の領となつたが、その地奥州及び總州へ通ずる街道の要衝にあたるのみならず、入海を控へ、丘陵に據り、隅田の江口に臨む等水陸交通の便を備へてゐたがために、時を經るに從つて次第に市邑發達の過程を辿り、物質の集散夥しく、宿驛として關東に於ても重きをなす樣になつて來た。

其の後北條氏の管下にあること六十七年、豐臣秀吉の海内統一の業成ると共に、德川家康が關八州の領主として移封され、その據城となつてからは、小田原に代つて關東の覇府となつた。これは太田道灌の江戸城建設から百三十五年の後である。

今日市民が東都建設の創始者たる太田道灌と共に、覇府建設の偉勳者として、德川家康を追仰するのは、かゝる由來によるもので、市廳舍正面大階段上には、今尙これ等帝都建設に輝く二人の勇姿を見ることが出來る。

## 二　大江戸の時代

### （1）　德川家康の江戸入府

鎌倉時代に於ける關東の首都は、勿論當時政治の中心地であつた鎌倉であつた。然るに北條氏蹶起の後は、その繁華は小田原に移つて、當時の江戸の如きは、未だ地方一豪族の居城地として、その城下も繁昌したとは云へまだ淋しい一聚落に過ぎなかつた。

然るに徳川家康八州の領主となるや、彼は江戸の地勢が將來發展の地として有望なることを洞察し、此處を據城の地と定め、所謂今日でも八朔といふ名で稱へられる天正十八年八月一日を以て、いよ〳〵江戸入府を行つた。これからは江戸は次第に發展して、關東の首都たるは勿論、二百六十八年間徳川氏覇業の中心となつて江戸文化の爛熟を見るに至つたのである。

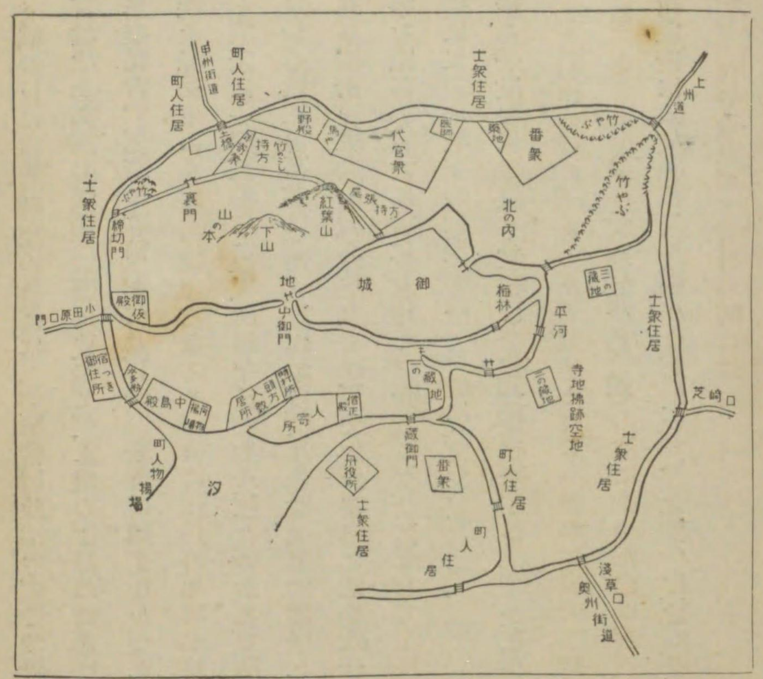
家康は江戸入府を決すると共に、直ちに家臣を派して江戸の地勢其の他について精細な調査を行はせた。

當時の江戸は、城砦は荒廢して唯土壘を繞らし、竹木その上に茂り、館は茅葺で玄關の板敷には船板の古材が使はれてあつた。城下とは云へ僅かに縱十二町、横三十四町ばかり、誠に茫莫たる武藏野の一聚落に過ぎなかつたので、その海に沿つた處は到る處、芦萩生ひ茂つて沼澤入江多く、その寂寥たる有樣は坐ろに開拓の勇士をして、望鄕の哀愁に堪へさらしむるものがあつたらしい。

而して是等の萩洲・萱野の間には



慶長江戸圖




平川村（麹町竹平町）、日比谷本鄕（日比谷町）、穢多村（日本橋室町）、櫻田村（霞ケ關）、青山村、一木（ヒトツギ）村（赤坂）、麻布村、飯倉村（麻布）、柴村、三田村、白金村（芝）、四谷村（四谷）、市谷本村、牛込村（牛込）、田安村（麹町代官町）、芝崎村（麹町大手町）、小石川村（小石川）、湯島本鄕）、下谷村（下谷）、淺草村、鳥越村（淺草）牛島村、小梅村（本所）等が散在して、曠野の彼方には富士・筑波を望む誠に物寂しき人里で、中にも今の日比谷公園のあたりは、漁夫の干網に春の長閑さがあり、三越の

あたり秋の日には狐狸の皮乾しなど、今人の思ひもかけぬ風情があつた。

又宮城吹上御苑の局澤の邊にはお寺が十六軒もあり、貝塚の增上寺、淺草の觀音、高輪の庚申堂芝の烏森稲荷、芝崎の神田明神、牛込の築土八幡、角筈の十二社等、お宮やお寺が草原や木立の上に屋根を見せてゐた。

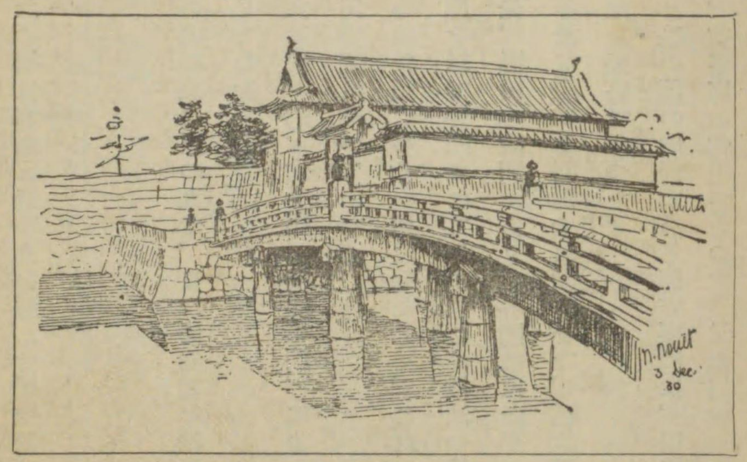
然し家康は一度入府するや、自ら先頭に立つて家臣を督勵し、よく開拓者の意氣を以て、遠謀深慮一意新都建設の事業に邁進した。道路を敷設し橋梁を架し、水道を通ずる外、沼澤の埋立、築港等に亘り、着々經綸を行ふ傍ら、又一面に於ては新制度を設け、秩序を整へ、警察を嚴にして市民の安寧を圖る等、大に行政方面にも意を拂つたのである。

家康は又更に城下の發展を圖る爲には特に力を注ぎ、彼の舊領地より來る者を綏撫するは勿論、あらゆる手段を以て廣く小田原及び關西方面からも商賈を招致して、城下の繁榮を畫する處があつた。

## (2) 千代田の城

徳川家康は入城後直ちに城西に番所を拓いて旗本の士を置き、又局澤の寺院を神田谷原町に移した。

平河御門





城は多少の手入を加へ、本丸と二の丸の間の溝を埋めて廣くしただけで、始めは主として市街の建設に力を注いたのである。

入城後三年、文祿元年になつて初めて新城（後の西丸）を築き、同二年本城を修理して和田倉門から櫻田門・半藏門・田安門に至る濠を作つた。

慶長三年秀吉薨じ、五年關ヶ原戰役の結果、天下の政權は自ら家康に歸し、次いで八年征夷大將軍に任ぜられて覇業全くなるや、關東の覇府であつた江戸は一躍日本の中心都市となつて、劃時代の發展を遂げた。

茲に於てか家康は一方江戸の都市計畫を實行する同時に江戸城の大擴張を企て、慶長十一年藤堂高虎の繩張りの下に工を起し、全國の諸大名を總動員して之を助けしめ、新日本の覇府にふさはしい千代田城の偉觀を

整へた。城は本丸と二の丸を圍んで城壁及び濠池があり、本丸からは北翻橋、西翻橋によつて田安臺及び西丸に通じ、二の丸は梅林門、天神橋などによつて三の丸に、蓮池門によつて西丸に通じてゐた。

二の丸の東は三の丸で、これは周圍に城池を圍らし、平川門・大手門・桔梗門によつて大名小路に通じてゐた。

西丸は坂下門・大手門（今の正門）によつて西丸下（今の宮城前大廣場）に通じ、北は乾門によつて田安臺に開いてゐた。

是等のお濠は多くの屈曲をなして、これに城壁があり、要所々々には櫓が設けられ、諸門は嚴重な門扉を以て警固されてゐた。この城池の外は西に竹橋、清水、田安、半藏の諸門、東に和田倉、馬場先、櫻田の諸門があり、各門には枡形の城壁を繞らして出入を嚴にした見附があつた。殊に西にある濠は臺地を堀割つた深い谷で、幅は二百米を超え、水面迄の深さは十七米もあつて、宛然山谷の如き要害であつた。

これ等の濠の內側である田安臺には、田安・清水二家の邸と鐵砲藏及び馬場があり、西丸下には老中、若年寄の役宅があつた。又和田倉・馬場先門外は俗に大名小路と稱した所であつて、峰須賀山內、牧野、松平、永井、土井、稻葉、林、本多、水野、細川等の諸侯邸の外、老中、若年寄、定火消役評定所、町奉行の役宅もあつた。

以上の地域を圍んで外濠があり、雉子橋・一橋・神田橋・吳服橋・鍛治橋・數奇屋橋・日比谷の諸門によつて城下町に通じ、何れも枡形の城門があつた。

斯くて此の築城の大工事は、慶長十一年工を起して以來時に斷續することありたるも、二代秀忠を經て三代家光の寛永十六年に完成を見たのであつて、其の間實に四十九年の長年月を費したのである。將軍の威令の下に、諸大名が獻身的の奉公を續けて此の長年月を要したものであるから、規模の如何に宏大であつたは容易に想像されるが、之に要した工費の如きは、今日の通貨に換算して凡そ幾億圓になるか之は一寸見當もつき兼ねる。

而して工事は大體次の四期に分けられる樣である。

第一期は慶長の工事で、十一年本丸の殿舍、二の丸三の丸及び雉子橋から溜池落口に至る石壘。十二年には二十間四方五層の天守を造り、十六年に西丸の石壘塹濠の工事に着手したが、間もなく大阪陣のために一時休止の姿となつた。

第二期は元和の工事で、六年に內櫻田門から清水門に至る石壘、及び外櫻田門から和田倉、竹橋、

清水、田安、半藏の諸門が修築され、神田川の堀割成り、八年には本丸の殿舍は改造された。

第三期は寛永初期の工事で、六年に城壁を修築した外、虎門・日比谷・數奇屋橋・鍛冶橋・吳服橋・常磐橋・神田橋・一橋・雉子橋の諸門が築かれ、西丸及び二の丸の庭園が出來、三の丸も大成した。

第四期は寛永後期の工事で、十三年に外濠の石垣を造り、十六年には淺草・筋違・小石川・牛込・市谷・四谷・赤坂・虎門・幸橋・芝口の諸門が完成した。

かくて大成した江戸城の廣さは外廓内の東西五十三町、南北三十七町、濠の總延長約六里半。

内廓の内輪内には多門塀を繞らし、その間に十九の櫓が配置され、更に本丸の北隅に天守が聳えてゐた。現今では此の千代田の名城も殆ど凡てが失はれ、ただ本丸の南に三層の富士見櫓と、内櫻田門の東に二層の櫓が殘るのみであるのは誠に惜しいことである。

### （3）江戸市街の建設

家康が江戸城建設に當つて、最初に意を用ゐたのは市街の開拓であつて、その計畫は實に大規模のものであつた。然もその計畫は全く江戸城の守備を基調とされたものであつて、山手は自然の地貌をそのまゝ利用して地割をなし、下町では低濕の地や沼澤地の埋立、河川の處理や堀割の開鑿及び排水路の施設をなし、又水道を通じ、橋梁を架し、社寺及び諸侯邸宅の配置を定むる等は、その主な事業であつた。

#### 埋立工事

天正十八年鳥越村人に命じて姫池、千束池を埋めしめ、又小石川池を埋築した。慶長八年には全國六十五の諸侯に命じ、千石毎に一人の割合で人夫を課し、神田山を削つて濱町以南の海面を埋め溝渠を通じ、日本橋を架けて下町の中心地を出現せしめた。日本橋は日本國中の大名の手傳で出來上つたと云ふので、誰云ふとなく呼び馴はしたのが始まりであるが、其の後此處を基點として東海・中山・甲州・日光及び奥州街道の五街道が定められて、日本橋は江戸の中心計りでなく日本全國の中心となつたので、其の上下左右には商店が櫛比して大繁昌の基を開いたのである。斯くて南は品川から北は淺草まで、市街が連續するやうになり、同十七年には市街の町割が行はれた。

寛永年中には僧靈巖、日本橋東の海洲を埋めて靈巖島を造り、攝津佃島の漁民は大川口の洲を埋めて佃島を造り、萬治年中には京橋の海洲を埋立てゝ築地が出來、神田川の舟入堀割の揚土によつて、小石川小日向の新地が築成され、伊勢の人深川八郎右衛門は海面の洲渚を開拓して、深川村を建てゝ今日の深川區の基を作り、正德年中には千田氏によつて千田新田、享保年中には僧曾融によつて曾融新田、明治年中には平井氏によつて平井新田等の新地が出來、下町は年毎に擴大された。

## 市街區劃

山手は神社・寺院及び諸侯の邸宅を交錯せしめ、道路も自然のまゝにまかせて置き、なるべく迂曲せしめて見透しの出來ない樣にした。そして大きなお宮や寺の附近には門前町が出來、主な街道には所々に商店街を存した。又崖や急坂には人馬の通行し得るだけの工事は施されたが、車の上下には困難な位であり諸所に行止りの小路、即ち袋町が少くなかつた。

下町ではその北部の下谷、淺草方面には一帶に廣い寺町を形成せしめ、神田川内から南にかけては町人の市街を造つた。神田では駿河臺以東、日本橋では東堀留川から兩國橋に引いた線の西一帶日本橋川以南は楓川・三十間堀川以西の地がそれで、街路井然たるものであつた。之より北は奥州街道、南は東海道、東は堅川筋の千葉街道に沿うて、細長い道路街となし、是等商業地區は家康の入城後間もなく、遠くは伊勢、京都、堺、近くは小田原の商人などが移住し來つて新市街を作つたのである。

## 諸侯及旗本配置

慶長八年家康幕府を開くに及び、藤堂高虎、伊達政宗等は邸宅を江戸に置くことを願ひ出た。乃ち之を許して大手前には前田、藤堂、最上、堀尾、生駒の諸侯を置き、大名小路には福島、淺野、

嘉永より慶應に至る江戸略圖

ち之を許して大手前には前田、藤堂、最上、堀尾、生駒の諸侯を置き、大名小路には福島、浅野、

池田、山内、京極、黑田、細川、蒲生、蜂須賀、有馬、森の諸侯、外櫻田には加藤、伊達、島津、毛利、上杉、鍋島、諸侯の邸を配置した。後世までその邸のあつたものは、池田、山内、黑田、細川、蜂須賀、鍋島の諸侯に過ぎない。

さてその配置を見るに、要所々々には旗本又は親藩を置き、又は小藩を集め、外樣の大藩の附近には必ず親藩をおいた。即ち城北の駿河臺には旗本、城西の番町には番衆、城南霞關には井伊、松平の諸侯をおき、鎌倉街道（厚木街道）の入口には尾張、紀伊の諸侯を分立し、外濠の水源であつた今の赤坂離宮及び青山御所には紀伊侯の邸を置いた。

甲州街道口を見下す市ケ谷臺の今の士官學校と經理學校、戸山學校は何れも尾張侯の邸、小石川本郷兩臺の谷口の砲兵工廠と、前田侯邸の今の帝國大學の北、第一高等學校の在る處は水戸侯の邸であつた。

又四谷臺から本郷臺にかけての外濠外の地には御徒組、先手組、弓組、砲組、百人組等の士衆を群住せしめた。

大川口には靈巖島に松平侯、越中島に細川侯をおき、築地には尾張侯と一橋侯、芝浦には紀伊侯、向島には水戸侯、深川の東部には一橋家及び細川侯の各下屋敷、又は藏屋敷を置いた。

此の外小石川、本郷の外方や、日本橋、京橋の大川寄方面には譜代の大名が多く、更に麻布・芝の外様大名の多い處には、譜代大名を點在せしめた上に、芝山内や高輪の寺域を以て之を圍み、市外には紀伊侯や井伊侯（今の明治神宮）の邸をおいた。

**水道の敷設**

家康が江戸市街を建設するに當つて第一に着手させたのは、市民の飲料水たるべき水道であつた是がためには、德川幕府は累代常に大なる努力と、多額の經費とを費してゐる。天正十八年入府に先つて家臣大久保藤五郎をして上水道を作らしめた。之は水源を井の頭に求めて引水し、小石川の關口で堰止め、臺地の下を通じて水道橋の北で、樋を以て神田臺に送り、之から自然流下によつて日本橋方面に給水したもので、之が神田上水である。その後、給水不足を告げ、承應二年四代將軍家綱の頃玉川村の清左衛門・庄左衛門の二人に工事を擔當せしめて、玉川上水を敷設した。之は羽村で多摩の水を取入れ、約四十三粁の水路を開いて四谷の大木戸に至り、それより陰溝を作つて虎門に通じ、更に樋によつて送水した。今日利用されてゐるものが即ちこれである。

この外元祿年中仙川村の德兵衛、多兵衛、兩人が保谷村で玉川上水から水を分ち、本郷から下谷・淺草方面に給水した千川上水もある。まことに市民給水の事業は今も昔に變らぬ、都市經營上の大ななやみである。

**（4）　關東の覇府から日本の首都へ**

斯くの如くにして家康の新都經營は着々その實績を擧げ、大江戸殷盛の基礎は年と共に築き上げられて、全國統一覇業成ると共に、關東の覇都であつた江戸は名實共に日本の中心都市となつて、玆に躍進的な發展を遂げたのである。

而も家康はなほ之に滿足することなく、江戸を中心として全國に封建政治を布くや、あらゆる手段を以つて、海内の殷庶を聚集し、只管江戸の殷盛を致すことに努めた。覇主直屬の臣隷旗本八萬騎を置くと共に、三百諸侯をして各々藩邸を設けしめ、その妻子家臣を居住せしめて、藩主には參覲交代を行はせる等、巧妙なる政策によつて全國からの富を集中して之を散ぜしめた結果、江戸の商工業は益々繁榮し、市街の發展すること限りなく、文政、天保の盛時にあつては、已に二百萬の人口を城下に抱擁して居たとさへ云はれてゐる。

その初め、南北十二町、東西三四町の小城下町に過ぎなかつたその境域は、四代將軍家綱の頃には廣袤實に方三里となり、江戸八百八町の名が九百三十三を數へられるに至つた。

當時の記錄に

「大名町、商人の市の棚、諸職人の家々、小路々々、町々、縱横の橋までの賑かさ、人の往來黑土を蹴上げて、よそ見して通るものは突倒され、踏み轉ばされ、口を開いてゐるものは、息のつまるほど砂埃を吹き入れらるゝ」と、ある。以つてその當時の繁榮を知るべきである。

然しかくの如くにして生れたる大江戸の繁昌は、消費者の集合によつて成立つたものであつてそこには經濟的の生産を缺いてゐた。さればその果しない膨脹の結果は、農村の衰頽をも招かんとしたので、寛文年中には屋敷改を置いて之を制限し、享保年中には「人返し」の令さへ出て、長男以下の子女をして農に就かしめた。後寛政年中及び天保の改革にも、歸農の令を出してその膨脹を抑へたのである。

嘉永、安政以後は内外多難に瀕して、その繁榮は妨げられ、尋いで德川十五代二百六十八年間の覇都として又當時の日本に於ける政治、經濟、文化の中心として榮えた大江戸も、明治維新と共に全くその運命を一變した。

幕府は倒壞し、麾下の士は離散し、江戸繁榮の母體であつた三百諸侯は、妻子臣從を率ゐて悉くその封土に去り、市民も亦社會の不安と混亂とに脅えて逃亡するもの相次いだ。その結果、人口は遂に半減したのみでなく、その社會的機能は殆んど停頓し、加ふるに維新政府の命令未だ徹底せずさしもの殷盛を誇つた江戸も茲に至つて全く昔日の面影を失ひ、城下は空しく愁風落莫の巷と化して終つた。

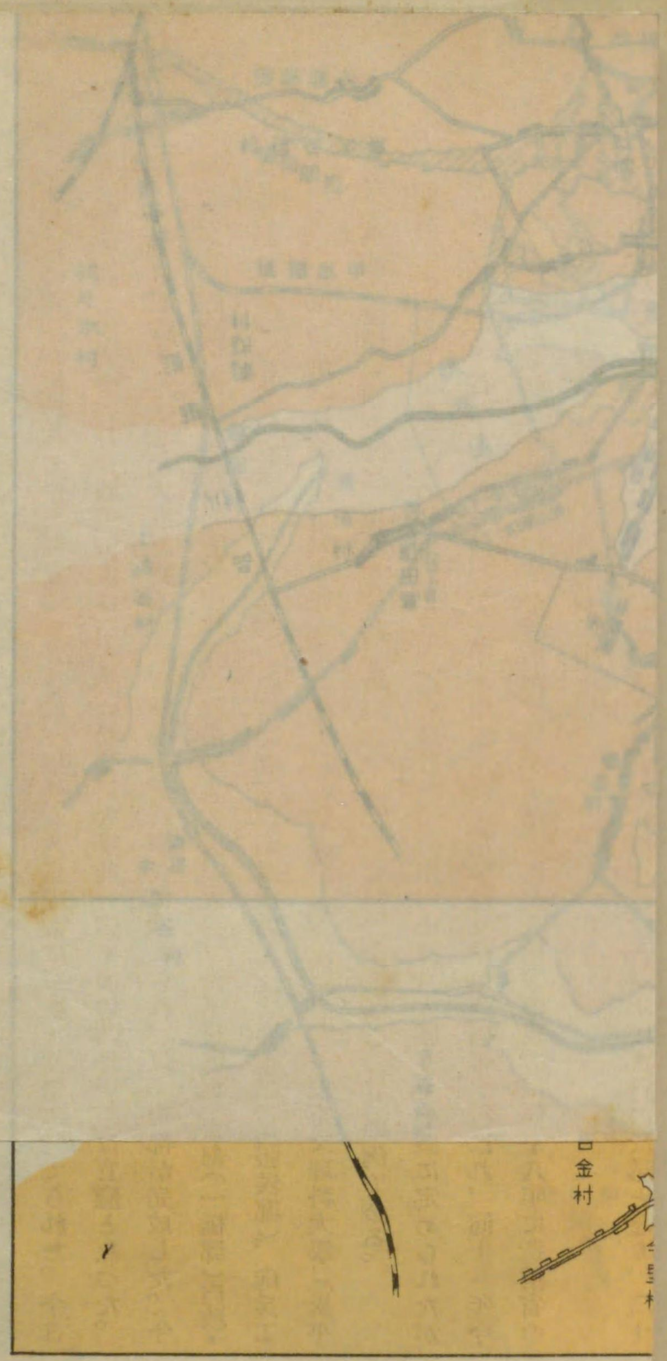
## 三　奠都以後の發展

### (1)　帝都の建設

慶應三年十月、德川慶喜の大政奉還によつて、三世紀の長きに亘る幕府も此處に終りを告げて、江戸は日本の首都たるの地位を失つたが、翌明治元年七月十七日奠都の大詔が下つて、王政再び古に復し、江戸は東京と改稱され、覇都としての景觀を失ふと共に、新しく帝都としての發展に向ひ維新政府の政策着々行はれるに及んで、國都の衰勢漸く輓回され、新しく建設の事業日と共に進んで茲に、都府の特色を全く一新するに至つた。

「朕今萬機ヲ親裁シ、億兆ヲ綏撫ス。江戸ハ東國第一ノ大鎭、四方輻湊ノ地、宜シク親臨以テ其ノ政ヲ親ルベシ。因テ江戸ヲ稱シテ東京トセン。是レ朕ノ海内一家、東西同視スル所以ナリ。衆庶此意ヲ體セヨ」

と、同年十月十三日車駕東京に御臨幸あり、江戸城は東京城と稱せられ、次いで宮城と奠められた






爾來東京は依然として新日本の首都となり、又泰西文明移入の關門となりつゝ、帝都建設の事業に沒頭し、今や既に半世紀餘の星霜を經たのである。

江戸城に宮城が置かれるやうになつてからは、城外の大名屋敷は官廳・兵營に當てられた。今日の二重橋前大廣場や、日比谷公園丸の内一帶は兵營、大手前一帶や櫻田門外一帶は官廳となつた。又、各地に點在する大きな大名屋敷も大抵官廳や兵營及學校に當てられ、以て帝都が完成した。今日の司法、外務、海軍の各省（上杉、柳澤、阿部、大久保、大岡、松平諸邸）、文部（一橋邸）内務・大藏（酒井邸）・陸軍・參謀本部（井伊邸）、近衛師團（田安清水邸）、士官學校（尾張侯邸）、砲兵工廠（水戸侯邸）、第一師團・陸軍大學校（青山邸）、東京帝國大學（前田邸）、東京文理科大學（松平邸）、英國大使館（南部邸）、獨逸大使館（細川邸）、陸軍兵器廠（安藤邸）は其の例である。

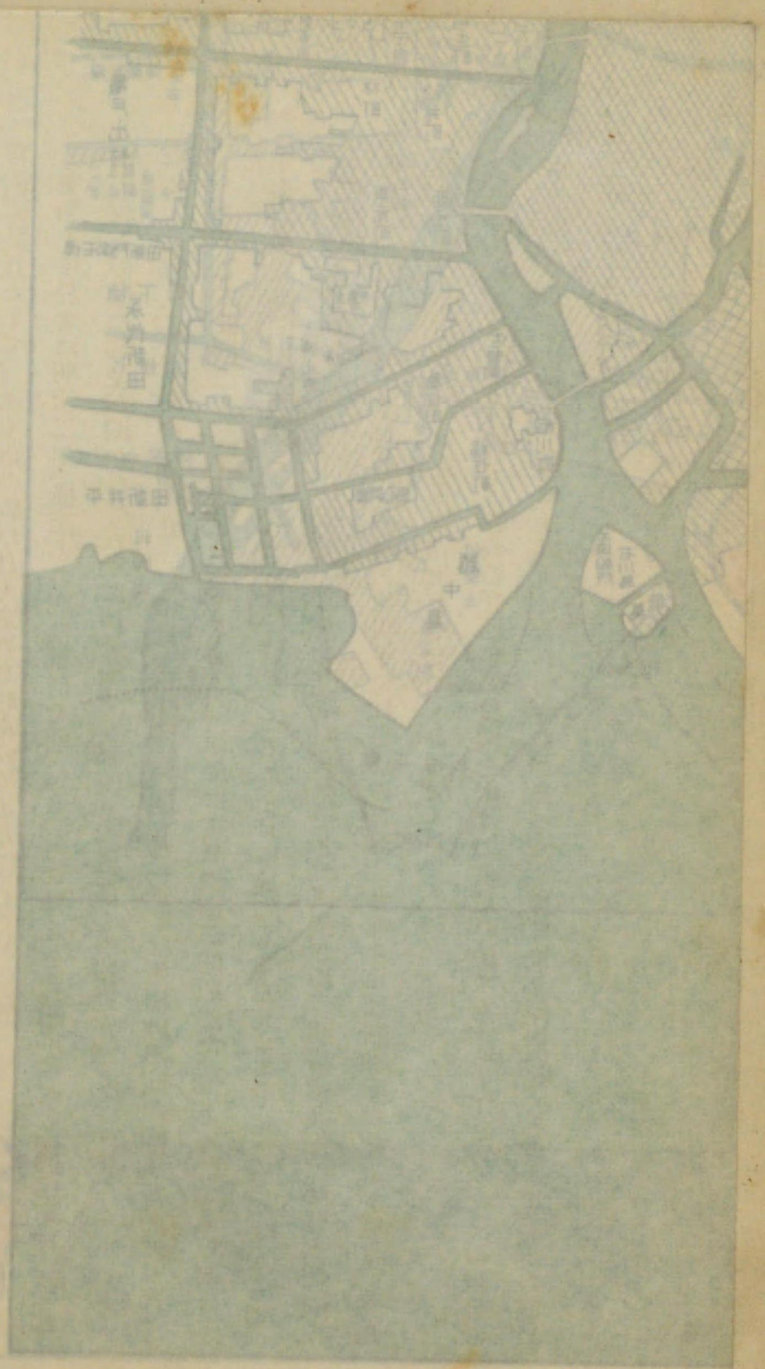
明治二年初めて市界を定め、市内を五十區に分けた。同四年には六大區七十小區に定められたがこの時市街は一千百七十八町であつた。同十年銀座の區劃整理及び道路擴張が行はれ、同十一年今の十五區に改められ、各區に區役所を置いた。同十四年には農商務省の設置、同十八年に遞信省の設置を見、政治機關は年を追うて增して來た。

十七年には市區改正の議上り、此の年審査委員會が組織され、廿一年に實行の決議となり、二十

# 明治二十年頃の東京市

品川鐵道
諏訪村
高田町
護國寺
小石川村
大塚町
陸軍病馬廠
音羽町
水道町
植物園
下駒込村
中門前町
天王寺
上野公園
不忍池
帝國大學
白山前町
長分町
傳通院
神田上水
砲兵工廠
飯田町
三崎町
古川町
榎町
天神町
柳町
有馬町
東大久保村
文官士校學
宿新藤内
新宿
千駄谷村
植物御苑
甲武鐵道
代々木村
練兵場
假皇居
皇居
大手門
近衛歩兵
近衛砲兵
富士見町
麹町
文部省
學校
專
大藏省
內務省
監獄署
警視廳
三崎町
穩田村
原宿村
上澁谷村
四丁目
仲町
谷町
佐久間町
鳥居坂
麻布
三輪村
龍泉寺村
金杉村
坂本村
千束村
新吉原
元吉町
佐久間町
淺草寺
須崎村
中郷村
小梅村
押上村
車坂町
御徒町
中御徒町
二長町
裁判所
第三醫院
田原町
瓦町
竹町
外手町
法華寺
太平町二丁目
本所
總武鐵道
相生町
一丁目
元町
松井町
林町
亀戸出村
西元町
東元町
右衛門新田
永代新田
佐賀町
亀住町
淨心寺
福住町
相川町
平井新田
越中島
石川島
佃島
造船所

東大久保村
柳町
大神町
飯田町
三崎町
士官學校
内藤新宿
植物御苑
千駄谷村
代々木村
甲武鐵道
假皇居
練兵場
穩田村
原宿村
上澁谷村
澁谷
中澁谷村
下澁谷村
白金村
今里村
櫻田町
三河台町
六本木町
西町
東町
富士見町一丁目
近衛歩兵
近衛砲兵
麹町
皇居
大手門
文部省
農商務省
大藏省
内務省
監獄署
警視廳
鹿鳴館
佐久間町
鳥森町
新橋
海軍倉庫
浜離宮
芝公園
增上寺
芝離宮
瓦斯局
高輪台町
二本榎
車町
越中島
石川島
佃島
亀戸出村
永代新田
平井新田
亀住町
佐賀町
相川町
福住町
外手町
元町
松井町
林町
西元町
東元町
本所
總武鐵道



二年には之に着手した。同年特別市制を布き、市會及び區會が設けられた。

三十一年十月一日市役所が開かれて、東京は始めて完全な自治市となつた。後年この日を帝都の自治記念日として、永く市の祝ひ日と定められたのである。

交通上に於ては明治二年、横濱との間に電信を通じ、三年には之を長崎に延長し、同四年には京都及大阪との間に郵便が開かれ、五年には全國への郵便と、横濱への鐵道が通じ、十六年には上野新町間、二十年には上野鹽釜間、廿一年には上野直江津間、廿二年には新橋神戸間の鐵道が開通した。

市内としては同二十三年に電話が成り、三十一年には電氣鐵道が開通した。海上に於ても既に十八年東京灣築港問題が發議されたが、是れは遲々として今日に於てもまた完成までには至つて居らぬ。

近接郡部の併合や、海面の埋立によつて市の地域も年々に擴張され、明治十九年には日本橋の中洲河岸、二十一年には深川の洲崎、廿四年には京橋の月島、廿九年には新佃島の埋立が成り、更に京橋、芝、深川の海面は逐年埋立地を增しつゝある。

明治廿七八年戰役の結果、各般の交通事業は國を擧げて長足の進歩を來たしたので、その企畫の中央地としての帝都の發展には殊更に著しいものがあつた。更に商工業の發達は俄かに舊來の面目を一新せしめたのである。

三十七八年戰役後は更にその規模を擴大し、日本の世界的都府としての形容建設を迫られて、街路・河川・運河の改築等は、着々その計畫を進められたが、尋いで大正三年世界大戰の勃發とともに我が國工業品の世界市場への飛躍となり、玆に帝都を中心として、市外に亘つて工業の大發展を見るに至つた。

斯くて江戸時代日本の覇府として、幕府及び大名を中心とする消費の都市であつた東京は、明治以後日本の帝都として、政治的方面に於ては勿論、學術上・經濟上の方面に於ても、亦我が國の中心都市となつたのである。

### （2）大震火災と帝都の再建

明治維新以來、營々として築いた帝都五十余年の文化は、大正十二年九月一日に於ける未曾有の大震火災に遭遇して、殆ど全滅に等しい打擊を蒙つたのである。

即ち本市の中心たる市街は一朝にして見渡す限りの荒寥たる燒野が原と化し、加ふるに主要なる經濟、交通、通信等の諸機關は悉く停止し、全市を襲ふ不安と混亂とは、一時帝都の前途をして全く暗憺たらしめた。

即日煥發されたる

大詔の中に

「抑々東京ハ帝國ノ首都ニシテ政治經濟ノ樞軸トナリ。國民文化ノ源泉トナリテ民衆一般ノ膽仰スル所ナリ。一朝不慮ノ災害ニ罹リテ今ヤ其舊形ヲ留メスト雖モ、依然トシテ我カ國都タルノ位置ヲ失ハス。是ヲ以テ其ノ善策ハ獨リ舊態ヲ回復スルニ止ラス、進ンテ將來ノ發展ヲ圖リ、以テ巷衢ノ面目ヲ新ニセサルヘカラス……後略」

と仰せられた。

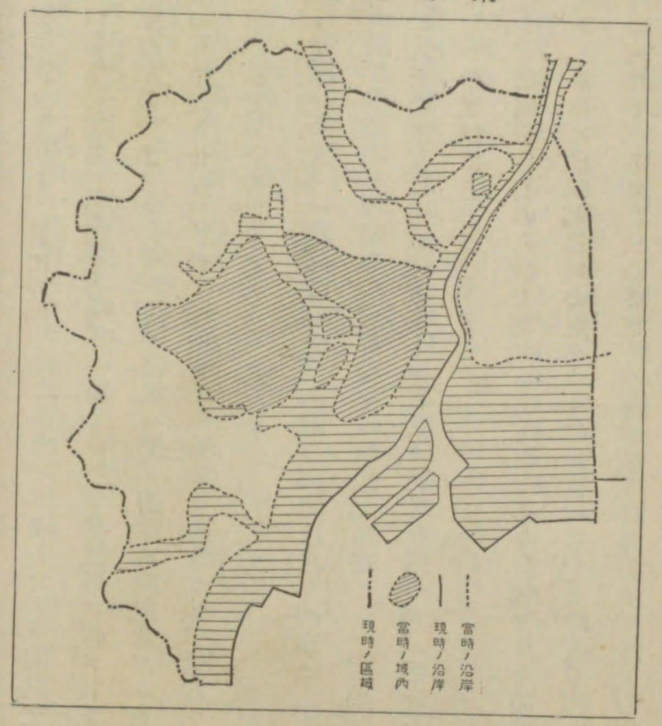
蓋し帝都の慘報、一度傳はるや、全國の同胞は之を國難として一致帝都救援のために起ち、政府も亦優渥なる聖旨を奉體して國都百年の理想を基礎として復興計畫を樹立し、相携へて帝都再建の大事業に着手し、遂に七年の月日と七億の經費を擲つて、昭和五年三月、豫定の事業は完成せしめたのである。

大震火災以來七星霜、その今日に成れる帝都の偉觀を見る時に、當時に於て誰か果してあの燒野が原にも等しかりし帝都の復興が、かくも早からうと想像し得たものがあるであらうか。實に國をあげての熱誠なる後援と、全市民の絶えざる努力とが、かゝる大業を成さしめたものであることを吾等は永く記憶せねばならぬ。

震災復興後の東京市は、眞に世界的都府としての形觀を整備することになつた。市街の區劃は井然として縱横に延び、道路の系統は整ひ、道幅は廣く、人道車道の別は明らかになり、路面は各地の狀況によつて各種の鋪裝が行はれ、橋梁は美しく且つ堅固となつてその數を增し、河川運河は幅を廣くし水深を增した。

建物は耐震耐火の高屋となり、五階・七階の大建築物は巍然として各所に輪奐の美を競ふ樣になつた。學校はその面目を一新して、校舍及び設備を整へ、氣持のよい附屬小公園は市内の各處に設けられて、市民生活に休養と慰安を與へる樣になつた。その他あらゆるものが、すべて震災前に見られぬ更生振りを示し、眞に巷衢の面目を新にするの偉觀を呈するに至つたのである。

東京市古今略圖

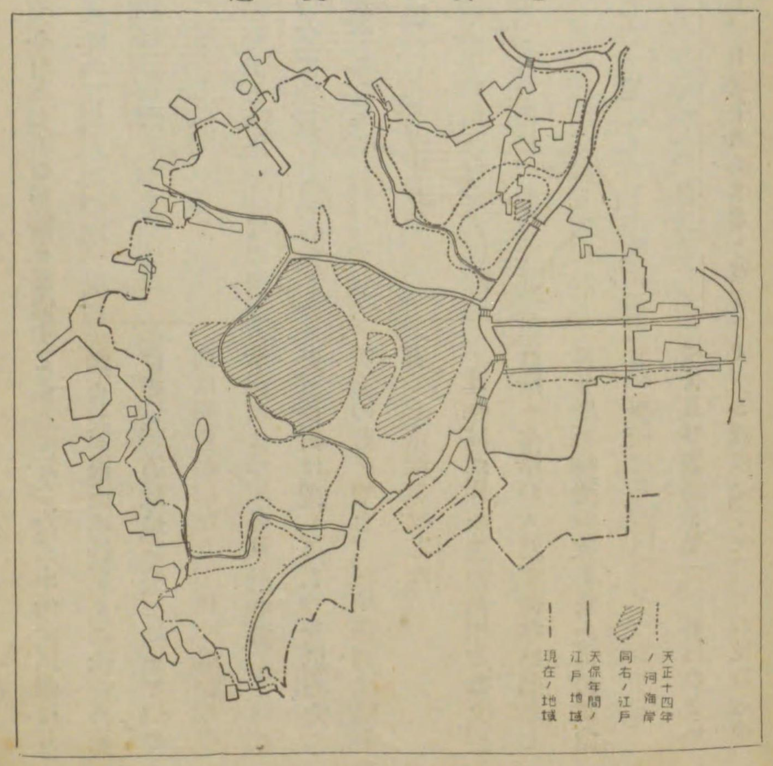





昭和五年三月廿五日には、車駕復興の跡をみそなはせられ、翌日は盛大なる復興祭が擧げられた。

實に大正の震災は啻に「我等の東京」の壞滅であつたばかりでなく、帝國未曾有の危難であつたが、幸ひには轉禍爲福のたとへに洩れず、ありし日の英京ロンドンの大火がその今日の盛

地域の變遷



大を致し、對岸桑港の大地震が却つて今日の繁榮を招致する原因となつた樣に、今や復興の完成を見たる「我等の東京」は、名實共に東洋の覇都となつた。現に大震火災の爲に分散したる本市の人口の如きも累年回復の徴を示し、交通機關の驚くべき發達は、既に東京市の地域を遙に越えて、異常な發展の趨勢を示して居る。

振古未曾有の大震災も、市民絶大の努力と國民擧つての後援の下に、災後幾年を出でずして早くも完成の喜びを贏ち得たる東京市は、更に今日計畫されつゝある大東京の建設を果し、世界の大都としての偉觀を示すに至る日も近い事であらう。

### （3）新市域の發展

大震火災の際、下町の市民の多くは山手方面及び郊外に避難して一時の宿りを求めたが、復興後の下町は其の宅地の面積が著しく減少したために、今日では元の住所を營業所とし、住宅を郊外に移したものが甚だ多くなつた。又一方には下町が震災前に比して商工業の盛大を來したために、山手及び郊外はその從業者の住宅地として、更に人口を年毎に增して來た。

斯くて都心地域の商業化による地價の昂騰から、住民は生活の安易と安息を求めて郊外へ郊外へと押し出すので、隣接町村の人口の膨脹は都市の巨大化に伴ふ、必然の結果として現はれて來る。

即ち今日住宅地としての荏原町、澁谷町、西巢鴨町、瀧野川町等が何れも人口十萬を超えて、地方に於ける中都市を凌駕する發展振りなのも是が爲めである。

荏原町の戸越銀座、澁谷町の道玄坂、西巢鴨町の池袋等は商業街をなして繁昌し、殊に西郊の玄關とも云ふべき新宿の發展は更に目覺ましいものがある。

工業地でも吾嬬町、千住町、三河島町、尾久町、日暮里町、王子町、大井町は何れも人口七萬以上である。

西郊には學校や寺院の郊外移轉によつて、新興したものが亦少くない。

これ等郊外聚落の土地は、大部分が最近迄耕地（主として畑地）又は松林・くぬぎ林であつた處で、所々にその名殘りを存してゐる。又古くからあつた農家が、茅屋根に藏はれ、家森を繞らして急造新型の屋並の間に見えるのも一興である。その昔農家の家森として仕立てられた欅の森に、町家の子供が遊んで居たり、或は町家の庭先に年をへた茶の樹が昔の茶畑を偲ばせてゐたり、町家の表には近代的の硝子戸をはめてゐても、裏には昔の農家の形式を其の儘殘してゐるなど、急激に移り行く世態を物語るものも少くない。

下町の北部、江東の東部、北部の發展も又目醒しい。

その土地が低濕であるために、住宅地として高燥な山手方面の郊外に及ぶべくもないが、水運が便利で地價が低廉で、土地が平坦なのは、工業地として益々人氣をよび、特に世界大戰の好景氣時代には、日毎に工場が新設される有樣で、常磐線に沿うては上野から千住、金町を經て松戸に至る一帶の地方を工業地化し、總武本線に沿うては本所の工業地區が延びて、特に江戸川に迫らんとしてゐる。ところ〳〵に見られる昔ながらの沼田や沼澤地や、松の森を繞らした農家などは、まさにこの地方の聚落がいかに生々しいかを證するに十分である。

斯くして是等新興聚落の發達は、大東京計畫の實現を促したる大きな原因であり、山の手環狀線に平行する外輪並行線の計畫も亦是れに促されて論議されて居るのである。

### （4）大東京の建設から世界の大都へ

年毎に發展膨脹する郊外の聚落も、もとより帝都の發展に伴ふものであつて、今日行政上でこそその區別をおくけれども、經濟上、交通上では之を切り離して考へることは出來なくなつて來た。即ち都市の諸施設を行ふ上には、市内及び近郊を區別しては、到底圓滑なる遂行は望み得ない狀勢にあるのである。

玆に於てか右の兩者を合併する大都市建設の企ては、既に大正七八年の頃、都市に異常な發展を齎らしたる世界大戰の直後に於て、早くも識者の間には盛んに論議されて、遂に大震災前の大正十一年四月廿四日には、官報を以て都市計畫區域の設定が公示される樣になつた。

その範圍は經濟上、交通上の都心とも云ふべき東京驛を中心として半經約十六粁、交通機關によつて約一時間で都心に集散し得る圓圈内に包含される區域を設定し、之に地勢上からは河川、行政上からは町村界等を考慮に入れて定められたものである。即ちその地域は、東は江戸川を界とし、北は埼玉縣界によつて、南葛飾、南足立、北豐島郡を含み、西は北豐島と豐多摩郡の西端から北多摩郡の千歳、砧、二村の西邊、南は多摩川によつて荏原郡を含む、府下六郡に亘る八十四ヶ町村を包擁してゐる。

面積は四九一平方粁で、之に東京市の八一平方粁を加へると五七二平方粁となり、現在の約七倍の廣さにまで擴張されることとなつて、大大阪市の一八一・七平方粁、大名古屋市の一四八・九平方粁、大横濱市の一二四・九平方粁に較べて遙かに廣く、世界の大都市に比較して地域的には正に遜色を認めない。又その人口は約五〇〇萬（昭和五年）で、かの倫敦（七五〇萬）、紐育（六〇〇萬）に次いで世界第三位となるが、將來は七〇〇萬を包含する構築であると云ふ。

既に大震火災による復興事業も全く完成を告げて、今や大東京實現の機運は熟し、昭和七年十月

一日こそその實現の第一日であるのである。吾等の帝都の世界的大都への躍進、想うても自ら朗らかになる。吾等は世界の模範的都市が一日も早く、此處に建設されるのを心から祈るものである。

## 三　人口から觀たる大東京の活動

世界の大都市は十九世紀の後半以來、著しい人口の增加を來してゐる。

人口の都市集中の傾向は眞に世界的の現象で、都市中心は現代文化の一大特色と見ることが出來る。殊に純粹なる產業都市よりも、首府の人口膨脹は一層顯著であつて、首府の人口の大小はその國の勢力を暗示するとさへも云はれてゐるほどである。

わが東京は江戸時代二百六十餘年の間、幕政の中心地として、三百諸侯の邸宅、旗本八萬騎の館、それ等に寄生する雜多の生業者を集めて、世界有數の大消費都市として榮えたのであつたが、維新後も新興日本の首府となり、明治、大正、昭和の數十年を通じて、各方面の發達と共に社會的・經濟的の單元たる大東京の地域の點でも、人口に於て著しい增加を成してゐる。

乃ち、內地人口の約八%に相當する五百萬の大人口を擁し、ニューヨークに次いで世界第二位の大都市となつてゐるのである。

## 一　總人口

昭和五年十月一日の國勢調査の結果に依れば、東京市舊市部の人口は宮城・離宮・皇族の殿邸・外國大公使館・陸海軍の部隊等、特別調査區域に屬するものを除いてその世帶數四十一萬四千六百三十人口は二百七萬九百十三人に達し、新市部はまた世帶數六十三萬三千三十、人口二百九十一萬五千九百七十一人で、合計百四萬七千六百六十世帶、人口は四百九十八萬六千八百八十四人である。

これによると大大阪の人口二百四十八萬は、大東京の人口に較べて其の約半分に過ぎず、大名古屋の百三萬は東京の約五分の一で、六大都市中斷然群を拔いて居る計りでなく、更に之を世界の大都に就て觀ても、遠くシカゴやパリを凌駕して紐育と伯仲し、ロンドンに次ぐ高い地位を占めて居るのであるが、更にその面積に至つては前述の通り現在に倍加して、ロンドンをも凌駕するから、世界第二の大都會たるの地位をかち得るわけである。

## 二　人口の分布

舊市部の人口二百七萬の中、百二十萬は下町に住し、山手には約八十七萬であるから其の割合略ぼ四對三に當る。

山手では芝區の十七萬八千が最も多く、小石川の十五萬一千之に次ぎ、本郷十三萬七千、牛込十二萬九千、麻布八萬六千、四谷七萬五千、赤坂の六萬の順で、麴町區は最も少くして五萬九千を數へるに過ぎない。元來是等山の手の臺地は、嘗つては諸侯の邸宅となり寺社領となつて、何れも大地域が小人數によつて占有された閑區をなしたる所で、今日も東京の重要な住宅區として開拓され、綠林庭園等に當てられて居る面積も可なり廣いので、人口は比較的疎であるのは免れない。唯だ其の間に山手住宅區に對する買物街として、四谷新宿大通り、神樂坂の通り、大塚の通り、本郷の大通り等、帶狀の稠密帶が街路に沿うて發達して居るのは注目すべきである。

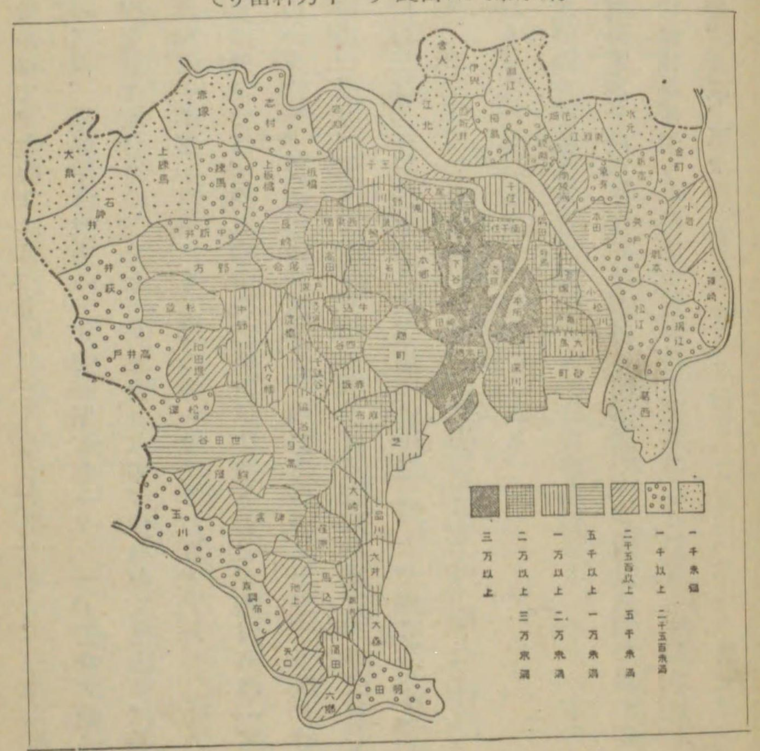
下町は淺草の二十四萬二千を最高として、本所區の二十三萬五千、深川十七萬七千、下谷十七萬四千、京橋十三萬二千、神田十三萬、日本橋十萬八千で、何れも十萬を超え、中にも淺草・本所の兩區は麴町の四倍の人口を擁してゐる。下町は一帶に土地も平坦で、隅田川と之を橫に連ねる幾多の運河は陸の運輸と相俟つて百貨輻輳し、江戸時代の頃より既に商業區として繁華の中心をなしたる處であるが、東京時代になつても近代都市としての諸機關が完備するに伴れて、商家は益々此の地域に集團をなし、今日では市內でも人口の最も稠密な地帶をなして居る。

次に新市部の人口を觀るに、北部の北豐島郡は最も多くして八十五萬を擁し、大東京地域内人口の約六分の一强を占めて居る。日本全國では人口八十萬以下の縣も可なり澤山あるから、北豐島郡の如きは人口の上から云へば、一縣として獨立して居るとしても相當有力な順位が占め得られる。其の他荏原郡は約八十萬、豐多摩郡は六十三萬、南葛飾郡は四十八萬の人口を擁し、孰れも鳥取縣の人口四十七萬を凌駕して居る。更に人口十萬以上を有するものは、荏原町の十三萬二千人を筆頭として、西巢鴨町の十一萬四千人、澁谷町の十萬二千瀧野川町の十萬一千人の四ケ町で、此の外人口五萬以上を有する町は王子町の八萬九千を第一として、中野・吾嬬・三河島・杉並・尾久・世田ケ谷・目黒・淀橋・品川・南千住・大崎の十七ケ町に達し、是等人口五萬以上を有する舊市隣接二十一ケ町の人口を合すれば、約百五十五萬に上り、市部人口の凡そ八割に當つて居る。

## 三　人口の密度

一方粁當りの人口密度を觀ると、市内は二萬五千七百であつて、淺草區の五萬人が最も稠密で、之に次いでは神田の四萬、本所の三萬七千、下谷の三萬六千、日本橋の三萬四千、京橋の三萬等下町に密度が大である。

東京市人口密度（一平方粁當り）






最小なるものは麴町の七千であり、赤坂の一萬五千、芝の一萬八千は之に次ぎ、他の區は何れも二萬以上にして市の平均密度に近い。下町でも深川に人口密度の比較的疎なのは、地域内に水面利用の貯木場が大なる部分を占めて、所謂木場をなして居るからであり、又山の手の麴町や赤坂に特に低いのは、官廳や兵營或は大邸宅、墓地等のために、廣大な地域が占據されて居るためである。

新市部の密度は北部と東部に

大であつて、北部では日暮里町の三萬七千を最大とし、三河島町の三萬、尾久町の二萬二千、南千住の二萬、巣鴨町の二萬一千、瀧野川町の一萬九千、王子町の一萬四千、千住町の一萬二千等であり、東部は龜戸町の二萬五千を最密として、寺島の二萬四千、吾嬬町の二萬、大島町の一萬九千、隅田町の一萬四千等何れも工場の多い地域である。

更に西部では、西巣鴨町の二萬四千を初として、高田町の一萬九千、戸塚町の一萬八千、大久保町の一萬六千、淀橋町の一萬九千、中野町の一萬三千、千駄ヶ谷町及び澁谷町の各一萬七千、代々幡町の一萬等、舊市部隣接村から中央線及び京王電軍、小田急電車に沿つて密であり、南部でも荏原町の二萬三千を最大とし、品川町の一萬九千、大崎町・大井町・入新井町の各一萬七千、大森町の一萬二千、蒲田町の一萬五千等、東海道線及び京濱、池上、目蒲、諸電車の沿線に密度の大なるは、何れも住宅の多い地域であるためである。

是等の中には舊市内の山手よりも密度聚落があり、中には下町の最密な地と伍する所もある。殊に郊外電車を山の手線及び市電と結ぶ處では、附近住宅に對する重要な買物街が發達するので、此處には街路に沿うて帶狀の稠密帶が出現する。銀座と繁華を競ふ西郊の新宿を中心として、北には池袋、大塚、王子の密集地、南には澁谷、五反田、品川の稠密地等、何れも同一理法の下に急速な發展を遂げた新興聚落地である。

然し都心に遠ざかるに從つて密度は次第に小となり、西部の大泉村、北部の舍人村は四百餘人で最も疎であり、上練馬村、伊興村、淵江村、江北村等も五六百内外であつて、新市部町村の平均は五千九百で舊市内平均の四分の一にも達してゐない。

## 四　人口の增減

舊市部の人口は明治維新直後は江戸時代に比べると、殆んど半減して五十九萬六千餘となり、明治十年頃までは、餘り增減がなかつた。江戸幕府の治政二百六十餘年の間、「武士は食はねど高揚子」と、腰間の双刀に特權階級を誇つた徒食の輩を對手として、何の屈托もなく氣樂な月日を送つて來た江戸人にとつて、幕府瓦解の聲は正に晴天の霹靂であつた。

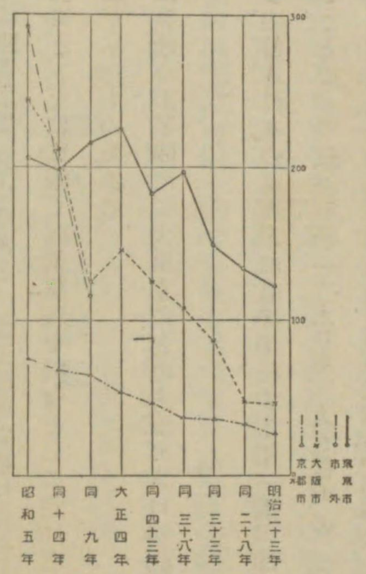
久しい間の太平に馴れ切つて、非常事に處する訓練を全く忘れて居た江戸人の、其の慌て方は目も當てられぬ狀態で、俄に家財道具を纏めて田舍に逃亡するものが相次いだ。

其の間に幕府は倒壞する。麾下の士は離散し、江戸繁榮の母體であつた三百諸侯も、妻子臣從を率ゐて悉く其の封土に去る。さしもの殷盛を誇つた江戸も玆に全く昔日の面影を失ひ、城下は空し

く秋風落莫の巷と化したのであるが、やがて王政再び古に復し、車駕東行して東京は帝都と定められ、新都の經營は日を逐うて進められた。然も爾來十年の間、東京の人口にさしたる增減がなかつたと云ふ事は、幕末の混亂不安がよく〳〵江戸人の膽玉にこたへたものであらう。然し其の後は次第に東京に移住するものも殖えて、同二十年には百二十三萬四千となつて二倍餘に增加し、同三十年には百四十萬三千で增加の割合が比較的少かつたけれども、同四十年に至る十年間には約八十萬を增して二百二十萬となつた。

大正九年の國勢調査による人口は二百十七萬三千で、同十四年には百七十九萬六千に減じ、昭和五年には二百七萬に增した。十四年調査の減少は震災の影響によるものであり、昭和五年は增したりといへども大正九年に比べると十萬餘も少い。この現象は市內定住者の減少によるもので、その割合の最も多いのは日本橋區の十四・八%、次いで神田區の一四・五%、麴町區の一〇・八%、本所區の八・二%、京橋區八・%、淺草區五・八%、下谷五・%で、少いのは赤坂區の三・五%、深川區の二・四%、麻布區二・三%、芝區の一・九%で、殘りの四區は僅かに增加を示して居るが、その割合は四谷區の六・八%、小石川區三・四%、牛込區二・三%、本鄕區〇・九%に過ぎず、東京市の全體では四・五%の減少である。蓋し十年前既に飽和狀態にあつた下町地域の商業街は、大正十二年の大震災と、それに續く區劃整理を機會として定住者を減少し、住宅地域である山手において幾分の增加をみたものである。

三大都市人口增加比較

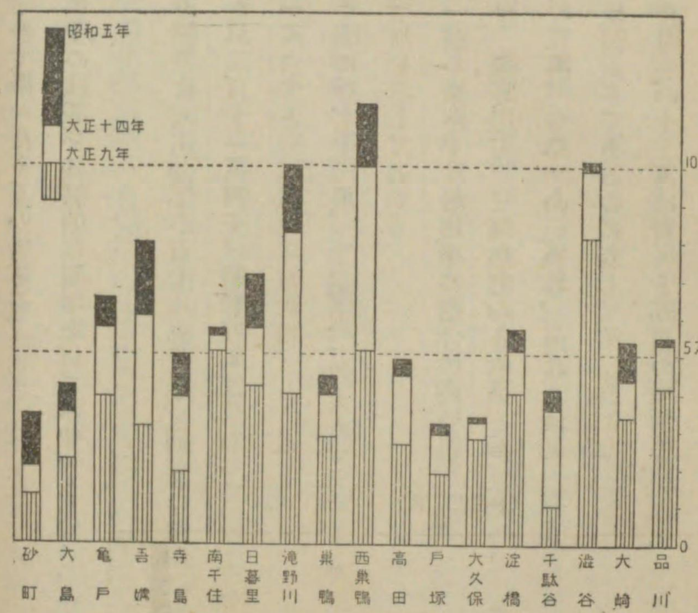



次に最近の十年間に、大東京のどの方面に人口が膨脹してゐるかを觀察するのも興味ある問題である。

先づ注目されるのは舊市に直接連續する第一圈、即ち山手電車沿線の町村に於いて增加率が割合に低いことで、千駄谷町の一二・五%、大久保町の二〇・九%、澁谷町の二六・三%、品川町の三五・五%、淀橋町の四一・四%、巢鴨町の五四・二%等はその例で、舊市の東緣でも南千住町の如きは一〇・五%の增加に過ぎない。

處が第二圈として前者に外緣する町村に於ては、之とは反對に極めて顯著な增加を示して、荏原町の一、四五〇・二%、杉並町の一、三〇六・一%を最高とし、何れも數倍の膨脹である。更に其の外

新市域人口（第一圏内）




圏にある第三地帶とみるべき大東京の最外側になると、增加率は急減してゐるが、然しこれでも概して第一圏よりは高い。要するに第一圏は大正九年において既に比較的飽和狀態に近かつたので、郊外電車の發達と共に非常な勢で注入し、第三圏は距離の關係から前者に著しく劣るものである。そして之を方面別に見ると、西部から北部に續く住宅地域において最も多く增加し、次では京濱沿岸の工業地域と江東江北の工業地帶とが著しく目立つ。東北から東部にかけての最外側は、住宅地としても工業地としても歡迎されない部分を占めてゐるために、人口の增



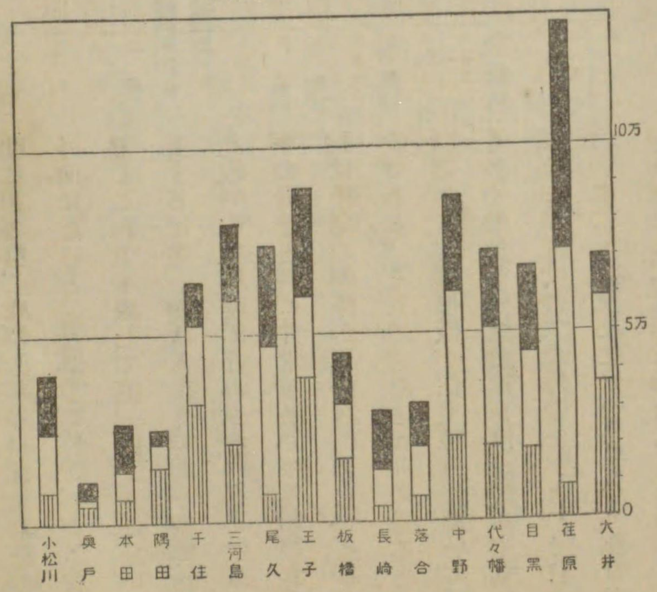
加は極めて微々たるものである。

更にその狀態を具體的な數字を以て示すと、

新市部では大正九年が百十八萬五千、同十四年が二百十一萬四千、昭和五年は二百九十一萬六千と云ふ風に年毎に增大し、最近十年間に百七十三萬一千、即ち一四六・〇%の增加を示してゐる。

第一圏の聚落では增加率の割合に高い西巣鴨町、瀧野川町、三河島町の各六萬、吾嬬町の五萬、寺島町の三萬等、何れも最高二三倍が止りであるのに對して第二圏になると荏原町の十二萬は實に十五倍の增加であり、尾久町は九倍に、杉並町は十三倍に、

新市域人口（第二圏内）

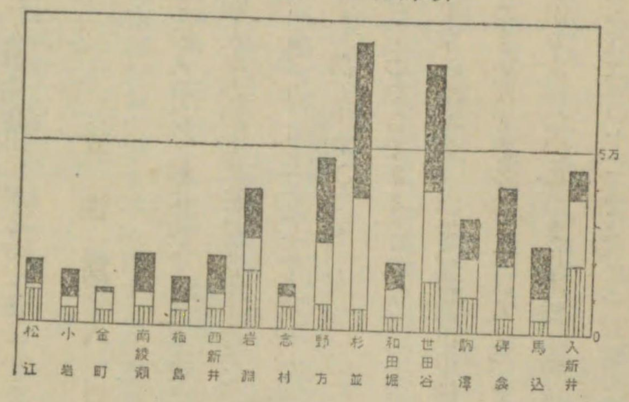


碑衾町は十倍に增し、其の他中野町、代々幡町、大井町、小松川町等、近郊町村の目覺ましい發展振りは誠に驚嘆すべきものがある。

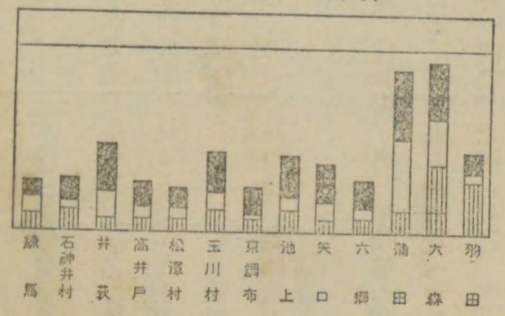
斯くて今や東京市の隣接地域に於て人口一萬以上のものは、十年前に較べて倍加して實に六十二を算する樣になつた。

尙ほ、大東京の地域に於ける人口自然增加の實情を見るに、昭和元年乃至五年の平均に於て舊市內の出生は五萬一千、死亡三萬で、二萬一千の增加であるのに對して、新市部の出生は十四萬七千、死亡八萬一千で六萬六千の增加を示し、これ

新市域人口（第三圈內）




新市域人口（第四圈內）




亦壓倒的な動きを見せて居る。それにしても大東京の地域では、一日平均三百餘人が墓場に送られて五百餘人が生れ出て居るのであるから物凄い。

## 五　性別人口

都市の人口は一般に男が女よりも多いのが普通であつて、大東京は殊にその特長を表はしてゐる。昭和五年の調査に於ける舊市內の男女性別分配を見ると、女九十四萬三千に對して男は百十二萬八千であつて、女一〇〇につき男は一一九の割合を示してゐる。又新市部は女百四十萬一千、男は百五十一萬五千であつて、女一〇〇に對して男一〇八の比、更に大東京の全體では女一〇〇に對し男一一三の割合である。

大東京の地域が、內地の諸都市中橫須賀、佐世保、吳、旭川等の軍事的都市を除いて、最も男の割合の多い所であることは注意すべきである。之を區町村で比べて見ると、舊市內は各區何れも男が超過で女一〇〇につき日本橋、神田は各一四二、京橋一二八、芝一二一、深川一二〇で、四谷が最も少くて一〇二である。

新市部で男の超過は、戶塚町の一二五、駒澤町の一二三、南綾瀨町の一二〇が主なもので、又女

の超過せるものは、金町の男一〇〇に對し女の一一五、舍人村の男一〇〇につき女の一〇八を最多として、入新井町、練馬町、隅田町、龜戸町、江北村、篠崎村等、附近に紡績・染織等の大工場を有する處である。

一體人口の性別分配に於ては、男女の數に餘り開きのないのが理想の社會であつて、其の甚だしいのは不幸である事は云ふ迄もない。處が大都市になると種々の原因からして權衡を得ないものであつて、先づ第一に勞働の關係から男が多く集つて來る。田舍で生活の行詰つた人々も、大都會に出たら何とか暮しの道も立つだらうと集つて來るし、又次男以下の所謂冷飯連中も暮すなら都會で、と、先祖傳來の故鄕を見捨てゝ大都市に憧れ上る。更に都會には敎育文化の機關が完備して居るので、地方から遊學のために集るものも多い。

斯くて何れの都市に於ても男性の數は常に女性を凌駕するのが普通であるが、然し其の結果として大きな惱みが自ら醞釀される。即ち動的で積極的である男の數の多いことは、一方では其の土地に活氣があり、常に生々した活動の行はれて居る事を示すものではあるが、他面には性的に無理が敢行され易く、此の弱點につけ込む一部女性の魅惑的な行動と相俟つて、都市の警備上に幾多の注意すべき問題が生れて來るのである。

## 六　大東京への入移住者

大東京の人口の增加は、自然增加よりも寧ろ入移民の多いことに因る、移住增加に基くものである。

大正九年舊東京市の人口二百十七萬の中、四二・五％に相當する九十二萬二千餘人が市內の出生で、他は凡て入移住して來たものである。即ち東京府下の新市部に出生したものが八萬七千六百餘人（四・〇％）、植民地及び外國に出生したものが一萬五百餘人（〇・五％）で、他府縣から移動して來たものは殘餘の百十五萬二千二百餘人に上り、市の人口の實に五十三％を占めてゐた。かの大震災の當時本市が殖民地たるの觀を呈したのも之が爲である。

更に之を大東京地域に就て見ると、他府縣入移住者は百七十三萬であつて、その四三％の七十五萬は關東六縣で占め、二二％の三十七萬六千は關東を圍む福島、新潟、長野、山梨、靜岡の五縣で占められてゐる。

今これを府縣別の實數にして見ると、千葉の十二萬八千、埼玉の十一萬六千を最多として、新潟の九萬六千、茨城の七萬八千、神奈川の六萬四千、栃木の五萬八千、長野の五萬等之に次ぎ、群馬

の四萬六千、靜岡及び愛知の各四萬二千、福島及び富山の各三萬四千、宮城、山梨、三重の各二萬四千、石川、福井の各二萬二千、岐阜、大阪、山形の各一萬八千、秋田、京都、北海道の各一萬四千、滋賀、兵庫、廣島の各一萬二千、福岡、岩手の各一萬等の順位で、最も少いのは宮崎の二千である。

尙以上を除く殘餘の府縣は、京阪神及び名古屋等の吸引圈に入るものであるが、東京が帝國の首府であると云ふ關係から、大阪に比較して吸引力の普遍的であるのは特色といふべきである。

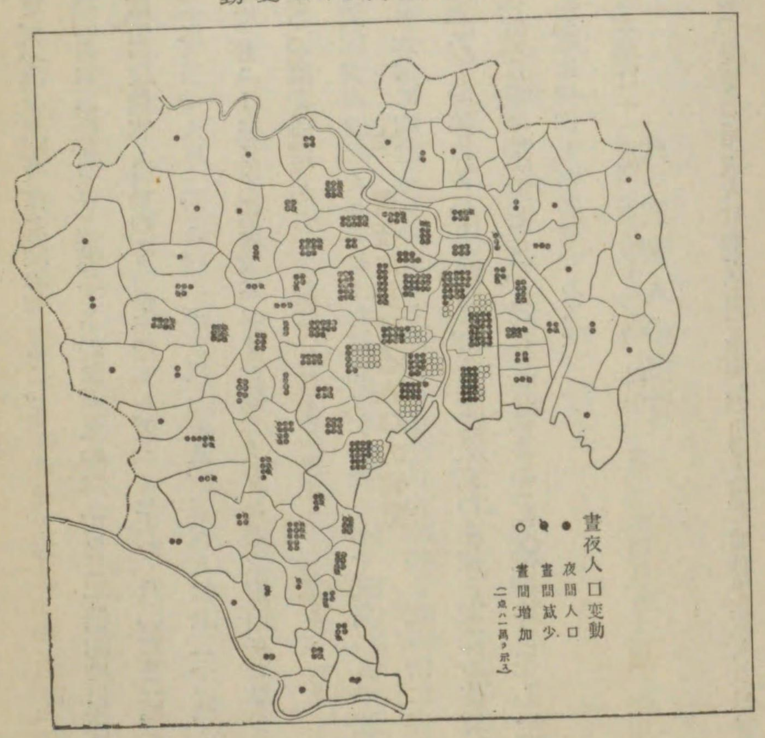
## 七　晝夜に於ける人口の移動

東京市の下町方面では、晝間に於ては約八十五萬の人口を增加する。その最も多いのは麴町の二十萬であるが、之は主として丸の內に出入するものであつて、それがために丸の內では夜間の十八倍となる。

又日本橋は十二萬、京橋十一萬、神田、芝、本所は各十萬、深川は八萬、淺草は四萬の增加である。

而して是等の增加人口のうち、市內の山手から通勤するものが、小石川の二萬を最多として合せて十萬ばかり、新市部から七十萬、大東京地域外から約五萬と推算されてゐる。

東京市晝夜人口變動




七　晝夜に於ける人口の移動

市部から晝間都心に向ふものでは西部が最も多くて澁谷町の四萬、目黑、代々幡、中野各町の三萬、野方、杉並、淀橋、世田ケ谷の二萬を主として約三十萬であり、南部は荏原町の三萬、品川、大崎の各々二萬を主として約十五萬、北部は王子、千住二町の各三萬、西巢鴨、瀧野川尾久、三河島、各町の二萬等で約十五萬、東部は吾嬬、龜戸二

町の各二萬を主として約十萬である。

晝間人口の最も多く集合するのは、丸の内から日本橋通にかけての所謂大東京の都心地域で、此の界隈には收容人員五〇人以上のビルデングが約一八〇に及び、最大の丸ビルの五三七三人を初めとして、二千人以上、八、一千人以上十八、五百人以上二十五、其の多くが密集して建てられて、恰も大ニューヨークのマンハツタン區、大ロンドン市のロンドンシテイーにも比すべき活動を續けて居るのである。

所謂朝夕のラツシュアワーを限度として動く七十五萬の人の流れは、新市部各地の目覺しい發展振りを如何に物語るものである。實質的生活の本據を舊市内に有して居りながら、其の居住地を郊外に求めて次第に押出して來る。そこで生活の本據と實際の住所とを包括する所謂大東京建設の必要が、茲に益々顯著となり、殊に輓近郊外の交通機關の目覺しい發展に伴つて、此の計畫が愈々實現の機運に到達した所以である。

## 八　東京人の氣質

東京人はその半分以上が全國各地からの入移住者の集合であるので植民地氣分が濃厚である。市内外の出生者も、其の出生地に永住するものは極少數であつて、市内に住んで居るとは云ふものの、市内の各地を轉住するものが多いのである。殊に、さきには江戸の末期一時繁昌の中心を失つたので町人四散し、後には大震火災によつて市民の離散が少くなく、而も何れも再び移住したものには新來者が多い。官廳と學校とは市の繁榮の一大原因であるが、然も官吏といひ教員といひ、將たまた學生といひ所謂知識階級人の轉出入もこれ亦極めて多い。昔の人は「地は性を移し居は俗を易ふ」と云つて、自然人文の環境が人間の性格を支配することの誠に大きい事を述べて居るが、然しかゝる環境にある東京人に就ては、確たる普遍的な氣質を見出すことは困難である。

徳川の流れ穩かな世にあつては、火事を戰と働く嵩の者等に質實剛健な氣風が養はれて、武士には却つて軟弱な風を生じて居た。殊に元祿華奢の餘弊を受けて、一時の富は米價の暴落に忽ち生活困難の聲とかはり、金錢は生命より貴く、町人も旗本家人の株を買つて立身を謀つたり、學者、醫者でも幇間をなし、書畫俳人でも富人の鼻息をうかゞふといふ有樣になつた。文弱の弊は時の古今地の東西を問はぬものである。

併しながら江戸時代には、猶頗る嘉みすべき江戸つ子氣風といふ者が博く傳はつてゐて、大いに賴もしい氣分も常に市民の間に漲つてゐたのである。抑々江戸は三河武士の第二の故郷で、三百諸

侯の侍も數知れず參觀する。この間におのづから「食はねど高揚子」の氣高い品格も保たれ、人情道德の芳芬も全く地に落ちはしなかつた。それに又旗本奴・町奴といふものが起り、俠客を以て自ら任じ、謂はゆる男伊達の振舞を爲し、その流す害毒も少なくはなかつたが、又なかなかに取るべき點もあつた。常に自ら男を磨き、强きを挫いて弱きを助け、命を輕んじ義を重んじた。

「他人にても仲間にても賴まれ、『何とぞ御加勢願ひ奉る』と只管に願へば命を捨てゝも反古に致さず、只男道の强きを表にして、義を守り節を失はず。さしてあばれ歩くにてもなし。無理なることもせず。無心がましきことは仲間の法度なり。少しでも人に和き詞を云ふことを第一に嫌ふ組合なり」と或書物には記してある。

此等の氣風に明け暮れ涵養された江戸つ子は、氣候風土の自然の薫陶と相俟つて、頗る香しい江戸つ子氣風を具へたものであつた。「江戸つ子は宵越しの錢をつかはぬ」といふ貯蓄心の乏しいことは感心出來ないが、「江戸者の梨を食ふやう」に、さぶり〳〵と切れ味のよい所は側目にも氣持がよい。「失禮ながら神田御上水で產湯使つた兄さんだ」と、自重自任の心に富んだ所は誠によい。

江戸つ子氣風は延いて日本全國の人情風俗までも支配したものである「江戸見ずの權兵衞鮫」といへば世間知らずを諷する言葉。誠や「江戸見た雁の歸りやう」、たゞかしましいのみでない、到る處に幅のきけたものである。

知らず現代の東京つ子にそんなゆかしい氣風があるであらうか。日本全土の人情風俗までも感化しゆく程の抱負を持つて居るだらうか。空しく文明の華の香に醉ひ、徒らに現代思潮の渦に捲きこまれて、自己の本領をさへ失つて了ふやうなことがないであらうか。

「物見高いは江戸の名物」の路上の人だかり、さては附和雷同と、「生馬の目を拔く」の機敏さは今も昔も變りもない。

その昔は五人組の制の下に近隣よく相協和したが、隣家に盜人が入るも知らぬが半兵衞の巷と化した今日、僅かに町會によつて隣保扶助の實を擧げんとしてゐるが、市民にその熱低く、偶々氏神の祭禮に親睦の宴があれば、その終は喧嘩で分れるといふことも珍らしくない。

旅の人の集りの東京には「旅の恥はかき捨て」が白晝行はれ、不良橫行して良家の子女を誘惑し、電車自動車の中には「スリ」が入り込み、「人を見たら泥棒と思へ」を痛感させるものがある。

「手に取るなしばし野にをけ百合の花」の床しい心根も今は昔の語草、浮間原の櫻草は跡方もなく各所の櫻樹も次第に枯れんとしつゝある。

熱し易く冷め易いのは今の東京人の一特徵とも云へよう。かの大震災にはよく困苦缺乏に堪へ、

復興事業に熱中したが、喉元過ぎて熱さを忘れ、災前にも増して華美輕佻の風、到る處に漲つてゐるのを如何にせん。

「岡目八目」の批評眼ばかり高くて、實行力に乏しい憾みのあるのも缺點の一つか。市長の更迭の頻繁さ、はては、何々問題、或は何々……等、徒らに掛聲のみ高く遲々として實現を見ないのは、何處にその原因があるのであらうか。

# 四　帝都としての東京

## 一　帝都としての地理的條件

日本の首府たる東の京、我が大君の膝下たる東の京、名も太平洋の清き波に洗はれ出づる朝日の光を、世界の何處よりも先に眞正面に受けて、平和の氣象に充ち溢れたる東の京、實にその京こそは我等の日頃年頃、樂しく住まふ鄕都東京である。

海邊、山奥、荒野の末も「住めば都」のたとへ、これは又まことの都、世界に名だたる東京市、その市全部を我がもの顔に大きく住まふ我等市民の幸福は、比べて喩へるものがあるだらうか。

さても我等の東京は今日世界の巨大都市中第三位を占めて燦然たる文化を諸施設に誇つてゐるが、是れ單に政治上の關係を以てして、僅か六十年間の所産にあらざることは云ふまでもない。

さればその現在を知り將來を卜知せんとするものは、須らく先づ東京の地理的位置と、地文及び人文の關係を明らかにせねばならぬ。

### 一　帝都としての地理的條件

## (1)　帝都の優越的位置

東京は日本の中央部を占めたる關東地方の、その又中央に位して、東京灣に臨み、最大の海洋太平洋を前にして最も形勝の位置を占めてゐる。

先づ其の位置を關東地方に就て觀るに、東京は會津街道の山王峠から、房總半島の突角洲崎に引いた南北線と、銚子半島の東端犬吠崎から、甲州・青梅街道の裏路大菩薩峠に引いた東西線との交叉點に當り、全地區の中央部を占めてゐることは何人も直ちに氣付くところである。

次に海岸線を伊豆半島から鹿島洋まで追跡すれば、相模灣の半圓を描いた灣入に續いて、更に深く東京灣が廣い平野の中央部まで入り込んでゐることに誰しも氣がつく。そこで此の地形的兩方面から考察すると、東京は瀨戸内海に於ける大阪、伊勢海に於ける名古屋と同樣に、大平野の中央部深く入り込んだ灣頭を占めて、海陸の連絡上頗る優越の地位にあることが判る。

尋いで東京の位置を我が國全體より觀るに、我が國は地形上五方に向つて其の肢幹を出してゐる。即ち北東の千島列島と北の樺太島は北方に於て二方に向ひ、南西の琉球及び臺灣と北西の朝鮮は、南に於て二手に分れ、又南は小笠原諸島によつて東西に長い南洋諸島を結んでゐる。

その胴體とも云ふべきものが北海道、本州、四國、九州であつて、心臟とも見るべきものが即ち東京である。東京より千島の占守島と臺灣への距離は略々等しく、又樺太の國境へも朝鮮の國境へも、小笠原諸島の南方硫黄諸島に至る間の距離も各々相似てゐる。

而して此の四道はアジヤ大陸に接し、南の一道は太平洋を縱斷してゐるので、即ち東京はアジヤ大陸を後背地とし、太平洋を前面として、世界に雄飛すべき畫策の地とも云ふべき位置を占めて居るのである。

東京の位置は更に之を世界的に觀ても、亦誠に惠まれた所にあることが判る。即ち輓近太平洋が世界交通の大道となつて、其の周邊特に東岸及び西南岸の諸國が日毎に開發されて行く現在では、世界の政治・經濟・文化の重心たるの幸運を招來せんとする樣になつたのである。太西洋の西岸には倫敦と紐育が雙眼の樣に光つて居るが、世界最大の海洋たる太平洋岸には僅に我が東京と大阪が、上海、香港に呼應して西岸に氣を吐いて居るだけで、東岸には之に比すべき大都市の發達を認められぬ。「海を支配するものは世界を支配するものなり」で、今や世界を擧げて太平洋時代の出現を見んとしつゝある時、其の沿岸地帶のピカ一として嶄然頭角を擢んでて居る東京は、今後東京港の完成と相俟つて、其の世界的位置の價値を益々發揮するに隨ひ、其の將來の愈々有望多幸なるべきことは容易に想像出來るのである。

### (2) 前面と後背地

我が國第一の大平野である關東平野は、東に北に西に開けて一大農業地をなし、又我が國第一の良灣と稱せられる東京灣は、深く內陸に灣入して沿岸に海波靜穩の良錨地を作つて居る。

關東地方に於ける耕地面積は、我が內地に於ける耕地の總面積に對して約一五%に當つて居る。內地の僅か八・三六%の面積に過ぎない關東地方で、其の面積の割合に二倍する耕地面積があることは、此の平野が農業地として如何に惠まれてゐるかを暗示するものと云へよう。現に此の地方の總人口の三七%が農業者で東京、橫濱、等の如き大都市を擁して居りながら、商業者の一五%に較べて二倍以上に達して居るのである。

更に前方の海面に就ては、今日なほ眞の外港は橫濱であつて、恰も大阪の神戸に於けるが如き役目をつとめて居るに過ぎないが、近く大東京港の完成と相俟つて、此の惠まれたる形勝に據つて其の全機能を發揮し得る日も遠くあるまい。

斯くて奠都以前には武家政治の中心地として、全國の大小諸侯を制馭するに絕好の位置を占めたる東京は、今や豐穰肥沃の大平野を背後にし、水路四通の海面を前にして、經濟的都府としても西の大大阪に比すべき活躍が續けられて居る。

### (3) 帝都の防備線

室町時代文武兼備の名將太田道灌が、江戸の地をトして此處に築城するに至つたのは、當時此の地が地勢其の他から觀て、軍事上如何にも緊要の所であることを見拔いたからに違ひない。

蓋し江戸の地形たるや西に臺地があつて海に迫り、北に開けて南に狹く、東北並びに常總の控制地として最も要害に當る。當時の地形は德川時代の築城並に都市計畫に伴つて、人爲的に可なり改められたので、江戸の聚落にも亦著しい變化があつて、今日もとの儘の狀態を確實に知らうとするのは餘程困難であるが、然し今の舊本丸を中心として、道灌の江戸城は築かれてをつたと云ふから、其の位置は正に今日の東京の山手臺地の中の、背陵の尖端に當つてゐた譯である。當時今の下町一帶の土地は、神田川、荒川、利根川等、大小數多の河川が思ふまゝにそれ〴〵の流路を作り、その間には葭葦に蔽はれた洲があり、沼澤があつて、いかにも新しい時代の三角洲たる面影を充し、滿潮の場合には河海打ち混つて一面の海かとも見える有樣であつた事は間違ひない。

されば道灌時代の江戸城は、即ち山手臺地の背陵に築造されて、西には武藏野の臺地を控へ、東は東京灣の水面に臨んで、その要害はこの上もなかつたであらう。

道灌自身が城の位置について

「我が庵は松原つゞき海近く」。と、書殘してゐるのは、この有樣を物語つてゐるに外ならぬ。

德川家康に至つては天下の覇府として、幕府百年の基礎を鞏むる上の好適地として此の地を繼承し、城地を擴充して天下に號令した。即ち牙城たる江戸城を守る要害としては箱根・小佛・碓氷・白河の關等の各山關を第一線とし、多摩川、利根川、江戸川を第二線とし、山道は狹くして人馬の通行を阻み、川には架橋を禁じて渡船を用ひさせた。

又小田原、八王子、川越、高崎、前橋、宇都宮、水戸、關宿等には、何れも親藩譜代の大名を置いて幕府の固めとし、天然の要害に加ふるに人爲的の障屏を以てした。斯くて之が三百年太平の基となしたのである。

帝都となつてからの東京の防備は、更に周到を極めて萬遺憾なきを期せられて居る。

陸海軍の高級機關が中央官衙區内にあるのは勿論、第一師團の外近衞師團と稱する特殊の師團を置き、合計二個師團の兵力を以て警備に當つて居る。歩兵の兵營は宮城に接した九段の田安門内に二箇聯隊、麻布及び赤坂の臺地に四個の聯隊があるが、共に帝都の都心に近き要地を占めて居る。

其の他四谷と牛込の臺地に輜重兵と騎兵の一部が置かれてあり、又西部駒澤には砲兵營と共に集團的な軍用地が形成され、澁谷に通ずる大山街道によつて政治的主要地域と結んで居る。工兵隊は赤羽にあつて、やゝ中心から離れて居るが、之は臺地と荒川を利用して各種の練習をなす上の便宜がある爲である。

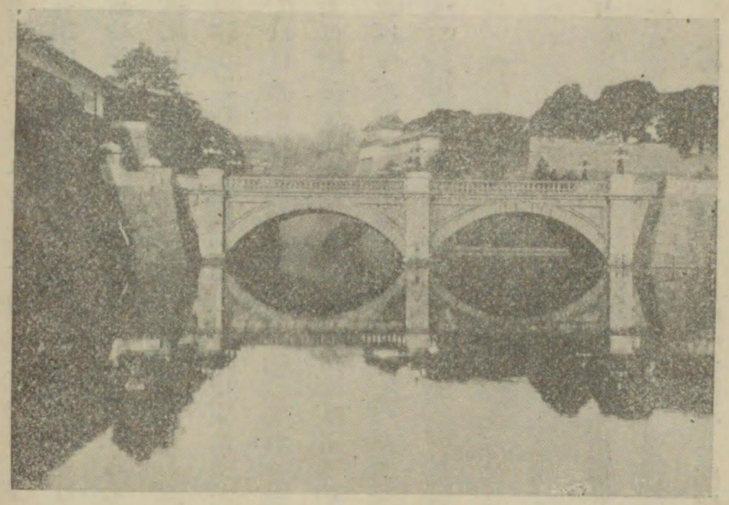
都市の地域價値の向上に伴ふ當然の結果として、都心に廣い地域を持つて居た軍事工廠や練兵場は、次第に郊外へと遠心的移動を始めて來た。大塚の兵器廠も江東の被服廠も既に郊外に移り、小石川の砲兵工廠も亦他へ移轉の準備中である。練兵場は最初日比谷にあつたものが青山に移り、更に今では代々木の原に移された。

以上は帝都警備上の内緣地域に分布するものであるが、更に其の外廓を繞つて立川の飛行場、習志野及び下志津原等各種兵科兵營地、横須賀の軍港、同要塞地帶、霞ケ浦の海軍航空隊等があり、相俟つて防備を鞏くして居る。

## 二　宮　城

今日の宮城は昔の江戸城の一部をなす舊西の丸である。明治元年江戸城を皇居と奠め給ひ、名を東京城と改められた。翌二年三月明治天皇御着輦、直ちに西の丸に入らせ給ふたが、同六年五月五日の火災のため皇居全燒し、紀伊德川邸（今の赤坂離宮）を假皇居と定められた。爾來皇居再建の

二重橋



議あり、同十七年御起工、廿一年十月落成し、翌廿二月一月十一日御移御遊ばされてより、連綿として今日に至つたのである。

其の總坪數は一二七〇三坪で、內部は表、奥の二つに分れ、表は主として儀式のため用ひ給ふ處奥は即ち兩陛下の御殿及び之に附屬する屋舍である。表御殿は正殿、豐明殿、御座所、御學問所、鳳凰間、千種間、東西溜間、南及び東の御車寄等から成つて居る。

構造は日本風で、御用材は總て檜木を用ひ、屋根は全部銅瓦で葺かれてある。內部はすべて立禮に適した御設備で、床は全部板敷であり、建具類も皆洋式であるが、裝飾には日本固有の手法が用ゐられてあると承はる。宮城の正門は舊大手門即ち二重橋で通用門は坂下門である。二重橋はもと西丸下乘橋と云ひ木橋であつたが、宮城御造營の際に今日のものに改築されたのである。四邊は昔ながらの石垣綠濃き大內山の松の色、其の間に隱見する殿舍の碧甍白壁、誠に崇高の極みである。正門からは南車寄、坂下門からは東車寄に至る。南車寄は南面し、ともに唐破風造りの玄關が立つてゐる。

南車寄の北に、中庭を距てゝ南面して正殿がある。廣さは百六十疊數、內部は二重折上格天井で極彩色の裝飾を施し、莊嚴の氣溢れるばかりであると洩れ承はる。三大節其の他の重大なる御儀式を擧げさせられる御殿にして、正面には兩陛下の御座所がある。

正殿の後の中庭の南東隅に東溜の間、南西隅に西溜の間がある。廣さ各々百七十五疊半あつて、參內群臣の控室であるが、時には賜饌、拜謁等に用ひられる。中庭の北には豐明殿がある。廣さ二百七十二疊敷、吉例の佳節に群臣に餐を賜はるところであつて、掃き清められた中庭の清淨さ、輝くばかりに拭き清められた殿舍の美しさ、誠に神々しさ云はん方なき有樣であると云ふ。

東車寄は豐明殿の東にあつて兩陛下の出入し給ふ所であり、その南北にも溜の間があつて、こゝで叙位の式が行はれる。

豐明殿の南西に接して千種の間がある。欄間から天井まで皆草花が描かれて居るので此の名があ

ると云ふ。廣さは百四十四疊敷で、拜謁、賜宴等に用ひられる。千種の間の北には牡丹の間及び竹の間があり、其の西には皇族大臣の室、またその南には侍從長、侍從武官の詰所が立ち並ぶ。正殿の西には內謁見所即ち鳳凰の間があり、之に接して西に表御座所即ち御學問所の一區がある。以上は表向の建物の主要なものであるが、更に奧向きの殿舍はこれ等の西に接して建ち並んでゐる。

宮城の北西、舊西の丸吹上に紅葉山がある。幽邃閑雅の勝地にして、もとは德川家康の東照宮を始め、歷代の小廟のあつた處であるが、戊辰の年に悉く撤去された。紅葉山の西南、道灌堀を隔てた一區は即ち吹上御苑で、寬永年間諸侯の邸宅を廢して以後、十萬餘坪を共のまゝ庭園として存せられたのである。

中央に池あり、琵琶湖に擬す。池の北に楓林紅葉茶屋あり、その南に賢所が在します。三種の神器の一たる御鏡を、天照大神の御靈代として奉安されて居るのである。

御苑の南端に當つて日清戰役に關する記念品を藏する振天府があり、之に對して日露戰役の戰利品を收むる建安府、又臺灣役の懷遠府、日獨役の惇明府等がある。

## 三　二重橋前の御苑

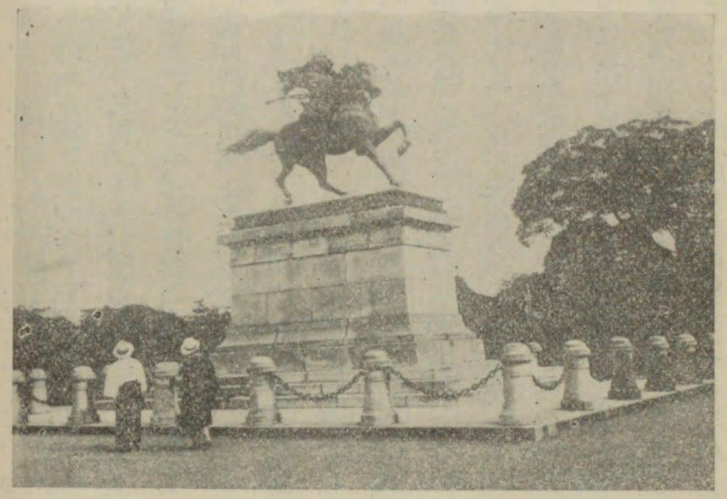
正門前の御苑は西の丸下と呼ばれた所で、今は俗に二重橋前大廣場と稱してゐる。東は和田倉門及馬場先門から濠を渡つて八重洲に出で、南は井伊大老で名高い櫻田門を經て日比谷、霞ヶ關に通ず。廣さ三千三百アール、綠の芝生の上には靑松が美しく植込められて、誠に優美と崇高を兼ねたる一廓をなす。その間に日露の役戰勝を紀念して開かれた凱旋道路は南北に通じ、又馬場先門と東京驛に至る行幸道路とは濠を渡つて東に走る。美しく鋪裝された街路の兩側には、銀杏の並樹がのびのびと綠映えて居る。南廣場の中央には別子銅山開拓二百年の紀念として、此の銅山採掘の銅で鑄造された楠公騎馬の銅像がある。明治三十年住友氏の献上にかゝるもので、高村光雲翁以下諸大家の合作に成り、畏くも明治天皇が特に勅許御嘉納遊ばされたものである。近年武神楠公に對し、文神菅公の銅像建設も荐りに計畫されてゐる。

元來この一帶は江戸時代には譜代諸侯の邸宅や、老中・若年寄の役宅が多かつた所で、維新後はそのまゝ重なる官衙や貴顯の邸宅が置かれて居たが、宮城新營とともに撤去されたのである。

今では東は丸の內の會社街、即ち大東京のビジネスセンターと、西は霞ヶ關から永田町にかけての官廳街、即ち政治の中心との往還ともなつてゐて、自動車の往來が極めて頻繁である。

毎年一月の消防出初式はこゝにて行はれ、かの帝都復興祭も亦こゝに擧げられた。その他陛下御

楠公銅像



親閲の諸式は、今日多くは此處で行はれるのである。

## 四　離宮と御所

離宮及び御所には、赤坂離宮、青山御所、濱離宮、霞ヶ關離宮等があり、外に新宿御苑がある。

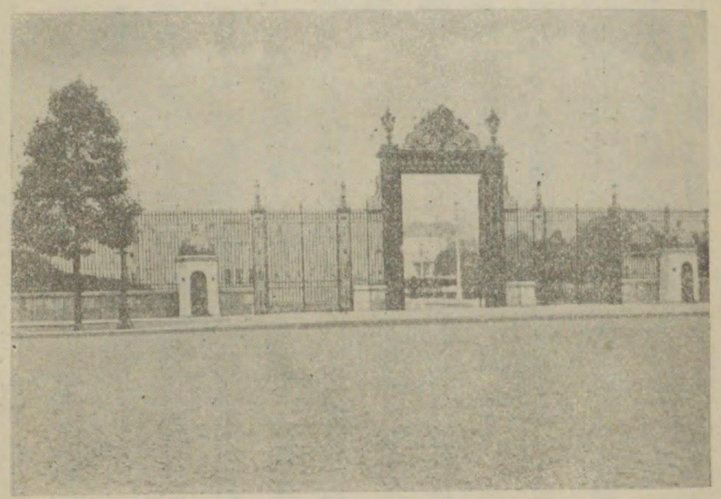
赤坂離宮は離宮でも最も古い歴史を有するものであつて、もと紀州德川家の邸地であつたが、明治五年三月離宮となし給ひ、同六年五月皇居炎上の際は假皇后と定められた。

御苑は青山御所につゞき、今日なほ天然の風景を存し、昔の鎌倉街道の杉並木や、一里塚の樫の大木、西行法師の舊蹟等も保存されて紅楓の候、林泉の美は一層であると云ふ。明治十三年以來每





赤坂離宮



秋觀菊の御會を催されてゐる。明治二十二年宮城御還御の後は、東宮御所に充てられて居るが、御所は明治三十一年の春起工されて、同四十二年竣工したるものであつて、洋風三層の御建築は宏壯幽雅その工事に使用されたる大理石は、遠く佛・英兩國の産を運び、其の樣式は各國の宮殿を參酌して造營されたものであると云ふ。正門は舊四谷見附に面し、門前には今上天皇の東宮に在せし時の御渡歐記念園がある。

青山御所は大部分がもと篠山藩青山家の邸地であつて、赤坂離宮に接し、明治七年七月以來皇太后宮の御所として一に東御所とも稱される。今は皇太后宮御在所の一部を、澄宮殿下の御殿にあてさせられてある。

濱離宮は京橋區の築地にあつて、東京灣に臨んでゐるのでこの名がある。昔は德川將軍の鷹狩の地であつて、後海を埋めて別邸となし、海中屋敷と云ひ又濱御殿と云つた。

慶應二年幕府の海軍所が此處に置かれたが、明治三年離宮と決められて他に移された。苑內は廣さ二千五百アール、老樹生ひ茂る中に池あり、海魚こゝに躍り輕舟を浮べられる。池中に中島御茶屋があり、渡すに三橋を以てし、橋上に茶棚がある。海岸の芝地には汐見御茶屋がある。苑中櫻樹多く、年々觀櫻會を催され、又鴨獵を行はせらるゝことあり、時に外國貴賓の接待所に使用される。芝離宮は濱離宮の南に接す。もと元祿年中、老中大久保忠朝が經營した名園で、池を主として島を築き、橋を架した純日本風の庭園である。明治九年離宮と定められたのであるが、大正十三年今上陛下御成婚の紀念として東京市に御下賜になり、今は恩賜公園として一般に公開されて居る。

霞ヶ關離宮は櫻田門の南西霞ヶ關一丁目に在り、往昔奥州路の關門があつて、古歌にも詠まれた名所である。もと福岡藩黑田侯の邸であつたが、後副島伯の邸となり、明治八年有栖川宮御邸となつた。明治三十七年に離宮と決められて、今日では時々外國貴賓などの接待所に當てられ、又皇室の御宴などにも使用される。

新宿御苑は四谷區新宿町にあり、舊內藤侯の邸地で、維新後は勸農局の試驗場となり、今は皇室の御料地となつて居る。苑內は泉池美しく、又內外の花卉蔬菜を培養せられ、殊に廣濶なる芝生はゴルフの練習に使用される。櫻樹多く、大正六年以來每年觀櫻の御宴を催され、秋は觀菊の會を催されることになつた。その一部には大正天皇の葬場殿址がある。

## 五　皇族邸の所在

東京が我が國の帝都の地として、皇族の御居住地あると云ふことは他の都市に較べて一つの大きな誇りである。されば、此の皇室御關係の地域が何處に何う云ふ風に所在するかと云ふ事は帝都の住民たることに絕大の誇りを持つ吾等としては、十分に承知して居らねばならぬ。

而して其の先づ第一は宮城であつて、更に直接に皇室御關係の所として前述の通り、宮城の外に赤坂、霞ヶ關の各離宮、青山御所、新宿御苑等あり、次に皇族御關係の御屋敷としては、皇居を中心とした西南部一帶の臺地、即ち麴町區に五ヶ所、芝區に四ヶ所、赤坂、麻布兩區に各一ヶ所、市外澁谷町に三ヶ所ある。

麴町區には、伏見宮（紀尾井町）山階宮（富士見町五丁目）賀陽宮（一番町）閑院宮（永田町二丁目）昌德宮（紀尾井町）の御邸、芝區には高松宮（高輪西台町）朝香宮（高輪南町）北白川宮（同

上）竹田宮（同上）の御邸、赤坂區には秩父宮（表町御殿）麻布區には東久邇宮（市兵工町二丁目）澁谷町には東伏見宮（常盤松）久邇宮（下澁谷）梨本宮（美竹）の御邸がある。何れも舊諸侯の邸地であつて、高松宮邸は細川侯、閑院宮邸は松平氏、伏見宮邸は尾張德川侯、久邇宮邸は堀田氏の屋敷であつたなど皆その例で、現に高輪御殿や閑院宮邸では昔の大名屋敷の門構へが、今日も其のまゝ俤を殘して居る。

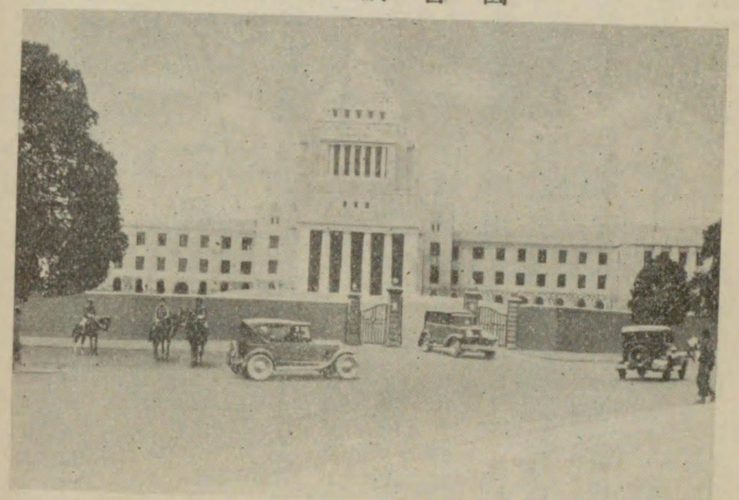
# 五　政治的中心としての東京

## 一　議院

國會議事堂即ち議院は永田町の丘上に新たに建築された。實に東洋第一の大建築で、大東京建築物の王者である。その敷地は約六百八十アール、建坪百二十五アール、三階（一部分は四階）建地階附きである。その正面の幅は二百六米餘、高さは二十一米あり、中央には高さ六十六尺の高塔が聳えてゐる。構造は鐵骨鐵筋コンクリートの花崗岩張りで、近世式の建築様式を用ゐ、室數は三百九十議場は貴族院、衆議院各七十五アール（四百五十疊敷）で、議席は各五百十九、傍聽席は貴族院が七百七十席、衆議院が九百二十二席ある。

本建築は大正九年一月の起工にかゝり昭和二年四月陳上式を擧げ、同五年その足場を徹去し、堂々たる雄姿を帝都の一角に峙てゝゐる。一度の微震にも影響を考へながら築くと云ふ、誠に石橋を叩いて渡る以上の周密な計畫の下に、而も全部を日本人の手だけで築き上げ様と云ふのであるから

國會議事堂



五　政治的中心としての東京

愉快である。內部の裝飾及び施設の完成は昭和十年の豫定であつて、その總工費實に二千八百萬圓現在の議院が一坪當り八十圓と云ふのに對して、新院は一千二百四十八圓と云ふ桁違ひである。之が竣成をまつて移轉すべき現議院は內幸町二丁目にあり、明治廿三年假建築に於て第一回議會を開かれたが、翌廿四年一月火災にあひ、再建したものが現在の議院で、こゝに昭和七年まで前後六十回の國會は開設されたのである。

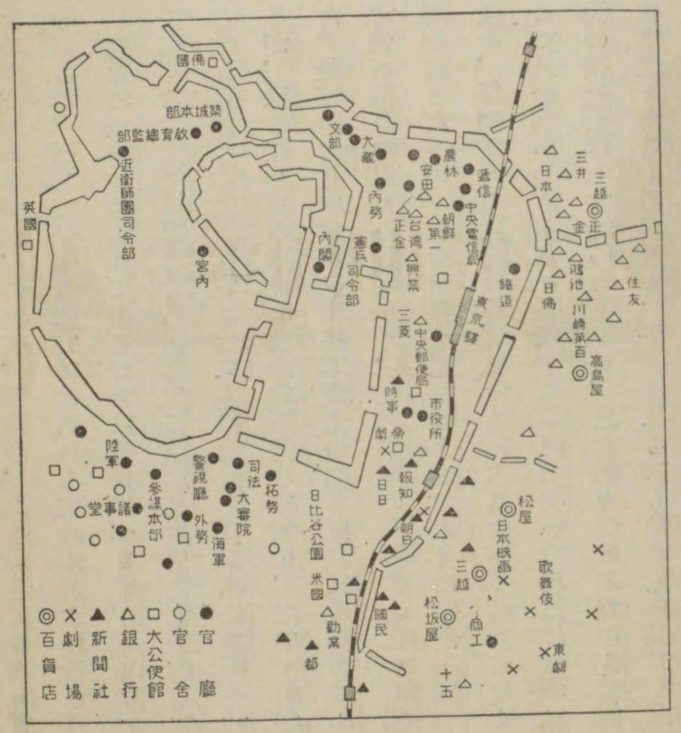
## 二　中央諸官衙

東京は帝都の地であつて、萬機を總攬し給ふ天皇陛下の宮居の下には、內閣各省を始めとして立法、司法、行政の各機關が皆備はつて居る。我が大日本



帝國がどう云ふ風に動くかと云ふ大方針は、總て此處に於て樹てられるのであつて、恰も人間の腦髓に當り、全國への神經系統は皆此處を中心として走る。

都心




二　中央諸官衙

即ち宮城內には內閣を始めとして、樞密院、內大臣府、宮內省の諸官衙があり、城東の大手町には文部、內務、大藏、農林、遞信の各省、內閣印刷局、賞勳局、恩給局、法制局、資源局、社會局、特許局、中央電信局、電話局、會計檢査院等があり、更に城南には西日比谷町に拓務省、司法省、大審院、東京控訴院等があり、之に續いて霞ケ關

には海軍省、海軍軍令部、外務省、警視廳、又永田町には陸軍省、參謀本部、國會議事堂、鑛山監督局等がある。而して是等の諸官衙は何れも國政運用上に於ける能率增進を實現せしむる爲に地理上の特殊な地域に集められて居ることは注目すべきで、即ち今日では大手町から櫻田門外に出て霞ケ關・永田町に至る一帶に亘り、東京の所謂官衙街を形成して居る。

抑〻江戸時代には市中の到る處に大名屋敷があつて、宏壯な其の構へは大に人目を惹いて居たのであるが、殊に江戸城の附近には譜代諸侯の邸宅や、老中・若年寄の役宅等大きな建物が立ち並んで居た。是等の大名屋敷は三代將軍家光の頃參覲交代の制が敷かれてから後は、諸侯藩治の中心として常住の侍や使用人の數も多く、江戸繁榮の一要素となつて居たのであるが、一度明治維新となり廢藩置縣となるや、社會組織の變化によつて大きな痛手を蒙つた藩侯等は、さほど用もない廣大な屋敷を、新制度の租稅を收めてまでも持ちこたへる必要がなくなつて來た。

そこで此の廣い大名屋敷を手離すものは相次いで現はれたのであるが、何分にも幕末以來經濟界大恐慌の後を承けた當時のことゝて、之を引き受ける程の人は容易に見つからない。こゝに於て曾ては偉風堂々たる大名屋敷も、今では見る影もなく荒れ果てゝ來たのである。

斯くて之がために東京は一時其の繁榮を殺がれると云ふ樣な狀態であつたが、然し一方では此の荒廢し切つた廣い大名屋敷の存在が、官衙、學校、兵營等廣大な敷地を必要とする建物のために、容易に土地を提供し得る便宜があつたので、東京が近代都市としての目覺しい發展をなす上に、之が非常に好都合であつたことは忘れてならぬ。

現に宮城前の廣場は幕府諸役宅の邸趾が一時兵營に利用され、軍服嚴めしい人々の常住地であつたが其の兵營の移轉から廣場となり、宮城の正門には極めて、ふさはしい今日の美しい外苑となつたのであるし、又其の濠外にあつた松平、小笠原、北條、南部等諸侯の屋敷趾は、曾ては練兵場として、日々の敎練に喇叭の音が勇ましく吹奏されて居たのであるが、今では近代式の日比谷公園やモダン建築の官衙街となつた。其の他稻葉、牧野、織田諸家の邸趾である三菱ケ原には凱旋道路が開け、西洋建築を建て並べた會社街が出來、更に次から次へと殖えて行く高層建築の出現によつて丸の內の一帶は歐米の都市にも劣らぬ近代振りを見せる樣になつた。

されば今日中央諸官衙が宮城を中心として其の周邊に集まり、恰も大東京の官衙地域を形成せる觀があるのも、封建政治の中心地であつた江戸の一つの餘澤であるとも考へられるのである。

## 三　各　官　邸

官邸は主に霞ケ關から永田町にかけて集まつてゐる。霞ケ關には海軍大臣、外務大臣、衆議院議長の各官邸があり、永田町には一丁目に陸軍大臣、鐵道大臣の官邸、二丁目に總理大臣、文部大臣大藏大臣、農林大臣、內閣書記官長の官邸がある。又この一帶から南には內務大臣官邸(外櫻田町)司法大臣官邸(西日比谷町)、貴族院議長官邸(內山下町)等があり、北には宮內大臣官邸(一番町)侍從長官邸(一番町)、商工大臣(上二番町)、拓務大臣(下二番町)、遞信大臣(四番町)等の官邸がある。

中にも總理大臣官邸は褐色のタイル張りで、角と丸とを巧みに配合した最近代樣式の建築はモダン官舍として永田町の一名物となつて居る。

## 四　各國大公使館

各國大公使館も亦官廳地域及び丸の內に多く、更に之から澁谷町にかけての山手方面に散在してゐる。

麴町區では永田町に獨逸國大使館、墨西哥國公使館、葡萄牙國公使館(三年町)、霞ケ關に伊國大使館があり、內山下町に米國大使館、智利國公使館(帝國ホテル內)、ルーマニア國公使館(東拓ビル內)があり、又丸の內には諸威國公使館、丁抹國公使館、秘露國公使館(太平ビル內)、カナダ國公使館(愛國生命ビル內)がある。又北方にかけては五番町に英國大使館、飯田町に佛國大使館があり、麻布區には中國公使館(飯倉町)、ソヴイエト聯邦大使館(狸穴町)、西班牙公使館(市兵衛町)の外、簞笥町にチエツコ・スロバキヤ國及びフインランド國公使館があり、材木町に瑞典、ペルシヤ、ポーランド各國の公使館がある。

赤坂區には、ブラジル國大使館(表町)、芝區に和蘭國公使館(榮町)があり、市外澁谷町には土耳共國大使館(松濤)、アルゼンチン國公使館、瑞西公使館(神宮通)があり、千駄谷町にシヤム國公使館がある。

又領事館には麴町に米國總領事館(東拓ビル內)、諸威總領事館(有樂町一丁目)、チエツコ・スロバキヤ國名譽領事(有樂町一丁目)、丁抹國領事館(丸の內)、英國領事館(日本興業銀行內)、ソヴイエト聯邦總領事館(裏霞ケ關)があり、芝區にメキシコ國名譽領事(三田)、ルクセンブルグ國名譽總領事(高輪南町)があり、麻布區には和蘭國領事館(笄町)がある。

是等締盟國の祝祭日は一月廿一日露國、四月七日希臘國、五月三日波蘭國、五月十七日西班牙國五月廿五日アルゼンチン國、六月三日英國皇帝誕辰、六月十六日瑞典、七月四日米國獨立記念日、

七月十四日佛蘭西國祭日、七月廿八日秘露國、八月一日瑞西國、八月三日諸威國、八月十一日獨逸憲法記念日、八月卅一日和蘭國、九月十六日メキシコ國、九月十八日智利國、九月廿六日丁抹國、十月五日ポルトガル國、十月十日中華民國々祭日、十月廿八日チェツコ・スロバキヤ國、十月廿九日土耳共國、十一月八日シャム國、十一月十一月伊國皇帝誕辰、十一月十五日ブラジル國際日、十一月十五日白耳義國、十二月六日フインランド國等であるが、多くは獨立紀念日や皇帝の誕辰日である。世界的日本の首府たる東京市民として、是等締盟國の祝祭日には、相當祝意を表する處がなくてはならぬ。

# 六　産業經濟から觀たる東京

## 一　大東京の經濟的特質

大東京は、西の大大阪と相並んでわが國經濟の大中心地である。一般に世人は大阪が古くから純粋の産業都市として發達して來たのに對して、東京は江戸幕府以來我が國の首府として發達して來たがために大阪と云へば直ちに經濟を頭に浮べ、東京と云へば先づ政治を聯想する風がある。殊に日本が近來支那、南洋或は朝鮮・滿洲等に向つて政治的にも經濟的にも交渉が多くなり、國民今後の活動發展も多く此の方面に向つて行はれようとして居る關係から、經濟的重心も西に偏して考へられる事が少くないのであるが、然し事實經濟界の全領域に亘つて觀察すれば、寧ろ東京が我が國の代表的經濟中心地であるかの感がする。

東京と大阪では其の經濟的方面に稍相違がある。即ち大大阪の經濟的中心は、工業の方面に於て異常な發展がある。數萬人の職工を擁して、資本主義的に生産せられる大規模な工場、畫なほ太陽

を被ふ林立する大煙突のうちに、經濟都市としての大大阪の本來の姿が見られるに反して、大東京の經濟的特徴はいふまでもなく商業の方面である。

東京は大江戸の昔から大消費の都市であつて、その點は今も昔に變らない。然しその水陸に於ては四通八達の交通機關を有し、汽船、汽車、電車、自動車は遠近の物資を流れ込ませ、一方では市内外の工場で造られた物資を盛んに送り出してゐる。更にまた横濱港を通じて世界の各地とも物資の交換が盛んであるから、是等の點から觀て今日の東京は、獨り消費のみでなく、廣く内外各地に莫大な商品を集散する、所謂近代商業都市としての活躍に於ても頗る目覺しいものがある。

從つて東京には各種の商業上の機關が完備してゐる。近代に於ける經濟運行の中樞である金融機關に於ても、我が國唯一の發券銀行であり國民經濟の中心的大黒柱である日本銀行を始めとして、正金銀行、勸業銀行、興業銀行、民間の五大銀行等は、皆其の本據或は大營業所を此處に持つて居るし、又株式取引所、各種證券及び商品の取引所等を見ても、何れも皆我が國經濟界の大中心としての活況を續けて居る。

現に各大都市の商業の大體を測定し得る所の手形交換高に見ると、東京は昭和三年に於ては三百十九億圓、同四年に於ては二百五十億圓であつて、大阪よりは常に百億圓内外をリードしてゐる。

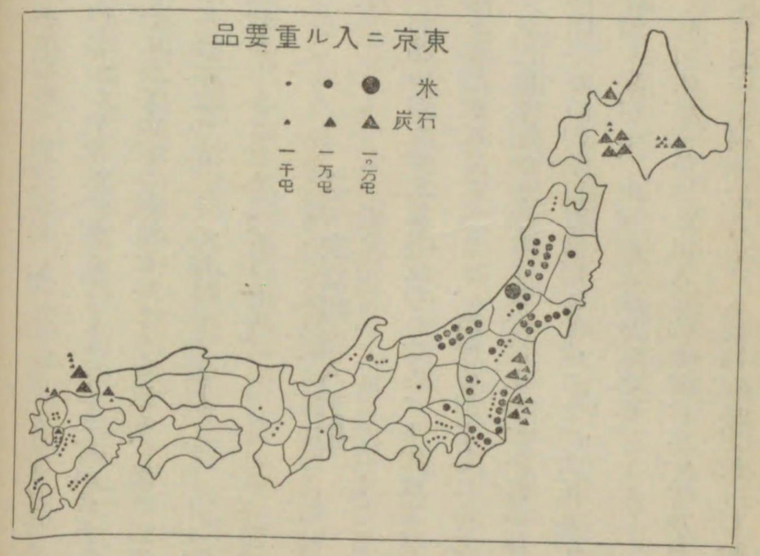
日本全國の手形交換高六百三十億圓の約半ば近くを獨占する東京手形交換所の盛況は、東京が今日海内第一の商業經濟都市であることを肯かせるものであつて、曾つては經濟都市としてのあらゆる方面に於て大阪の後塵を拜した東京も、維新以來素晴らしい發展によつて今や斷然優勢な地位を占める樣になつた。その他市場の發展、デパートの活躍、工業界の飛躍等に見ても、新東京の著しい發達がうかゞはれるのである。

## 二　主な移出入貨物

前述の如く偉大な消費のモンスター大東京は、夥しい貨物を年々移入してゐる。更にこの移入貨物を種類別に見るときは、消費の都としての大東京の姿を、より明かにつかむことが出來る。

最近數年間の平均による大東京一ケ年間の移出入貨物の總計は約千八百萬噸に達し、震災前五ケ年間平均の約千二百萬噸に比べると、大凡五割の增加を示してゐる。而して、貨物の出入の割合は大體入貨が七、出貨が三の比である。

昭和四年に於ける出入貨物の總計は一千八百七十二萬噸で、入貨が一千五百四十五萬噸、出貨が三百二十七萬噸である。入貨物の中、最も多いのは鑛山品でその量七百五萬噸、砂利（二百七十萬




噸）と石炭（二百六十三萬噸）とが斷然多い。そしてその殆んど全部が大東京で消費されて、再輸出される分量は極めて少い。これ等の外に、石材五十一萬噸、セメント類、五十三萬噸、鐵及び鋼四十三萬噸に達してゐる。又近年とみにその需要を增して來た石油の移入は、五萬噸を遙かに超えてゐる。

林産物のうちでは木材の移入が最も多く、二百六十萬噸を超え、全移入品中砂利に次いで第二位にある。これ蓋し復興建築の旺盛であつたためでもあらう。木材に次ぐものは木炭で、これは四十五萬噸に達しようとしてゐる。同年の木炭の移出が僅かに七千噸にすぎない事から見て、大東京では一年間に四十五萬噸の木炭を灰にしてしまふわけである。

農産物のうち最も數量の多いのは、いふまでもなく米である。われ〳〵日本人の生活のために缺くことの出來ない米の移入額は約九十萬噸、これに次いで大豆の二十一萬噸、果物の十八萬噸、麥の十二萬噸、野菜の八萬噸などである。

水産品では、活鮮魚の十八萬噸、鹽の十三萬噸が主であるが、水産物の移入量は一般に少い。數量の少い點に於いて注目すべきは鮮肉の移入量で、僅かに三千五百噸にすぎない。之に牛豚の移入を加へても、大東京で一年間に消費する畜産品は約七萬噸である。

工業品に於ては砂糖の三十萬噸、洋紙の二十二萬噸、藥品の十八萬噸、機械の七萬噸、味噌及び醬油の八萬噸がその主なものである。

次に出貨物では工業品の七十一萬噸を第一とし、之に次ぐものは鑛産品の五十七萬噸、林産品の二十一萬噸、農産品の十萬噸であつて、中でも工業品は人造肥料の二十五萬噸、鐵鋼製品の十九萬噸、精糖十四萬噸、機械の六萬噸等を主とし、何れも市の内外で生産されるものである。又、鑛産品は、石炭二十三萬噸、鐵及び鋼十五萬噸等で、木材の二十萬噸と共に再移出である。再移出にはこの外大豆、鮮魚、セメント、砂利等何れも五萬噸内外のものがある。とにかく工業加工品が大東

京移出の大部分を占めてゐることは、市の工業的飛躍の點に於て注目すべきである。

## 三　市場の發展

五百萬に近い大東京の人々は必ずしも、經濟的活動に從事するものばかりではない。政治、軍事、學術、文藝等種々なる經濟外の活動に從事するものが極めて多い。且つ人口の限りない增加と、慾望の停止するところなき向上の結果、大東京の消費は眞に文字通り加速度的に增大して來た。この年毎に進む文化的慾望による生活物資の需要は、愈大東京をして我が國第一の消費の都たらしめたのである。而して之が供給の總元締とも云ふべきものが市場であつて、その主なるものは、魚市場、米市場、青物市場、獸肉市場及び公設市場である。

魚市場は築地海岸にある市營魚市場と、日本橋の四日市々場と大森及び千住の民營魚市場とがある。今日大東京で消費される生鮮魚の約四割は千葉、神奈川、靜岡等の所謂近海產で、約三割は三陸方面及び北海道から、殘りの三割は其の他の諸方面から移入され、其の移入機關としては約三分の二が鐵道、殘りの約三分の一が海運によるものである

築地魚市場は大東京の生鮮魚の需要を一手に引受けて、一年の入荷數量は二十三萬噸に及び、取引額は凡そ七千萬圓に上る。毎日二萬人からの買出人が未明の頃から此處に群集するのであるから素晴らしい。

四日市々場は鹽、乾魚市場であつて、將來は中央市場に抱括される筈である。

米取引の市場としては神田川米穀市場と、東京廻米問屋市場とが主で、東京人の飯米として消費される一ケ年約三百九十萬石からの米がこゝで取引される。而して其の中の約三百八十五萬石迄は內地米であるから、之が搬入の機關は勿論陸運の鐵道である。

獸肉市場は芝浦埋立地に家畜市場と合せて建設されることになつてゐるが、今では三輪、千住、寺島、龜有、野方、大崎等の屠殺場によつて供給されてゐる。牛馬豚等の獸肉は近年その需要とみに增加し、大東京一ケ年の屠殺數は三十萬頭を超え、更に海外及び內地各地から生鮮肉の輸移入が年々增加して來て、一ケ年の生肉消費量は約六萬噸に達してゐる。

青物市場は、昔からヤツチヤ場で知られたもので、今では市の內外に三十九ケ所もある。市營には築地の中央卸賣市場と、神田及び江東の二分場があり、他は民營である。

神田分場は秋葉原驛に近い山本町にあつて、年取扱高は三十二萬噸、價格約二千萬圓。江東分場は兩國橋驛に近い所にあつて、年取扱高約八萬噸、價額六百萬圓である。

民營では市內に京橋、芝、二本榎、廣尾、坂下、青山、松屋、大塚、駒込、三輪、下谷の十ヶ所あつて、駒込市場は天正年間に創立されたものであり、京橋、青山、松屋の各市場も元祿以前から存する古い歷史を有するものである。

又市外には四十八ヶ所もあつて、中でも千住及び大崎の市場は最も古くして天正時代の創立であり、千住市場はその一年間の取引高二百二十萬圓で、此等の中では最も大きいものである。

是等小市場は將來整理統一するために荏原方面、豐島方面乃至豐多摩方面に、中央市場の分場を設ける計畫がある。

公設市場はかの中央卸賣市場法に基く市場とは全く別な關係にあるもので、その趣旨とするところは日用品を市場で調節し、その標準價格を示すと共に、一面社會事業的意味をもつてゐるところの小賣市場である。現在市設市場は飯田町、築地、赤羽橋、霞町、市ヶ谷、駕籠町、眞砂町、富士、入谷町、三味線堀、業平町、綠町等十三ヶ所にあつて、約四百萬圓の賣上あり、府設市場は三十四ヶ所、約三百四十萬圓の賣上高がある。

この外、市場には生花市場がある。大東京の大需要によつて近年勃興した民間の市場であつて、市內では日本橋生花市場（西緣河岸）、高級園藝總合市場（銀座西六丁目）、芝生花市場（三田四國町）、東京生花市場（本所瓦町）が名高いもので、その他市の內外を通じて十八ヶ所もあつて、その取引高は年四百萬圓に上つてゐる。これは三千餘の小賣生花商によつて消費者に渡り、その賣上年六七百萬圓に達するのである。

次に個人營業者を見るに、市內に於て一定の店舗を有し、府稅、營業稅を納むる總人員は昭和五年現在に於て十四萬七千に達し、淺草の二萬三千を第一として、本所の一萬八千、下谷の一萬五千神田、芝の各々一萬一千、深川、日本橋の各一萬が區としては多い處である。

以上の中、日用品店は五萬三千で、其の內譯は菓子の八千五百を最多とし、酒、醬油の三千六百、魚類の三千、蔬菜、荒物、白米の各二千九百、文房具及び書籍の二千五百、西洋雜貨の二千二百、薪炭の二千百、傘、下駄、賣藥、洋服の各二千、呉服、小間物の各千七百、家具の千四百、金物の千三百、靴、瓦斯、電氣、器具、足袋の各九百、玩具、漬物の各八百はその主なものである。

これらの商店を震災前に比べると大抵減少してゐるが、之はデパートの著しい進出の影響とされてゐる。

然し、魚類、家具、瓦斯電燈器具、文房具、書籍、硝子及び硝子器の五種類は却つて增加を示し、中にも瓦斯電燈器具店は四割の增加となつてゐるのは時代相の現れである。

かくして大東京購賣高八億圓の約八割は、是等の營業者によつて供給されてゐるのである。

東京市統計課の發表するところに從へば、現在東京市内にある店舗の數は約十七萬に達してゐる。(勿論このうちには銀行會社卸賣商等の大中小の各種營業が悉く包含されてゐるわけである。)即ち東京市内の總世帶數の三分の一は、各種の營業に從事してゐるわけである。

而して小賣商は前述の通り五萬三千であるから、日用品販賣店は現在東京市内では、約九世帶について一軒の割合に當るわけである。

これによると、市内に如何に過剰の小賣商がとも食ひをしながら呻吟してゐるかゞわかる。この關係は市の郊外でも變りがない。而してこれら小賣商一軒あたりの年純收は今日では僅々五百圓位と推定されてゐる。されば輓近經濟界未曾有の不況につけ加へて、デパートの驚異的進出に壓迫され、市の内外の小賣商は非常な難境に陷つてゐるのである。

## 四　デパートの活躍

大東京のデパートは、江戸時代からの大呉服店が、其の經營の方法を新しく歐米の組織に改めたものが多く、三越がその始まりであつた。其の後、白木屋、松屋等も個人經營から株式組織に改め、大資本主義的經營となつたので、今では前三者の外松坂屋、高島屋、布袋屋、丸菱、伊勢丹、美松等も之にならひ、又西川、伴傳、柳屋、三省堂、博品館等も右百貨店類似の經營法を採つて居る。

三越は日本橋の本店の外、銀座と新宿に分店を有して從業人員四千人と稱せられ、白木屋は華麗なる日本橋の本店の外、神樂坂と大塚に小分店を有し、又松坂屋は上野廣小路交叉點の要路に地階屋上合せて十階、總坪數八千五百坪の堂々たる店舗の外、銀座に支店を開き、更に新宿に進出して山の手に勢力を張らんとし、今川橋の松屋は京橋と淺草東武ビルに分店を作つて活躍し、神田の伊勢丹も新宿に分店を設け、京橋の高島屋も各所に小分店を設けてゐる。

其の他布袋屋は新宿に、丸菱は丸の内丸ビル内に、美松百貨店は日比谷常磐ビル内に店舗を張つて居る。

即ち日本橋、銀座、新宿は百貨店の三大集合地であり、之に次いで上野、淺草、丸の内、日比谷等、人盛りの多い處にその大店舗が峙つてゐて、無數の顧客を呑吐してゐる。

これ等百貨店の賣上高は不明であるが、商工省の調査によれば大東京の最近一ヶ年購賣高の二割に當る約一億六千萬圓が、三越、松坂屋、松屋、白木屋、高島屋、五大百貨店の賣上と見れば大差ないと推計されてゐる。

百貨店は大資本により大量生産を前提とする近代資本主義的企業で、現時主要な百貨店の資本金は三越の三千萬圓を筆頭として總額七千萬圓を超えてゐる。

百貨店の發展は小賣店を根柢から壓迫しつくして、今や都下の小賣店は死活問題に直面してゐる。今日大東京の住民は老若男女を押しなべて、一年平均四十圓近くの金をデパートに献上して居る譯で、勿論其の金額は市民の年消費額としては一割か二割に過ぎないが、極めて少數のデパートが之を獨占する處に問題が起る。かつては同業者として競爭しあつた小賣商人同志が、相提携して百貨店にあたらんと策し、苦しまぎれに聯合賣出しなどをやつてゐるが、根本的の救濟策は容易に光明が認められない。今後百貨店對小賣商の問題は、大東京商業界の重要問題となつてゆくであらう。

是等百貨店が、近來大東京の新しい娯樂場として大いに頭を擡げて來た事は面白い。百貨店行きに大きな誇りを感じて居る東京人の見得坊を、商略に拔目のない營業者達が見逃して居る筈がない。そこで智慧を絞つた各種の催物が次から次へと考案されて、鐘太鼓で連りに宣傳される。今では三越、白木屋或は松坂屋へ出かけることは、東京人には恰も物見遊山にも等しい樂しみである。

親子、夫婦の家族連れで朝から押込んで來る。子供をエレベーターに乘せて見たり、屋上で小動物園の熊を見せたり、品物を眺めて品定めをしたり、休憩室へ入つては接待のお茶を飲んだり、御飯時になれば家族一同食堂に這入り、演藝場が開かれると洪水の様に流れ込む。行樂の半日をデパートの人混みの中で過し、マーク入りの包紙を誇らしげに下げて家路を辿る幾組かを乘せて、省線電車は勇ましく走る。

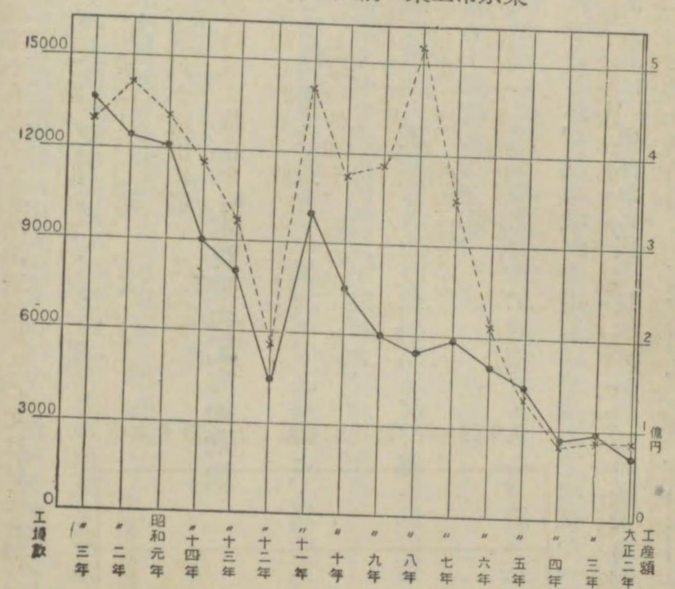
## 五　大東京の工業的飛躍

明治維新後政府當局の周到な保護奬勵と、民間當業者の根强い努力とによつて、わが國の工業は實に驚くべき飛躍的發展を遂げた。

殊に世界大戰開始以後の發展振りは、遂に此の國をしてアジア洲の第一、隨つて世界屈指の工業國たらしめたのである。

我が國には四つの主要な工業地域がある。即ち京濱地方、阪神地方、名古屋地方、北九州地方がこれであるが、就中我が大東京は京濱工業地區の一部として、其の地域自身が我が國最大の消費地である上に、中部から東北日本にかけての廣大な後背地を有し、且海陸交通線の大焦點で燃料原料並びに生産品の集散に至便であり、勞働者の吸引も亦容易である等幾多の惠まれた地理的條件に祉

東京市工業の消長（各年末現在）

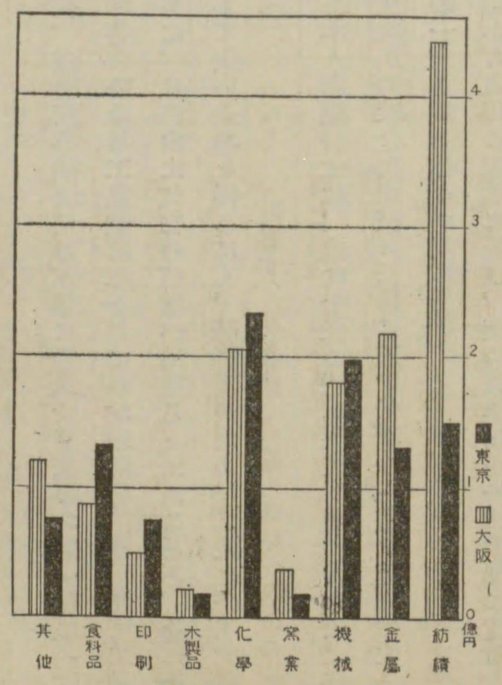





されて近年に於ける工業的發展は誠に目覺ましいものがある。

大東京の工業區は、工場の分布から觀てこれを大略三つに分けることが出來る。先づ其の一つは「江東工業地帶」で荒川放水路と隅田川との間にある低濕なる一帶、即ち本所、深川の二區と、それから砂町、大島、龜戸、小松川、吾嬬、寺島、隅田の諸町を包括した地域である。此の邊りはもと利根川や荒川が盛んに土砂を流して堆積した所であつて、比較的近年まで海の底であつた所、現在でも土地が頗る低濕なために、市民の住所としては餘り好適でない。從つて地質も自ら安く、地價の安い所だけに敷地に廣い面積を必要とする大きな工場を作るには好都合であり、更に地價の安い關係から家賃も安く、地方から集る工業勞働者等にとつては住宅を得るに誠に都合が好い。其の上此の一帶は隅田川と荒川放水路との間にあつて、中川小名木川或は江戸川等、いくつもの河川や運河が縱横に通じてゐるので、原料或は製品を輸送する上に非常に便利である。特に水運は陸運に較べると重い荷物や、嵩の張つた荷物を運ぶのに都合がよく、一度船に積んでしまへば、舵の操り方一つで何處の港にでも着けることが出來る。

東京大阪兩府工産種別比較（昭和四年）




陸運では制限があるが、船にはその制限が比較的緩かだから、大量の貨物輸送を目的とする處の紡績業の樣なものには、其の發達地として誠に誂へ向きである。

されば鐘ヶ淵の紡績工場、龜戸にある東洋モスリン、或は大日本紡績、日清紡績、東洋紡績、合同毛織等の大規模な近代式工場は皆此處に集められて、纖維工業では此の一帶が我が國の重要な中心地の一つとして榮えてゐる。

第二の工業地域は王子を中心として千住、瀧野川等隅田川の西岸に沿ふ大東京の北郊一般に「江北工業地帶」と呼ぶ一帶であつて、この地帶に於ける工業發達地としての地理的條件は、江東工業地帶と同樣である。即ち水路によつて容易に、且自由に貨物の運搬が出來ると云ふことと、それから土地が低濕であつて、工場の建設地として廣い土地を得るにも、勞働者のために低廉な住宅を得るにも、好都合である點である。

されば此の地域には王子製紙會社、大日本人造肥料會社、或は千住の陸軍製絨所等の大きな工場が荒川の流水に沿うて建てられて、高い煙突から吐き出す濛々たる黑煙、低地の一帶を埋めて立ち並ぶ近代式の大工場等、此處に自ら工業の一大地域を作つて居る。

更に第三の工業地帶は、月島・芝浦・三田から古川の兩岸に延び、更に目黑川の沖積低地に當る大崎町及び品川町に及ぶ半環狀地帶で、機械器具の製造工場が多く、池貝鐵工所、東京市營の電氣局濱松工場、鐵道省の大井工場等はそれらの中でも特に目立つ。

斯くて今日大東京地域内にある工場の數は約三萬七千、勞働者の數は二十五萬に近く、其の一ケ年の生産額は約十億圓にして、日本工産物全産額の大略七分の一に當り、大大阪に亞いで全國中第二位を占めて居る。

大東京工業産額及工場數（昭和三年）産額單位萬圓　工場職工五人以上

| 工場區郡名 | 雜 | 特別 | 計 | 工場 | 染織 | 機械 | 化學 | 飲食物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 麹町 | 二七九四 | 四一五九 | 七一三八 | 九四 | 一五 | 六四 | 七 | 九九 |
| 神田 | 八六八 | 四四五 | 二九九八 | 三〇三 | 八六 | 一二一六 | 二〇四 | 一八〇 |
| 日本橋 | 一二五 | — | 五一八 | 一五五 | 一四 | 一八 | 一四六 | 二一五 |
| 京橋 | 一六三八 | — | 四八五七 | 四三二 | 二一 | 二五八〇 | 一八九 | 四三〇 |
| 芝 | 四八三 | 五六六 | 一〇六九三 | 五九七 | 二八 | 四五一五 | 一九六 | 四九〇五 |
| 麻布 | 九四 | — | 八六七 | 一三五 | 一八 | 四三〇 | 二六六 | 五九 |
| 赤坂 | 四九 | — | 一三一 | 四二 | 一〇 | 二四 | 一五 | 三三 |
| 四谷 | 二一八 | 三四六 | 五九四 | 四四 | 九 | 九 | 六 | 一四 |
| 牛込 | 五八四 | — | 八五一 | 六六 | 一八 | 一八 | 一九九 | 三二 |

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 七五 | 三二九 | 五三四 | 一四五 | 一八八四 | — | 二七七二 | 一八一 | 小石川 |
| 二〇 | 八三 | 四七 | 一四四 | 三〇一 | 三九四 | 九八八 | 一一一 | 本郷 |
| 八五 | 二三四 | 一五三 | 一五三 | 六七九 | — | 一三〇四 | 二一四 | 下谷 |
| 一三六 | 二七五 | 六三 | 二四六三 | 四六〇 | 二六三 | 三六六〇 | 三四三 | 淺草 |
| 一三三六 | 二四八四 | 九二六 | 一五〇二 | 九九一 | 二一五 | 七四五四 | 九八七 | 本所 |
| 九四 | 二二九一 | 一七一〇 | 六六九 | 二四九 | — | 五〇一三 | 四二四 | 深川 |
| 七七七二 | 六三五三 | 一一四六七 | 四四八〇 | 二〇 | — | 三〇九四八 | 一一七六 | 南葛飾 |
| 二〇六〇 | 二七一四 | 六一七九 | 六四八 | 一八三七 | — | 一三四三八 | 一一五二 | 北豐島 |
| 五八八 | 四二 | 七三六 | 六九 | 三一〇 | — | 一七四五 | 七六 | 南足立 |
| 二三〇 | 一三四五 | 八九六 | 二七七三 | 三六〇 | — | 五六〇五 | 三二八 | 豐多摩 |
| 九四四 | 四一二七 | 三四八八 | 一六五六 | 一三〇一 | — | 一一五二六 | 八三四 | 荏原 |

## 六　金融機關の活動

金融機關の中樞はいふまでもなく銀行である。

新日本に於ける銀行の始祖は明治六年、我が東京の日本橋で開業された第一銀行である。當時は第一國立銀行といひ、故澁澤子が頭取として中央金庫の格式を有してゐた。

その後明治十五年日本銀行が創立されて、我が國唯一の兌換券發行銀行となつた。爾來幾多の大小銀行が出來たが、財界の進展と共に或は合併され、又は洗練されて內容は益々充實し、今日では大東京地域內に本店を有するもの約四十、其の預金總額は約二十二億で、全國總額の約三分の一を占めてゐる。

銀行の預金及び貸出しの增加と企業界の發展に從ひ、手形交換券は驚くべき增加を示して來た。東京交換所に於ける交換金額は明治四十年頃は約三十億圓であつたものが、大正十五年には三百九十五億圓となり、昭和五年には財界不振とはいふものゝ尙二百十四億圓に上り、全日本の四割を占め、今や紐育・倫敦と相並んで世界金融經濟の一大中心となつてゐるのである。

日本銀行は日本橋區本兩替町にあつて、云ふまでもなく我が國唯一の發券銀行である。現在では八億五千萬圓の正貨を有して約十一億圓の兌換銀行券を發行し、その正貨準備率は極めて大である。然し昭和五年一月、多年の懸案たる金輸出解禁の斷行により、正貨の輸出二億圓以上に達したので再び同六年十二月禁止の止むなきに至つた。日本勸業銀行は麴町區內山下町にあつて、明治二十九

年の創立で資本金一億圓、開墾、治水、灌漑等主に農業のために十億圓の貸付をなしてをり、日本興業銀行は丸の内にあつて、明治三十五年の創立で資本金五千萬圓、各種の工業、鐵道、築港等の事業に三億五千萬圓の貸付をしてゐる。何れも營業資金は債券の發行によるので、前者は七億圓後者は三億圓を發行してゐる。

第一銀行と三菱銀行とは丸の内にあつて資本金前者は五千八百萬圓、後者は一億圓であり、安田銀行は大手町にあつて資本金一億五千萬圓、三井銀行と川崎第百は日本橋にあつて資本金は前者が一億圓、後者が三千四百萬圓である。これ等五大銀行の預金總額は約三十億圓、貸付十八億圓に達し全國金融界の樞軸をなしてゐる。

銀行事業と相俟つて金融界に新使命を擔ひつゝあるものに信託會社がある。歐洲大戰後急激に發展したもので丸の内の三菱信託（資本金三千萬圓）日本橋の三井信託（資本金三千萬圓）京橋の國際信託（資本金五千萬圓）千代田信託（資本金四千萬圓）を主なものとし、その外大阪に本店を有する丸の内の安田、鴻池、日本橋の住友の各信託があつてその信託財産總額は十三億圓に達してゐる。

又、一般庶民の節約勤勉の良風を養成せしむるを目的とするものに貯蓄銀行があつて、一ヶ年の入出金三十四億圓。その他中産階級に於ける金融機關として無盡會社があり、大衆の簡易な小額資本の金融機關として一六銀行の綽名を有する質屋がある。

明治四年に於ける大東京の無盡會社は二十七あつて、その契約高は三億圓を超えて居り、質屋は千三百七十餘、その貸出額約三千萬圓である。

無盡會社の大きなものは、淺草の相生（契約高一億二千萬圓）京橋の共盛（契約高二千七百萬圓）本所の東京復興（契約高千八百萬圓）及び東京共立（契約高千六百萬圓）神田の帝國（契約高千五百萬圓）等であり、質屋の多いのは本所（八六）淺草（八五）本郷（六六）下谷（六一）小石川（六〇）の各區と市外では荏原（一〇三）巣鴨（五六）千住（四一）王子（四〇）中野（三四）の各町である。

## 七　株式其の他の取引所

大東京に營まれてゐる取引所には、株式、米穀、綿糸、大豆粕、砂糖等がある。

株式取引所は有價證券の大量的な取引機關である。近代資本主義經濟中に表はれた著しい現象の一つは、財産の證券化である。さればこの證券の取引をなす株式取引所こそは、實に現代資本主義

社會の典型的縮圖であるとも云ひ得られる。

東京株式取引所は日本橋兜町にあつて現在東京唯一の有價證券取引所である。その創立は明治十一年五月。二十萬圓の資本金をもつ株式會社として設立された。當時わが資本主義經濟が未だ幼稚であつて取引高も極めて少なかつた。しかし、この資本主義經濟が發達し、殊に世界大戰の結果、經濟界が未曾有の好況に惠まれるや取引高は飛躍的に增大し、大正八年には株式長期淸算四千萬株、實物五百五十萬株、その金額六十億圓の多きに達した。然るに大戰後、反動的の不況の襲來は取引高を漸減し、株式長期淸算二千八百萬株、實物七百四十萬株、短期二千萬株、その金額六十億圓（昭和三年）となつた。

東京米穀商品取引所は日本橋區蠣殼町にあり、明治九年の創立で資本金七百八十萬圓。その組織は三部に分れてゐる。第一部は米穀（蠣殼町）第二部は綿絲（堀留町）第三部は大豆粕（深川佐賀町）で別に正米部として神田川米穀市場（佐久間町）と深川米穀市場（佐賀町）の二ケ所がある。

# 七　文教學術の淵叢たる東京

都市は何れの國を問はずその國文化發生の地であり發育の境である。江戸三百年の泰平の世は所謂江戸時代として、我が國文化史上の特徵ある時代を產んだ。明治、大正を經て、昭和の聖代を迎へた東京の文化も、震災といふ自然の災害を被つて一大飛躍をすることゝなつた。而して先づその表徵は今日の帝都の教育施設にうかゞふことが出來る。

## 一　小學教育

近時躍進的にその進步發達を示せるものの一つで、何人も閑却することの出來ないのは大東京の小學校教育事業である。親が我が子に對する態度程眞劍なものはない。其の後繼者として、自己生命の延長である我が子の將來に幸多かれと祈るのは、總て人の親としての共通性である。殊に幼弱なるものに對するいとしさから、所謂「よい教育の徹底」のためには親は身の皮を剝いでも設備の完全を希ふ。

更に往年大震災の傷痍深うして、市民の絶大の努力によつて假令形而上の復興は一段落を告げたりと雖も、眞の本質的復興は之を今後十年乃至二十年の將來に俟たねばならぬ東京市としては、新日本帝都の復興と、世界的大東京の完成のために、第二市民の教養に關しては細心の注意を拂ひ年々巨費を投じて施設と充實刷新に努め、相俟つて我が國文化學術の中心たる今日の特色を象徴せしめて居る。

現在大東京區域内の小學校の數は、官公私立を通じて約五百を以て算せられ、兒童數は實に五十萬を突破し、その教員數は一萬二千人に垂んとして居る。誠や鐵筋コンクート三階建の堂々たる校舍は都會を美化し、禧々として此處に通學する洋裝輕快な兒童の姿は、可愛ゆくもあり又頼もしくもある。

五十萬と云へば正に我が國の六大都市の一に算へられて居る神戸や横濱市の總人口と匹敵する。大東京、明日の充實發展の是等可憐な兒童の双肩にかゝるを思ふ時、其の教育のために、親も當局も眞劍の力瘤を入れて居るのが首肯かれる。

扨て、五十萬の小學兒童を舊市内と新市とに分けると、大體に於て舊市に屬するものが二十二萬新市に屬するものが二十八九萬で、現に新市の方が遙に舊市のそれを凌駕して居るのみならず、年と共にこの開きは大きくなつて行く傾向が顯著である。

震災前までは舊市内の人口も殖え、從つて學齢兒童も年々漸增の一路を辿つて、市當局は毎年學校の新增築に追はれたものであつた。然るに大正十年を限界として、從來漸增の兒童は反對に漸減の傾向に變つて來た處へ、大正十二年九月の空前なる大震災に見舞はれた帝都は、それでなくても人口が飽和狀態に達して居た事とて、急に市内より市外に移るものが殖え、市外發展の勢ひは玆にその素晴しさを加へて來た。即ち市内の生活者の内で、比較的に物質に惠まれた所謂有産階級は俄に郊外に別邸を構へて家族をそこに置く、物質に惠まれざる階級は市内生活に堪へずして市外に逃避する、所謂サラリーマンの階級は至便な交通機關の發達に伴つて郊外の文化住宅を求めて移る。斯くてこんな關係で市立小學校兒童數は、大正十一年の約廿四萬人を最高記錄として漸次減少を告げて居るに反し、市外の兒童數は愈々益々增加して、舊市隣接町村の當局は何れも學校の經營に惱殺されてる狀態である。

若しそれ、多年の懸案たる東京特別都制の問題が解決された曉、萬一東京府の全體が、大東京の地域にでも包括されようものなら、今日でさへ已に六十萬を拔いて居る府下の小學兒童數は、期年ならずして七十萬八十萬を稱へて、大東京の小學教育はいやが上に繁昌することであらう。